
月虹-運命交叉-

Forseti

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月虹 - 運命交叉 -

【Nコード】

N2430D

【作者名】

F o r s e t t i

【あらすじ】

ふらふらと砂界を旅する男と人を助ける事を使命とする女。不死の力を受けた二人の男女の出会いの物語

&l t ; 接触 & g t ;

月虹

運命交叉

i n 6 2 8 3 m o n t h

c h a p t e r 1 > 接触 <

- - S i d e H o r u s - -

めんどくさ・・・。

「ヒヤハハッ！ 兄ちゃん。運が悪かったなあ？
ここら辺一帯は俺らの縄張りなんだわ」

目の前には曲刀を持って下卑た笑いを浮かべている奴らが・・・七匹。

徒歩での移動は久しぶりだったが、
砂海の治安がここまで荒れているとは誤算だった。
こんな事はここ一ヶ月で四回目。

正直この先の展開なんて分かっているんだからとつと始末した
い所なんだが・・・。

ため息をつく。

『そうもいかないんだよな・・・』

「あん？」

『あーいえいえ。そうですか。それで私はどのようにすれば宜しいのでしょうか?』
勤めて愛想よく。

後ろの方から不愉快な笑い声が起こる。

先頭の男が手を出してきた。

「通行料だよ。通行料」

やっぱりそうですか。

『おいくらでしょう?』

笑顔は崩さずに一応聞いてみる。

目の前の男はニヤニヤしながら、そうだなあ、と顎に手をやり

「お前は中々見所が有りそうだからな。五千ジエムで勘弁してやる」

五千ってオイ。今までの中で一番たけーっての。

『いやーあいにくそんなに持ち合わせて無いんですよねー』

男の顔が一変して不愉快そうになる。

「アア!? じゃあその手に持つてる荷物を全部よこしな!」

『断る死ね』

即答。笑顔は崩さない。

男は呆然としながら、

「・・・今、何だった?」

『いやですからー。お前等のような害虫にやる荷物は持っていないわけでした、』

これ以上くだらない事をぬかしやがるつもりで御座いましたら死んで頂ければ幸いです、

と言っているんですよ。分かりましたか？ 害虫さん達』

害虫と呼ばれた者たちのこめかみに青筋が走る。

「アーン・・・だとコラアア！！！」

目の前の男が曲刀を振りかぶる。

はい、正当防衛成立・・・と

やれやれ、と呟きながら右手の指で【衝撃波】の印を紡ぎ、襲ってくるであろう曲刀を持つ手に向かって放とうとした刹那――

・・・あら？

曲刀を振りかぶっていた男がドサリと倒れる。

倒れた男の上、そこには一人の女性が立っていた。

- - Side Aura - -

照りつける陽の光。砂地からの反射熱。

そして時折天を覆いつくす砂の嵐。

砂海を渡る者は襲い来るそれらの猛威に対抗、あるいは回避する為に万全を期して旅をする。

彼女は意に介さない。

そういった【自分の命を守る為の準備】など必要が無いからだ。身に纏っているのは砂地の色にも似た薄黄色の軽戦闘服、ベルトにかけた二本の短剣のみ。

それは動きやすさを重視し、その服の色は僅かでも他の眼に自分の

姿を映し難くする為である。

その砂海の地を歩くには全く相応しく無い軽装で、
彼女は後ろに結んだ漆黒の髪を揺らしながら一人歩いていた。

- -

この辺りの筈だが・・・
足を止める。

周りを見渡すが特に変わった姿は見当たらない。
目をつむり、聴覚に気を集中させる。

聞こえて来るのは風が砂を吹き上げる音、
履いているブーツに砂が当たる音、
それと ほんの僅かに聞こえる話し声。

・・・いた

全身の感覚を聴覚から戻し、目を開く。
腰のベルトから二本、短剣を抜き取り、声がした方向へ颯爽と駆け出した。

- -

人の気配を感じ、足を止める。

・・・八人。内七人は武器を持っている、か
こちらにはまだ気付いていないようだ。

武器を持った連中、
明らかに砂海の盗賊の類だ。
目が吊り上がる。

自分達の欲望の為には周りの人間の積み重ねてきた物を
壊す事など何とも思っていない連中。

最近はまだでこの砂海の主でも気取ったかのように
砂海を渡る旅人から【通行料】などと言うものを要求しているらし
い。

馬鹿げている。

彼らのような存在には最大限の嫌悪を抱いていた。

武器をもっていないもう一人の男に目を移す。

・・・自らが【視た】者だ。

妙だな・・・

盗賊に囲まれているにも関わらず、

特に怯えた様子も無く何かを喋っている。

何よりその格好。

降り注ぐ熱を最大限に吸収してしまいそうな黒い法衣、

左手に持った小さな布袋。

砂海の旅人にしては余りにも無謀（人の事は言えないが）な風貌だ。

そんな観察している間にその男と話していた盗賊の一人が、

何か声を荒げ、殺気を放った。

まずい

右足のあった場所に砂を舞い上げ、風を切る。

その距離約三十メートル。

次の瞬間には曲刀を振りかぶっている男の背後に到達し、
後頭部を短剣で突き刺した。

男は自分の身に何が起きたか分からなかった。
全身から急激に力が抜け、ビクビクと痙攣しながら、砂の地に崩れ落ちた。

似合いの末路だ。

冷たく見下しながら右手の短剣に付いた血と脳漿を振り払う。

顔を上げると、黒い衣を着た金髪の男が目映った。

その顔にはやはり怯えや怒り等は見当たらず、

賞賛と僅かな驚きを見せた表情を浮かべている。

一瞬、男に対して言い知れぬ感覚を感じた。

妙な男だ・・・。

この男に聞きたい事は色々あった。

何故そのような格好で砂海を歩いているのか。

何故、自分に凶器を向ける盗賊や、

平然と人を刺し殺した自分を見る目に怯えという物が一欠片も無いのか。

そもそも何者なのか。いや 何故自分と同じ”におい”がするのか。

だが、今は先にやらなければならない事がある。

細かい詮索は後回しとし、一つだけ確認すべき事を訊ねる事にした。

『お前は、この男達の仲間か？』

問われた男は嫌そうに、はぁ？ と漏らした後、

「こいつらの仲間？ 勘弁してくれ。」

俺はそこに居る連中の理不尽な要求に困り果てたとこだ」

嘘を吐け。

直感的に違和感を感じた。

【仲間ではない】といった部分ではなく、【困り果てていた】という部分にだ。

ふん、と鼻を鳴らす。

『・・・そうか。なら良い』

別の六人の方へ向き直る。

盗賊たちはしばし呆然としていたが、そのやり取りが終わると、ようやく現状を把握した。

「な、な何なんだてめえは！？　なんて事しやがる！」
怒りと怯えが織り交ざった表情。

それに応えず彼らを鋭く睨み、ゆらりと短剣を構えた。

- - Side Horus - -

一方的な戦いだった。

盗賊達は抵抗するどころか、自分がどの様に攻撃されたかすら認識できず、

最初の一瞬で二人、その後彼女に剣を振りかぶって向かっていった三人が

次々に砂地に沈んでいった。

すごいなこりや・・・

目の前で起こった出来事に驚嘆した。

何故、一瞬にして五人の盗賊が地に伏す事になったのか。その過程については理解できた。

【縮地】 直線移動に限り、だがまるで瞬間移動したかのように移動する歩法。

最初の二人を仕留めた時、彼女はこれを用いた。

初動で直線状の二人を見据え、左右に短剣を構えた。

丁度二人のそれぞれの首の高さに調整して。

そしてただ彼らの後ろに向かって縮地を使い二人の間を、「移動」しただけ。

その結果彼ら二人は首から鮮血を噴出し、倒れた。

彼女の移動先の近くに居た三人は目の前に唐突に現れた女に半ば自棄になって曲刀を振り下ろした。

それを計算していたかのようにすぐに次の動作へと移る。

左手の短剣で一人を曲刀が彼女を捉える前に短剣を額に突き刺し、

右手の短剣で前から襲ってくる曲刀を受け流し、

右側から攻撃しようとしていた盗賊の脳天に向けさせた。

仲間を切つてしまい、啞然としていた盗賊の首筋を左手の短剣で切り裂いた。

その間、わずか十五秒。

これほどの使い手にはそうそう出会えるものではない。

まして・・・。

目の前の女性はどう見ても二十歳前後。

そんな年齢で【縮地】を使いこなしている事だけでも驚くべき事なのだ。

【縮地】を習得する事は非常に困難であり、

才能のある者でもその訓練に十年はかかると言われている。

ましてそれを「実戦で」使おうというのならばその難度は倍加する。

短剣の扱い、体捌きにも無駄、躊躇、淀み等が全く無く、徹底的に洗練されていた。今まで多くの経験を積んできたのだろう。

明らかに目の前の存在は矛盾している。

あれだけの実力、どんな才能を持ってもあの若さで身に付けられるとは思えない。

数百年に一度の天才なのかそれとも実年齢は三十過ぎで若く見えるだけなのか。

だが、いずれにしてもしつくりと来ない。

・・・ふと一つの可能性を思い付いてハッとした。

【自分と同じ存在なのではないか】という可能性。

いや・・・まさか、な・・・

頭を振り、目の前の状況に意識を戻す。

既に残りの盗賊は恐怖にかられ、必死の形相で逃げ出していた。だがどうも彼女は逃がす気など無いらしい。

逃げた盗賊達に向け、低い姿勢で短剣を構えている。

【縮地】で距離を縮めるつもりだろう。

やべっ

『待った!!』

とつさに叫ぶ。とにかく彼女を止めなくてはいけない。

声をかけられた本人は意外な方向から意外な声が入り、怪訝な表情で振り返った。

「何だ？」

『そこら辺でやめといたら？』

彼は努めて明るく言い放った。

「・・・？ 何故だ？」

逃げる盗賊を見据えながら、彼女は疑問を口にした。

『や、あいつらもう戦意無いし。それ以上は無駄な争いだろう？』
そう。必要の無い【争い】は止めなくてはならない。

それが自分の存在意義であるから。
というより気に食わない。

目の前の女は表情一つ変えずに盗賊を殺していた。

何というか・・・曲がりなりにも女が、いくら腐った連中相手とは
いえ、

その手を汚しているのは忍びなく思う。

しかしそんな事を彼女は知る由もない。

チツと舌打ちをし、不愉快そうな顔になる。

「無駄だと？ お前はあの連中がどういいう連中なのかわかってい
るんだろう？

生かしておけばまた下らん要求の犠牲者が増えるだけだぞ。

・・・先程のお前のようにな」

少し見下すように睨まれた。

表情を僅かに締める。

『・・・確かにそうかもしれないけどな。

だが今回の事で懲りて盗賊から足を洗うかもしれない。

これから改心して真面目に働いて生きていくかもしれない。

つてな可能性を持つ奴らを戦意も無いのに殺すのはどうかと思う
んだよ』

と、諭そうとした。

・・・我ながらちと無茶苦茶だな。

対面の女性は一瞬目を見開き、もう既に姿が見えない逃げた盗賊の方向を向くと、

「はぁ、とため息をもらした。」

「・・・もういい、わかった」

両手の短剣を腰のベルトに刺した。

「お前・・・長生きしないと思うぞ」

呆れたように言われる。

その台詞に虚をつかれ一瞬呆然とした後、

ぶつと噴出す。

『あつはつはつはつ！』

いきなりこちらが笑い出したものだから当然彼女は怪訝な顔をする。

「・・・な、何だ？」

長生きしない・・・か。

『ははは・・・いや悪い。そうだな。その点には自信がある』

- - Side Aura - -

突然笑い出され戸惑ってしまった。

どうにもこの男と喋っていると調子が崩れる。

「ははは・・・いや悪い。そうだな。その点には自信がある」

否定とも肯定とも取れる返事。

一瞬・・・だけだが何か寂しそうな目をしていたような気がする。

『・・・？そうか』

こちらの曖昧な返事を「ああ」と返されると少し間が空いた。

そろそろこちらの聞きたい事を聞こうか。

「『ところで……』」

二つの声が重なる。

『……』

「……」

気まずそうに目を逸らす。

コホン、と咳払いをしてとりあえず向こうの用件を促すように手を差し出す。

「んじゃあ。色々と聞きたい事はあるんだが……。」

とりあえず名前だな。俺の名はホルス。あんたは？」

ホルス？

当然、フルネームでは無いだろう。

もしかしたら本名ですら無いかもしれない。

要は自分という固体を認識する名称があればそれで良いという事だろうか。

まあ、そういう考え方は嫌いではない。

『アウラだ』

こちらもそれに合わせる。

一応、【アウラ・レクイエル】という姓名はあるが、私を認識する名称というのであればアウラだけでいい。

対面の男　ホルスは意味深にニヤツとする。

「んじゃアウラ、アンタは何故……」

男の顔の前に静止を求める手の平を示した。

『次は私が質問をする番だ』

ホルスは少し目を丸くした後

「質問っておい・・・」

とぼやいたが、諦めたような表情でため息を付き、どーぞ、と手を差し出した。

『すまないな。ではホルス。何故砂海のだ真ん中を

その様な砂海の旅に不相応な格好で歩いていた？

それも・・・たったそれだけの荷物で』

相手の左手に目を移す。

改めて近くで見ても明らかに旅をする者の荷物ではない。

水や食料にしては少なすぎる。

男はそれを聞くとまた、はあ、とため息をついた。

「いやな・・・。あいつ等の前にも一度盗賊に遭ったんだよ。

そんな時に・・・他の荷物は全て取られた。まあ命と、この小荷物は助かったんだけどな」

違和感。

また、嘘を吐いているな・・・

確信は持てないが、そんな気がした。

男の話は続く。

「で、俺はイルセア 知ってるよな？ 西にある寂れた街だ。

そっから砂都に向かっていたわけだ。それで途中で盗賊に荷物を取られて、

戻ろうかどうか迷ったんだが・・・。まあそんな時には既に砂海のだ真ん中だな。

そのまま突っ切る事にした」

しれっとした態度でそう言い切った。

呆れた奴だ・・・

砂都ダシュタ。砂海の中では最も大きく、豊かな街だ。そして年々、その人口は増えるばかりである。

それに反比例し、ダシュタ周辺の小さなオアシスに面する集落は、衰退の一途をたどっている。

小さい集落での生活に嫌気がさした若者は、故郷を捨て、豊かな生活を夢見ながら砂海を越えてダシュタへと向かうからだ。

最も・・・無事にダシュタでの生活を迎えられる者はその半数にも満たないのだが。

この男もそういった類であろうか。

しかし・・・。

ここからダシュタへはまだ二日はかかる。

途中に点在するほんの小さなオアシスを経由していけばあるいは辿り着けるかも知れないが・・・。

『この辺りの地理には詳しいのか？』

ホルスは首を振り、

「全然」

平然と言い放つ。

・・・・・・

『無謀だ』

それが結論。

ホルスは軽く笑うと、

「そうかもな」

左手を腰に当て、軽そうに言う。

「でもま・・・何とかなるだろ」

頭痛がする。

本当に何とかなると思っているんだろうな・・・
こめかみに手やり考え込む。

「ん？ どうした？」

不思議そうにこちらの様子を伺う。

この男の話は恐らく断片的に嘘が混ざっている。
とはいえどう見ても目の前の状況、このまま放っておくのは見殺しに等しい。

そして未だ次に行くべき処は【視え】ない。
という事はこの男にはまだ助けが必要という事だろうか・・・？
ならば・・・やる事は一つ。

一際大きなため息をついた。

『ダシユタまで・・・私が送ろう』

- - Side Horus - -

意外な申し出だった。

『いいのか？』

本心からそう思う。

「ああ」

相手は恐らく自分が所々嘘を吐いている事に気付いている。
盗賊に前にも遭ったのは本当だが、全て自分で追い払った。
荷物を奪われたのでは無く、

そもそも最初から荷物など、この小袋しか持つてはいない。

相手が嘘を吐いているのをわかっていて
それを特に追求する事も無く、まして共に行動しようなどと・・・

まあ・・・いいか

深く考えるのは止める事にした。

とにかくこの事はこちらにとって都合が良い。

ダシユタへ向かう事も、この辺りの地理に疎い事も本当の事だ。

それに何より、彼女に対して少し興味が沸いていたのだ。

先程の小さな疑問が今は少しずつ大きくなっている。

もしも・・・自分と同じ時間を生きる人間なのであれば・・・

それ以上に嬉しい事はないんだがな

「・・・？ どうした？」

目の前の女性が顔を覗き込む。

少し考えに浸りすぎていたらしい。

『あ、悪い。それじゃあ・・・よろしく頼む』
と、手を差し出す。

手を差し出された相手は怪訝な顔をした。

「・・・何だ？」

『ん、握手』

「・・・何故だ？」

『や、これから協力し合って砂都に向かおうという事で』

それを聞いたアウラは一瞬呆然とすると、

すぐに呆れた顔になり、ため息をつきながらこめかみを抑える仕草

をする。

「・・・協力し「合・う」ではなく、私がお前に協力「する」んだ阿呆が。」

くだらない事を言っていないでさっさと行くぞ」
そう言つて歩き出してしまった。

行き場の無くなった右手を下げて腰に当てながら、
気難しいこつた。

前に歩く女性を我俣な子供を見るような表情のため息をつき、
出来たばかりの足跡の方向へと歩き出した。

- -

「ホルス」

三刻程歩いた所でアウラが足を止め、振り返った。

『ん、何だ？』

と、彼女の方に顔を向ける。

アウラは腰に下げた袋から何かを取り出そうとしていたが、
こちらを見ると、その手を止めながら少し驚いたような顔をした。
「・・・平気そうだな」

ん？

一瞬何の事かわからなかったが、すぐに彼女の意図を理解する。
こちらの事を心配してくれているらしい。
少し頬が緩む。

『ああ。暑さには強い方なんだよ俺は』

や、まあ法衣の中身を軽く【冷却】しているのもあるがな。

彼女は少し釈然としない表情をしたが、

「そうか。・・・まあ良い。これをやる」

と何かをこちらに投げた。

それを右手で掴むと、そこから水分が竅ったような音がした。

『・・・水、か？』

渡されたのは両手に納まる程度の大きさの水袋であった。

「飲んでおけ」

と、踵を返し前へ歩き出した。

ほんの少し呆然とする。

どうしたもんかな・・・

確かに喉が渴いていないと言っわけでは無い。

実際イルセアで最後に食事を探ってから2日ほど

水分・・・というより何一つ口に含んではないからだ。

だが、自分にとってはそんな事は大きな問題ではない。

・・・と言つて過度な気遣いや遠慮は恐らく彼女の気に障るだろう。

これまでのやり取りで何となく彼女の性格を把握し始めていた。

『いいのか？』

とだけ聞き返した。

アウラは前へ歩を進めながら、

「ああ。私はお前に会う前に飲んでいるしな」

と、夕陽の朱に染まる彼女の背中中は明らかな【嘘】を吐く。

これ以上は水、入らないぞ・・・この袋。

パンパンだった。

「それに・・・」

前を歩いていたアウラは足を止め、首だけ振り返りながら何かを言

いかけた。

『ん・・・？』

「・・・いや。あと二刻程歩けば小さなオアシスに着く筈だ」

・・・？

アウラが何かを言いかけた事に首を傾げるが、

『そうか。・・・悪いな。んじゃ頂くとする』

と水袋の蓋を開け、少量の水を口に含む。

それを見た彼女は表情をほんの少し緩ませながらフン、と鼻で笑った後

ホルスの背後の夕陽に顔を向け、目を細める。

「そろそろ陽も沈む。今日はオアシスで夜を明かすでしょうか」

了解、というこちらの返事を確認すると、彼女は再び朱く染まっていく地平線へと歩き出した。

それに習いながら、前に歩く女性を見る。

やっぱ・・・妙なんだよな・・・

彼女には全く疲労の影が見えないし、何より汗一つかいていない。

それに・・・恐らく全く水分を口に含んでいない。

いくら環境に慣れきっていても、

どれだけ訓練を重ねても、

【人間】という生物である限り限度がある。

(・・・自分のような存在は別だが)

魔力で何かしらの外作用を起こしているのならば話はわかるが、その様子も見られない。

盗賊を撃退した時の動きといい、少し人間離れしすぎているのではないか。

あー・・・やべ

と、そこまで考えたところでハツとする

当然・・・アウラも同じ事考えるよな・・・

そう、ホルス自身もこの暑さの中平然としているし、汗一つかいていない。

ましてこの暑そうな黒の法衣を着て、だ。

彼女が自分に対し、同じ疑念を抱く事は必定だろう。

さて・・・聞かれたらどう誤魔化すかな・・・

ため息をつく。

少し、気が重い。

- - Side A u r a - -

やはり・・・妙な・・・

後ろの男には全く疲労の影が見えないし、汗一つかいていない。

いくら暑さに強いなどといっても

【人間】という生物である限り限度がある。

(・・・自分のような存在は別だが)

全くもって・・・後ろの男の正体が掴めない。

【ホルス】と名乗るあの男には余りにも多くの得体の知れないものが見え隠れする。

何故、自分はそのような者と行動を共にしようなどと思ったのか。
いくら【視えた】者とはいえ少々怪しい部分が多すぎる。

そもそも、あの男が盗賊の類あるいは、
自分に害を為す存在では無いという保証などどこにも無いのだ。

だが私は・・・

あの男の持つ【何か】に惹かれていた。

それに彼が自分に対し、害をもたらすという事は無いと思っている。
根拠など何も無い。ただの・・・直感であった。

- -

それから特に会話を交わすことは無く、
二刻程、ただ黙々と歩を進めていた。

砂海の夜は唐突に訪れる。

朱の空と地平線がすれ違った瞬間、一転して空は黒に包まれ、
星々が自己を主張し始めた。

風が吹く。

冷たい風。

昼間とはうって変わって急激に寒くなる。

薄着の自分には少々堪えるが、

自身の体温が下がる事は決して無い為、さしたる問題はない。

「寒くないのか？」

後ろから声が掛かる。

まあ・・・自分の格好を見てみれば当然の事か。

『ああ』

と首を後ろに向け、少し口元を歪めながら、

『寒さには強い方なんだよ。私は』

先程のホルスの言葉を皮肉った。

ホルスはその事にすぐ気づいたのか、一瞬目を丸くすると、
はは、と笑いを漏らし、

「そうかい」

と肩をすくめる。

ん・・・

前方に向き直ると平坦な地平線に変化が起こっている事に気づく。
小さな突起物の集まりが見える。

後ろの男もそれに気づいた様子で、

「あそこか・・・？ オアシスって」

と問い掛けてきた。

ああ、と肯定し、

『もうすぐだ。急ごう』

少し歩を早める。

- - Side Horus - -

視界に収まる程度の小さな泉。

それを囲むように群生するシダの木々が

冷たい風に葉を揺らし、穏やかな音を立てている。

前を歩いていたアウラは特に言葉を発する事なく、

手近なシダの木に身を寄せ、腰を下ろした。

ホルスもそれに倣い、隣の木の下に、

アウラと同じ方向を向いて座り込んだ。

彼女はそれを見て、

「済まないが・・・特に暖を取るような物は持っていない」

僅かに浮かない表情で言い放った後、

「眠れるか？」

と、問い掛けてきた。

『ああ。平気だが・・・』

少し、戸惑った。

一番最初に遭った時より、彼女の口調は穏やかなものになっている。更に、こういったこちらを気遣うような発言が時々見られる。

自分は彼女にとっては少し・・・いや、かなり得体の知れない怪しい存在の筈だ。

にも関わらずこちらに対して余り警戒心を見せていない様子なのは何故だろうか。

騙しているような・・・何か申し訳ない気がしてしまう。

・・・うし

意を決したように立ち上がる。

アウラの方に顔を向け、

『ちと・・・種明かしをしよう』

と、右手の人差し指を立てて悪戯っぽく笑った。

そう言われた彼女は、何も言わずに首を傾げる。

立てられた指に自分の【魔力】を集中させると、

指先が七色に光り始める。

その光で地面に向かって【8】の字を書き、交差点に横線を入れる。すると、すぐ下の地面に描いた図形が淡く浮かび上がった。

「な・・・」

それを見ていたアウラは目を見開く

「ホルス・・・お前は印術師・・・か？」

『ご名答』

ボツ

描かれた図形から火が上がった。

それを見ると、再び元居た木の下に腰をかけ、

『大体、7時間程度は持つ筈だ』

と、【炎上】の印にかけた力具合から適当な目算を挙げる。

アウラの方はしばし呆然と火を見つめると、

やがて溜め息を吐きながら、

「呆れた奴だ・・・」

と首を振りながら呟いた。

呆れた？

意外な反応。てつきり怒り出すか警戒されるかと思っただが。

『何がだ？』

「お前・・・盗賊の輩など自力で撃退出来たのだろうか？」

と、呆れ顔のまま言われる。

あらま。痛いところを突くね。

「そうかもな。ま、あん時は俺がどうこうする前にアウラがやっちまったわけだが」

そう告げると、横に居る女性から一際大きな溜め息が聞こえた。

「・・・何故視えたんだろうか・・・お前の事が・・・」

こめかみに手を添えながら彼女は呟いた。

・・・？

「見えた？・・・って？」

何か今の呟きが聞き流してはならない様な気がして、
そう訪ねた。

彼女はこめかみに手を当てたままちらつとこちらを見ると、
少し考えるようなそぶりを見せ、

「まあ・・・良いか」

と呟きながら顔を上げて

「私は【助けるべき者】を【視る】事が出来る」
そう、言った。

・・・！！

目を見開く。

その一言で全てを理解した。

彼女は前に広がる泉に顔を向け、話を続ける。

「具体的には・・・そうだな。

誰かの助けを必要としている者の顔。

その者が居る場所はどこか。

どういった道を進んで行けばそこに辿り着けるのか。

それらの情報が頭の中で浮かんでくるのだ」

少し間を置いた。

「まあ・・・信じられないだろうがな」

と静かに微笑みながらうつむいて目を閉ざす。

居た。

やっと・・・見つけた。

【救済者】 自分と役割を連ねる者にして同じ時を過ごす者。

『それで・・・俺が【視えた】のか？』

アウラが顔を上げてこちらを見る。

「・・・今の話を信じるのか？」

不思議そうな顔で尋ねてきた。

『ああ。嘘をついている眼はしていないな』

アウラの顔を覗き込みながらその疑問に答える。

そう言われた彼女は「そうか」と返しながら穏やかな顔で前に向き直る。

「まあ・・・それで特に私の力を必要としないであろうこの男が何故私に【視えた】のかが解らない。そう考えた」

『・・・なるほどな』

「今まで私に【視えた】者は紛れもなく【助け】を必要とする者だった。

・・・中には私の手に負えぬ状況も沢山あったがな」

と彼女は何かを思い出したように空を見上げる。

「その度に自分の無力を嘆いた。だから、死に物狂いに技を磨いた。それでも・・・まだまだ人を助けていくには力が足りない。

・・・そう、思う」

『・・・』

しばし返すべき言葉を見失う。

まるで昔の自分の姿を見ているようだった。

ただただがむしゃらに【使命】を全うしようとする自分。
その為には余りにも無力な自分。

そういったジレンマに苦しみ続けていた自分。

『アウラは・・・何故助ける』

だから　かつて自分に問い続けた疑問を投げかける。

『助けるべき者が見えるからといって、

それを助けに行かなければいけないってわけじゃないだろう？
なのに、何故そうやって人を助けて生きているんだ？』

それを聞いたアウラは静かに微笑み、

「人を助けるのに・・・理由があるか？」

そう　ホルスの眼を見て答える。

その顔に迷いは無い。

紛れも無く、それが彼女の出した答えなのだろう。

こりや・・・参った。

散々自分の使命について考え続けていた自分が恥ずかしくなる。

『アウラ・・・アンタ意外と単純なんだな』

にやつきながらそう言い、自分の中の動揺を誤魔化す。

「なっ・・・！」

と、アウラは目を見開いた後、

「う、うるさい！　話は終わりだ！　もう・・・寝るぞ」

ホルスとは逆側を向いて休むような体勢を取ってしまった。

了解、と笑って答える。

意外と可愛い奴・・・

そんな事を思い、腕を組んで俯きながら目を瞑り、眠りを導いた。

しかし・・・

つま先を向けている方向から流れ出る淡い暖かさを感じながら考えに浸る。

印術師、か・・・

印術 魔力を用いて特定のパターンで【印】を描き、様々な効果を発生させる魔術。

通常、魔術とは生まれ持った魔力の属性に順ずる物しか扱う事はできない。

属性、即ち火・水・土・風・光・闇。

火の魔力を持つて生まれたのなら火を扱う魔術【火術】を、水の魔力を持つて生まれたのなら水を扱う魔術【水術】を。

どんなに魔力を洗練させたとしてもその枠から出る事は通常、不可能なのだ。

だが印術はそれに縛られる事は無い。

ただ描いた【印】とそれにかけて魔力の強さにより、相応の効果が発生するだけ。

【印】には無数の種類があり、

先ほどホルスが用いたような火を発生させるものもあれば、

その場に雷を落とすようなもの、

人を眠らせるといった人間に対して直接干渉するものさえもあるらしい。

もし、数多くの【印】を扱う事ができるのならどんな魔術師よりも脅威となるだろう。

ただし印術には欠点がある。

まず、描くという行為が必要であり、通常の魔術よりも発動に時間

が掛かるという事。

そして何より問題なのは【印】を描く際、少しでも形や魔力に乱れが生じれば、

その効果が全く違う物になってしまう、という事だ。

術者に害が及ぶ事もあれば意図しない周りの人間を巻き込む事もある。

今まで印術師を名乗る者が【印】を暴走させた事例は数多い。

本当に【印】を使いこなす事ができる印術師などこの世界にほんの僅かしか居ないという。

だが先ほどのホルスの【印】

その火力は暖を取るには丁度良い物に調節しており、あまつさえその発動時間すら意図して設定していた。

少なくとも彼はあの【炎上の印】に関しては自由に使いこなしている。

そして武器を持った複数の人間にも物怖じしないあの態度を見る限り、

恐らく、その他にもまだ扱える【印】があるのだと思う。

一体、彼は何者なのか。

その疑問がまた少し強くなる。

軽く溜め息を吐いた。

まあ・・・考えて分かる事でも無いか。

とりあえずホルスが何者であろうと無事にダシュタまで連れて行けばそれで良い。

そう自分に結論付ける。

他人を詮索しすぎるのは性に合わない。

- 「アウラ・・・アンタ意外と単純なんだな」

先程のホルスの言葉を反芻する。

・・・そうかもしれないな。

口元を緩め、まどろみに身を預けた。

- -

ザッ

砂の音、シダの木の葉が擦れ合う音以外の不自然な物音が耳に入り、目を開く。

殺気を感じる。それも 相当、数が多い。

『ホルス』

体勢を変えぬまま、後の男に声を掛ける。

「・・・ああ」

どうやらホルスもそれに気付いているらしい。

二人同時に立ち上がる。

囲まれているな・・・

辺りを見回すと、小さなオアシスを囲うように黒い影が見え隠れする。

恐らく・・・二十人以上は居る。

先手を打つか

腰の短剣を取り出しながら、腰を落して【縮地】の体制に入る。

「あー・・・ちょっと待った」

と視界に静止の手が写る。

『・・・何だ』

と苛立たしげに返すと、ホルスはそれに答えず前に出た。

何をするつもりだ？

短剣を構えながら、ホルスの挙動を観察していると、

「おい。お前ら何の用だ？」

ホルスは手を腰に当てながら緊張感の無い声で闇に語りかけた。

それを見て溜め息。

本当に呆れた奴だな・・・

どう考えても奴等の放つ気配はこちらを殺そうとしているものだ。
なのに・・・あの緊張感の無さ。

「これは失礼・・・」

その声の一つの影がこちらに進みながら答えた。

「いや何、そちらのお嬢さんに用がありましてねえ」

闇から姿を現し、不気味に笑いながらこちらに目を向けている。

赤い長髪に黒いマント。

聞いた事がある。

確か・・・シヴィラ・クルースニル。

ダシュタ区域の盗賊をまとめている男だ。

厄介だな・・・

この男は卓越した印術師と聞く。

何か印術を描く前に殺つてしまえば良いのだが、

武器を構えているこちらを前にしてあの様子。

何らかの防御系の【印】を事前に描いていると見て良いだろう。

「や、だから何の用？」

と、ホルスは相も変わらず緊張感が無い。

それを聞いたシヴィラがククツと笑うと、前後左右から足音が迫る。姿を現した影達は曲刀を構えながらこちらに殺気を放っていた。その内の二人、見覚えがある。

成る程な。

大方、昼間逃げた二人がこの男と仲間を引き連れ、復讐に来たといった所か。

あの様子だとホルス共々闇に葬るつもりだろう。

『やれやれ・・・』

と首を振る。

『ホルス、あの二人を逃がした結果がこれだ。どうするのだ？』

ホルスは嫌そうに溜め息を吐くと、

「仕方ない・・・。アウラは手を出すな。

アンタには人を【助ける】事以外に手を血に染めて欲しくない。

こういう無駄な争いを何とかする事は・・・俺の分野だ」

いつになく真剣な表情でこちらに言い放つ。

この期に及んで・・・この男は何を言っている。

『だが・・・！いくらお前が』

「とにかく。アンタは手を出さないでいい。ま・・・見てな」

と、こちらの言い分を聞く事無くホルスは前を向き直った。

赤髪の男は相変わらず不気味な笑いを浮かべながら、

「戯言は終わりましたか？ では・・・死んで頂きましょう」

そう言くと、親指と中指を弾いて音を鳴らした。

周りの男達が一斉に襲い掛かる。

ちっ！

手を出すなと言われてもこちらにも襲い掛かる者が居るのだ。

そう言うわけにもいかない。

短剣で一番近い位置に居る男へ向けて攻撃態勢に入った刹那
周りに居る全ての盗賊たちの顔前に光の図形が浮かび上がる。

次の瞬間、

「くぐあああ！」

ホルス、シヴィラを覗く全ての男たちが吹き飛び、倒れた。

な・・・何が起こったんだ？

今起こった事が理解できず、呆然と周りを見回す。
先程までこちらに襲い掛かろうとしていた男たちは
顔を抑えながらうめいている。

『ホルス・・・今のは、お前がやったのか・・・？』

ホルスは振り返ると、

「まあな・・・ま、ただ吹き飛ばしただけだが」
しれっとした態度でそう言った。

何て奴だ・・・

今のは印術なのだろうか？

あんな一瞬で・・・しかも、二十以上の数を・・・？

「な・・・！」

うろたえていたのは前に立っているシヴィラも同様なようだ。

「念映・・・だと・・・！？ それも複数・・・そんな馬鹿な・・・」

と、目を見開き、啞然としていた。

それを聞いたホルスが前へ向き直る。

「ん・・・？ ああ、アンタも印術師なんだな。

【障壁】の印を張ってあるのか」

人差し指で頭をかきながら、面倒くさそうに言うと、

「で？ 勝負すんの？」

そう言いながらシヴィラを睨みつけた。

- - Side Horus - -

赤髪の男は後ずさりながら、

「く！・・・おのれえ！！」

指先に魔力を集め、【印】を描きだした。

「ホルス！ 来るぞ！」

後から声が掛かる。

『わーってる』と、前を向いたまま手を振って答えた。

前で描かれている印に目を向ける。

【光弾】だな。ま・・・あの程度の魔力じゃ無駄だが。

次の瞬間、

前方の男の前に描かれた【印】から、

四つの光の弾がこちらに向かって放たれた。

微動だにせずにそれを待ち構える。

パン！

光の弾がホルスに辿り着こうとした瞬間、

こちらの【障壁】に阻まれ、一斉に弾けた。

『ム・ダ』

と、眼前の男を見下したように眺める。

「あ・・・あ・・・」

対する赤髪の男は自分の印術が通用しないのを見ると、
「お、お前達！ とつとと起き上がってこの男を殺れ！！」
と、うめいている部下（？）を叱咤している。

この情けない男でもそれなりに統率が取れているのか、
それを聞いたほとんどの盗賊は
顔を抑えながら曲刀を手に取り、立ち上がった。

溜め息。

脅し足りないかね。

どうしたものかと考えた後、一つ大事な事を思い出した。

『あー・・・そうだ』

昼間に見た盗賊二人に目を向ける。

二回目の無駄な【争い】を起こした奴等だ。

・・・容赦は、しない。

さよーなら。

二人の顔の前に【爆破】の印を思い描き、強めの魔力を送る。

目の前に再び【印】が現れた二人は、

「ひっ」と怯えながら顔を抑える。

直後、彼らの眼前の空間が輝きだす。

鈍い爆発音。

二人共首から上を失い、血を噴出しながら砂地に沈んだ。

『仏の顔も一度まで・・・ってな』

冷ややかにその光景を見つめながら言い放った。

「・・・気の短い仏だな」

後から突っ込みが入る。

『ほっとけ』

と、言った後『あつ』と今の自分の発言に気が付き、振り返った。

『今の、ダジャレじゃないからな?』

釘を刺す。

アウラは呆れたように溜め息を吐くと、

「わかったわかった・・・」

手を振り払う仕草をしながらそう言った。

周りに居る盗賊達はしばし啞然としながらその光景を見つめていた。

そして・・・その事態を認識すると、

叫び声を上げながら我先にと逃げ出し始めた。

やれやれ・・・もう来んなよ。

それを見送った後、一人残った前の男に目を移す。

『で? どうすんだ?』

そう言いながら威圧的に睨みつける。

「・・・くっ!」

赤髪の男は屈辱を浮かべた表情をすると、

黒いマントを翻し、夜の砂海へと逃げ去っていった。

それを見ながら、肩をすくめる。

さて・・・と。問題はここからなんだよな・・・。

これだけ自分の力を見せてしまったのだ。

後にいる女性はず、自分という存在を怪しんでいるだろう。

かといって今はまだ、自分の正体を明かす訳にはいかない。

どう言い訳したもんかな・・・。

『えーと・・・。あー、なんだ』

気まずい思いをしながら、後を振り返る。

『あれ？』

だがアウラは既に元居た木の下に歩を進め、座り込もうとしていた。
「とんだ邪魔が入ったものだ・・・。明日は陽が登る前に出発する。」

そんな所に突っ立っていないでとっとと休め」

そう言いながら地面に身を預け、先程と同じように眠る体勢に入ってしまった。

拍子抜けした。

てつきり質問攻め合うものだとか構えていたのだが。

『えー・・・と・・・。いいのか？』

と、思わず聞いてしまう。

彼女は溜め息を返すと、

「・・・今更お前の事に関してどうこう詮索するつもりは無い。

私はお前をダシユタまで送り届ければそれで良いだろう」

顔をこちらに向ける事無くそう言った。

『・・・そか』

自分としてはありがたい事だが、
身構えていた分、何か釈然としない気持ちで元居た木の下に身を下さす。

『んじゃ、おやすみ、と』

「ああ」

そう挨拶を交わし、再び眼を閉じて眠りについた。

- -

「ホルス」

横から聞こえる自分の名に反応し、うつすらと眼を空けた。
明るみが射し始めた空が狭い視界に映る。

間も無く陽が昇り、砂海は再びその顔を変えようとしていた。

横に居るアウラは既に立ち上がり、体に付いた砂を振り落としていく。

『ん・・・行くか』

よいしょ、と立ち上がり、砂を払い落とした。

『そんじゃ今日も、よろしくお願いします』

と下腹部に手を当て、礼を試みせる。

対するアウラは軽く溜め息の後、

「さっさと行くぞ」

と、歩きだす。

その後姿を見ながら

予想通りの反応だねえ・・・

と肩をすくめながら再び彼女の足跡を辿り、歩き出した。

- - Side Aura - -

ん・・・？

前方の朝陽が昇ろうとしている空。
その色に少し違和感を感じた。

足を止めて良く目を凝らす。

「・・・？ どした？」

後ろからホルスの声。

光を増す空の色。

だが遠くの朱色の空にほんの少しいつもとは違う、茶褐色が混ざっていた。

『・・・まずいな』

「ん、何が？」

あの空の色は・・・

『砂嵐が来る』

と、振り返る。

少しの間。

するとホルスはしれっとした顔で

「あ、そう」

と言い放った。

『なっ・・・』

途端に顔の温度が上昇する。

『「あ、そう」とは何だ「あ、そう」とは！ お前は砂嵐の恐ろしさを』

と、そこまで言いかけてハッと気づく。

『・・・印術か』

「そういうこつた」

ホルスはぴっと人差し指を立て、七色の光を見せた。

- -

オアシスを発つてより約三刻、

太陽は既に上天に昇り始め、容赦ない灼熱の光を地上に照らしている。

そして前方の茶褐色の陰りは距離をつめ、間も無くこちらに到達しようとしていた。

『で』

後ろを振り返る。

『そろそろ来るが・・・。どうするのだ？ 昨夜にシヴィラの攻撃を防いだ印を使うのか？』

ホルスは首を傾げ、

「シヴィラ？」

と、聞き返してきた。

『・・・ああ、すまない。シヴィラというのは昨夜盗賊を率いていた赤い髪の印術師の事だ。』

あれでもこの付近の盗賊を統べる男でな・・・。名は知られていない。』

「へえ。・・・まあそれはいいか。あん時のつていうと・・・【障壁】か。」

あれでも防げ無くは無いんだろうが、一方向にしか効果無いからな・・・。」

そう言いながらホルスは上に向かって虹色に光る指を動かした。

「これなら平気だろ」

すると、上方に三メートル程度の光の図形が描かれ始める。

『・・・これは、何の印だ？』

描かれる図形を見上げながら訪ねる。

「【結界】ってやつだ。この印の下に居れば大体のものは防げる。

砂嵐くらいなら何の問題もない。・・・うし、出来たつと」

描かれた光の図形がその輝きを増した。

『となると・・・。砂嵐が止むまではここを動く事ができない、か
という眩きにホルスがこちらに顔を向け、

「ああ、その辺は心配いらない」

と言いながら、にやつとする。

首を傾げるこちらに説明を続けた。

「印術を描く対象には二通りあつてな。

その空間そのものに印を描く【空間描画】と、

対象とする人物に対して印を描く【対象描画】ってのがある。

そんで
「

『今のは私がホルスを対象とした対象描画で描いたわけか』

説明を続けようとしているホルスに割って入る。

「ん・・・そういうこつた。俺自身の頭から二メートル上に対して描いた。」

だから歩こうが走ろうがこの印がある内は俺の周囲は砂嵐の影響は受けない。

ほれ」

ホルスが前に移動して見せると、上にある印も同様に移動する。

『・・・そうか』

成る程な・・・。・・・ん？

ふと一つの疑問が沸き上がり、それを口に出す。

『そういえば・・・昨夜の連中に対して使ったあれは・・・?』
あれが対象描画とやらで描かれていたとすると恐ろしい。
今の説明から察するにそれは如何なる回避も不可能という事。

「ん・・・? ああ。あれも対象描画だ。まー描かれたら避けるのは無理つてこつた」
と軽々しい口調で返してきた。

深く溜め息を吐く。

『・・・お前だけは、敵に回したくないな』
そうホルスに向けて投げやりに言い放つ。

ホルスはしばし目を丸くすると、
「・・・あつはつはつ!」

突然笑い出した。

『・・・な、なんだ?』

ホルスはひとしきり笑うと、訝しげにそれを眺めるこちらに対し、
「いや・・・悪い。ま、それは無いと思うぞ」
意味深ににやつきながらそう言った。

本当に良く分かん奴だな・・・
首を傾げながら、だといいがな、と返す。

と、途端に風の音が変わり視界が狭くなった。
激しい風が砂を舞い上げ、上天に位置する太陽の姿すらおぼつかなくなる。

大き目の砂嵐だ。

だが・・・こちらには何の影響もない。
ホルスの【結界】の印とやらが効いているらしい。

「・・・来たようだな」

周りを見回しながらホルスが呟く。

『ああ・・・。だが、これならば特に足を止められる事も無いな』
上の印を見つめながら、大した物だ、と感心した。

「・・・あーそうだ。ついでに。ほれ」

とホルスがこちらに視線を送った瞬間、
目の前に光の図形が輝きだす。

『！！』

咄嗟に後ろへ飛ぶ。

だが・・・印はそんな事では避けられないのはわかっている。
一体、何の印を・・・！？

途端、体が冷やりとする。

上から来る熱を中和してくれるような、心地よい感覚。
な・・・何だ・・・？

「・・・おーい・・・」

雑音にまぎれたホルスの声。

結界から出た為、周りは砂が暴れ狂っている。

「別にそれ、涼しくなるだけで害はないぞー」

・・・やられた。

無言でホルスの元に戻る。

結界の中に入り、まとわり付いた砂を払い落としながら、

『・・・せめて一言断ってからやってもらいたかったものだな』
じろーっとホルスを睨む。

対するホルスは

「い、いやー……。もう少し俺を信用してくれると助かるんだが・
・」

と半笑いで人差し指でこめかみをかいている。

「……無理か」

『無理だな』

ムスツとした口調でそう返した。

が、冷静に考えると少し自分も動揺しすぎたかもしれない。

先ほど描かれた印から心地よい涼しさを感じながらそう思い、

『まあ……。なんだ。だがこの印は快適だな……。感謝する』

と付け加えながら前に向き直った。

『行こうか』

「あ、ああ……。ぷっ」

後ろから不自然な返事が返ってくる。

『……。何が可笑しい!』

- - Side Sivilia - -

仄暗い自室には焦げた臭いを放つ死体が三つ。

あの時逃げていった部下の成れの果てだ。

あれ程の屈辱を受けたのは初めてであった。

おのれ……

役立たずの癖に、のこのこと戻ってきた塵を

半ば八つ当たりで始末したものの、気分は全く晴れない。

あの男……。ホルスとか言いましたか。

聞いた事の無い名前である。

だが・・・彼の者の力は常軌を逸していた。
まともにやり合っては、恐らく自分の力では全く敵わないだろう。
しかし自分とてプライドというものがある。
このまま泣き寝入りをするつもりは毛頭ない。
少し頭を冷やし、奴に復讐する為の策を模索する。

あの印術師と一緒に居た女・・・。
前に何度か部下から報告を受けた事がある。
どこからとも無く現れ、ことごとくこちらの邪魔をしているらしい。
短剣の達人で尋常ではないスピードで動くとか・・・。
何者かはわからないが、一つ確かな事がある。
それはあの印術師と同様、自分にとって邪魔者であるという事、
何より奴と何かしらの関係を持つ者という事。
・・・利用しない手は無い。

ドアが開く音。

『来ましたか・・・』

背中に巨大な剣を背負った男が、正面のドアから入ってきた。
「・・・相変わらず辺鄙な所に住んでやがんなあ。シヴィラ」
入ってきた男は部屋を見回しながらそう言った。

『無用な客は避けたいからですよ』

「へっ、そうかい」

この男の下品な態度は昔から余り好きではなかったが、
腕だけは確かなもので、重要な局面ではいつも仕事を依頼している。

「で？」

男がこちらに眼を向ける。

「今回は何をすりゃいいんだ？」

【砂海の台所】

俗にそう称される砂都ダシユタ入り口付近の市場。
既に陽が沈み始めているにも関わらずまだ多くの人間が往来している。

『存外・・・早く着いたな』

まさか誰か人を伴いながらあの場所から2日足らずで着くとは思わなかった。

まあそれはあくまで相伴する者を一般人に当てはめて予想していたからだが。

「だな。俺一人だったら何日掛かった事か・・・」

とホルスがこちらの呟きに応じる。

『そうか？ お前ならば私が居なくても問題なく辿り着いた気もしているんだが・・・』

と首を傾げた。

それを聞いたホルスはこちらを向き、

「あれだ・・・方向音痴なんだよ、俺は」
と溜め息を吐く。

一瞬の間。

『・・・まあ、そう言う事にしておこうか』

ホルスに顔を向けずにそう答える。

この男の嘘にはあまり意味がない。

大抵は答えたくないものをはぐらかす為のものだ。

「そういうこつた」

そして嘘とばれている事も恐らく分かっているのだろう。
どこかそれを楽しんでいる風にも見える。
同時にどこかそのやり取りを楽しんでいる自分がいた。

『で？ これからどうするのだ？』

遠まわしに【ホルスの目的】を探る質問だ。

別に答えは無くても良いが、ホルスがどうはぐらかすかに興味がある。

ホルスはそれを聞くと、少し表情を締め、

「争いを止める」

ただ一言、前に顔を向けながらそう言った。

・・・？ 争い？

どうやらはぐらかしているわけではなさそうだが・・・。
そう言えば最近、ダシュタは各地から兵を募っているという話を聞いた。

真偽は分からないがその兵士で他国に侵出するという噂もある。

まさかそれを？

『戦争をか？』

「・・・ああ」

『・・・そうか』

確かにこの男の実力ならば、それを成す事も可能かもしれない。
だが・・・

『敵にならなければ・・・良いな』

と、小声を漏らす。

前にも思ったがこの男は色々な意味で敵に回したくはない。
だが【視えた】者がホルスの目的の延長線上にあるのなら・・・

戦うしかない。

ホルスはにやつと口を緩めた。

「前にも言っただが、それは無い。

もしそんな事態になるんなら俺の方が退くしな」

「・・・何故だ？」

と首を傾げながら問う。

私が現れただけで退く、だと？

勝てないからとかそう言った理由ではないだろう。

まともに戦えば、どう考えてもこちらの分が悪い。

・・・こちらが死ぬ事は無いという点を差し引いても、だ。
ならば何故？

「んー・・・俺には【導き】が無いから、だな」

ホルスは顎に手をやり、上を向きながら漠然とそう答えた。

「導き・・・？」

一瞬何の事か分からなかったが、

一つ思い当たるものがあり、はつとする。

「私の助けるべき者を【見る】能力の事か？」

「そ」

・・・この男・・・私の能力について何か知っているのか？

自分自身は何故このような能力が備わったかなど知る由もない。

だがこの能力を【導き】と呼んだ今の口ぶり、

何となくホルスはこの能力に関して既に知識を持っている気がする。

「ホルス・・・お前は」

何を知っている？　そう問おうとした瞬間、視界が暗転した。
いつもの感覚。

辿り着くべき場所へのルート、そしてその対象が一瞬にして記憶に

刻まれる。

近いな・・・ダシュタの中か。

どうやら新しく助けが必要な者が現れたらしい。

「どうした？」

ホルスがこちらを不思議そうに窺う。

『仕事だ。次のな』

溜め息混じりにそう言った。

ホルスにはもう少し聞きたい事があったが・・・。

【視えた】ものは何を置いても優先しなければならない。

「ん、そか。・・・一人で平気か？」

社交辞令のつもりなのだろうが言う相手が悪い。

『誰に向かって言っている？』

ホルスはハハッと笑いを漏らすと、

「またな」

と一言、こちらに向けて言った。

『出来れば、もうお前のような怪しい奴と関わるのは御免だ』

冗談混じりに実際の考えとは逆の言葉を返した後、

『では、達者でな』

そう言い残し、目的地に向かって駆け出した。

- - Side Horus - -

「出来れば、もうお前のような怪しい奴と関わるのは御免だ」・・・
か。

先程の言葉を反芻し、苦笑する。

『残念ながら、嫌でも関わる事になる・・・』

駆け出した【妹】の後ろ姿に向けて呟いた。

『・・・必ずな』

-

さて・・・陽が沈む前に、と。

周囲を見回し、対象とする人物を探した。

『・・・あいつがいいか』

市場で店じまいをしていた小柄で恰幅良い商人が目に残る。

『ちよつといいか？』

商人の肩を掴み、声をかける。

男はいきなり肩を掴まれ、顔をしかめながらこちらを向くが、手に握らされた物を見るとたちまち愛想よく対応してきた。

「はい、なんでしょうか？」

ちよろいな・・・

この手の人間はこの銀貨を見ると態度を豹変させる。

長年養った勘である程度情報を握っている人間、

尚且つ金品による懐柔が容易な人間は見抜く事ができた。

自分の【力】で必要な情報を得る為には

その人間に触りながら話を聞かなければならない。

そして今、まず知りたい情報は・・・

『ダシユタが戦争やらかすつてのは・・・本当か？』

男はそれを聞くと少し頬がぴくつとしたが、笑顔のまま、

「・・・どこでそれをお聞きになったんで？」
と尋ねてきた。

『本当なようだな』

質問には答えずにそう返す。

「・・・仰る通りで」

と、男は声を低くしてそう答えた。

やれやれ・・・だな。

そうなると聞きたい質問は一つ増える。

寧ろ・・・それが本題だ。

『・・・主軸は誰だ？』

肩に手を当てたまま尋ねた。

それを聞いた男は目を見開くと、

「何故・・・そのような事を？」

そう少し低い声で言った。

ビンゴ・・・っと。

武装した男が頭の中に浮かぶ。

年齢は四十台前半程度で引き締まった顔をしている。

明らかに軍部の者だろう。

と、なると・・・

ダシユタ政府の意向では無い可能性がある。

『いや、ちよつと気になったただけだ』

商人にはそう取り繕った。

それを聞いた商人は、

「左様ですか・・・それでは私は」

とそそくさとこちらに背を向け店じまいの作業に戻った。

『ああ、悪いな』

・・・さて

あの態度を見ると、どうやら相当な情報規制がされているのだろう。銀貨一枚では【戦争が行われようとしている】という情報しか提示しないといった所か。

もう二、三枚渡せばその主軸の人物についての情報も得られそうだが、

その必要はなかった。

得るべき情報は得る事が出来たからだ。

今【視えた】奴の元に、今晚にでもお邪魔するとしようかね
そう思いながら、踵を返した。

- - Side Aura - -

頭に思い浮かぶ道筋をひたすら突き進む。

市場からは大分遠ざかり、人影もまばらになっていく。

恐らくは居住区だろう。

一見すると自分の助けを必要とする者が居るとは
思えないような平和な場所に思えるのだが・・・。

視えた対象の周りには、

この辺りに構える住居と似た構造をした家があった。

目的の対象はこの近くの筈だ。

入り組んだ路地を突き進み、少し開けた場所に出る。
その途端、頭の中に浮かんでいたイメージが消えた。

・・・この辺りか。

辺りを見回す。

今回の対象は4、5歳程度の男の子だった。
視えた場所から移動していないのであれば、
どこかの家の近くの路地に居る筈だが……。

と、広い街道をはさんだ向かいの路地に、
背中を丸め、座り込んだ子供が見えた。

……!! まさか……既に……!?

【縮地】に近い速度で子供の元へ一瞬で駆け寄る。
子供の横に辿り着き、近くでその姿を確認した途端、
どっと肩の力が抜けた。

……地面に……絵を描いていたのか。

安堵のあまりため息を吐いた。

……が、すぐにその油断を振り払い、気を引き締め直す。
この子供が【助けを必要とする者】という事を忘れてはならない。

とにかく……。

そろそろ陽が暮れる頃だ。

このような小さい子供が一人で外に居るのは危険だろう。
これからこの子を護るにしても家の中に居てくれた方が
何かと助かるのだが……。

さて、どうしたものか。

『何を、描いているのだ?』

いきなり【家の中に入れ】と不躰に言うのも何だったので、
腰を落とし、できるだけ穏やかな声で子供にそう問いかけた。

子供はこちらを見上げると、笑顔を見せ、

「ラクダだよっ」

と元氣良く答えた。

どう反応されるか内心少し不安であったが、
幸い、明るく素直な子供なようだ。

こちらに対してすぐに警戒心を持たれる事はなかった。

どれ・・・としゃがみ込み、

子供と並ぶようにして地面に描かれた絵を覗き込む。

『上手く描けているな』

月並みなお世辞を言うと、

「へへー」

と、得意気な表情をする。

「僕ね、大人になったらラクダに乗って世界中旅をするんだ」

『ほう・・・それでラクダを描いているのか』

「うん。でね、色々な街で物を売ったり買ったりしてー、

いつか世界一の大商人になるんだ」

嬉々として夢を語る子供を見て穏やかな気持ちになる。

砂海の子供としての狭い定義の中での最大限の夢なのだろう。

『それは・・・立派な夢だな。』

何故、そんな大商人になりたいのだ？』

「それはね、一杯稼げば、母ちゃんも父ちゃんも楽できると思うんだ」

『そうか。　えらいなお前は』

そう言いながら子供の頭を撫でる。

こんな時間に一人で居ると言う事は両親共に遅くまで働いているの
だろう。

察するに両親共に遅くまで働いている寂しさの裏返しなのだろうか。
しかし、自分が働く事で両親に楽をさせようという考えは、

この幼さで中々思い立つ事ではない。

良い子供だな・・・

そんな考えがよぎると同時に、

絶対にこの子を助けなければならぬという使命感が強まる。
が、

「ところで・・・おばちゃん誰？」

この不意の一言で脳天に凄まじい衝撃が走った。

『な・・・！！　お・・・おば・・・おばちゃん・・・おばちゃん
！？』

「？　どしたの？」

『い、いや確かに私は実際年齢的にはそのお・・・おば・・・ちゃんと
言えなくもないが、あ、いや、しかしだな、私の見かけは20歳の
頃から変わっていない筈であって決してその・・・お・・・お
ばちゃん

・・・等というものからは程遠い者だと自負しているのだが・・・

はっ・・・もしかしたら実は少しずつ老けていたのか？　子供の
目には

私はもうその、お、おばちゃん・・・？に見えるのか・・・？
い、いや

そんな筈は・・・し、しかしもしかしたら・・・』

と、ふと自分が意味の分からない独り言を呟いている事に気づき、
はっとする。

三十数年生きてきた中で「おばちゃん」などと言われた事は初めて
だった。

余りのショックにすっかり取り乱してしまったが、
ここは上手く取り繕わなければ・・・。

『い、いや…すまない。私は通りすがりの者だが…』

近頃この周囲に不審な人物がいると聞いていたのだな。

お前のような子供が一人で遊んでいるのを見て心配に思っ
て声をかけたのだ』

「ふーん」

それを聞いた子供は特に関心が無さそうに地面への絵描きを再開する。

咄嗟に考えた言い訳だが…

特に不審に思われている様子は無い。

『さて…そろそろ陽も沈む。そろそろ家の中に入ってはどうか？』
なるべく穏やかに言っただつたが、
どうも少し言い方がきつくなってしまう。

こういうのは…正直苦手だ。

子供は少し首を傾げた後、

「うーん、わかった」

と、意外にも素直に立ち上がり家の入り口の方へ歩き出した。
その姿を見て小さく安堵の溜め息を吐いていると、

子供がこちらに振り返り

「じゃーねー！ おばちゃん！」

と手を振って来た。

うぐ…ま、まだ言うか。

『あ、ああ。またな』

と引き攣った笑顔で手を振り返す。

家の扉が閉まるのを確認した後、
再度周囲の気配を探る。

・・・やはり、特に不審な気配は無い。

今回のように【視え】てからある程度時間に余裕があるケースはさほど珍しくは無い。

その場合はほぼ確実に【場所】に対する危険の察知、つまりはその【場所】にいる全員が助けを必要とする者と言う事だ
が・・・。

この周囲にはもう人の姿は見えない。

当然、家の中には多くの気配があるが・・・。

今回【視え】たのは外にいたあの子供一人だった事から家の中に居ればとりあえずは安全な可能性が高いだろう。

そう思いながらも周囲の警戒を続けていると、

一人の男がこちらの方に近づいて来るのが目に付いた。

特に今の所殺気は放っていないが・・・。

・・・？ 笑っている・・・？

近づいてくる男は何故かこちらを見てニヤついている。

大剣を持った大男・・・。

明らかにこの住居区には相応しくない者だ。

『その男・・・私に何か用か？』

腰の短剣に手を当てながら男に向けてそう言った。

「ククク・・・」

男はそれに答えずただニヤニヤしながら下卑た笑いを浮かべていた。

短剣を抜く。

『何が可笑的い・・・』

男はこちらが武器を抜いたのを確認すると、少し表情を変え、

「いやいや・・・手間が省けて助かるぜえ・・・」と呟いた。

『・・・？ 何を言っている』

「クク・・・あの男はどうした？」

その言葉を聞いてハツとする。

あの男・・・というホルスの事を言っているのだろうか。自分とホルスが共に居た事を知っている者は限られているとなれば・・・

『・・・シヴィラの手の者か？』

「ハハッ！ 正解だ。」

全く・・・適当にこの辺の住人をつかさどってお前一人だけ呼び寄せようとしたのによお。まさかこんな所で単独行動しているとはな。

・・・笑っちゃうぜ」

と、男が大剣の柄に手を当てた。

・・・あの子供が見えたのは、そういう事が一つの懸念が消える。

助けるべき者は助けた。

後は・・・降りかかる火の粉を振り払うのみ。

『・・・フン』

お互いに武器を構え、睨み合う。

大剣使い・・・となれば懐に入り込めばこちらが有利となる。

・・・？ 妙だな・・・。

奴の武器は接近を許せば不利になるのは明白だ。
にもかかわらず奴は隙だらけなのだ。

あれでは容易に懐に入り込む事ができる。

発する気配からしてそれなりの手練に思えたのだが……。
勘違いなのだろうか？

それとも、こちらを誘っているのだろうか……？

……まあ良い

【縮地】の体制に入る。

奴が何をしようとするの武器で私を殺す事はできない。

ただ、全力で仕留めるのみ。

風を切り、瞬時に男との間合いを詰める。

やはり、何をされる訳でもなく容易に接近する事が出来た。
大剣の男は驚きに目を見開く

『疾っ！』

右手の短剣を振りかぶり、体の中央を狙う。

手ごたえはあった。

「くっ……！　つてえな……」

だが狙った急所からは外れ、短剣は肩口に食い込んでいた。
相手がそれなりにこちらの攻撃に反応して来たという事。

ならば、反撃を許す前に……！

続けざまに左手の短剣で首筋を狙う。

短剣が男の首に達しようとしていたその刹那、
男の口元が歪むのが目に映った。

『・・・！ な・・・に・・・？』
左手が動かない。

いや・・・左手だけではない。
全身が動かないのだ。

「つたく・・・危ねえ危ねえ・・・」

男は大剣を背中に着用したまま、こちらを見下しながらそう言い放った。

どうやらすぐにこちらを殺そうという気は無いらしい。

だが状況が思わしくないのは変わらない。
奴は一体・・・

『何を・・・した』

「ククク・・・。 闇術の一種だ。

【ブラッドバインド】、自分の血に触れた者を拘束する・・・つてな」

そういう事が・・・

右手に浴びた奴の返り血に目を移す。

しかし詠唱する素振りも見せずそれだけの上位魔術を発動出来るとは・・・

『お前は・・・剣士ではないな』

「ハハッ！ 察しが良いな。

その通り。俺は闇術師だ。実際、剣なんかほとんど扱えねえよ。術師と思って戦われると色々と面倒になる術しか使えないんでな。こういう大振りな武器を持っていれば、まさか術師とは思わない。つてな寸法だ。効果あつたる？ ククク・・・」

『く・・・』

・・・確かに奴の見た目で剣士と判断し、術への警戒などしていなかった。

闇術の発動媒体は多くが【血】と【影】だ。

そしてその多くが相手と接近せねば効果を発しない。警戒を怠らなければさほど怖い類の物ではないのだ。

私の経験不足・・・か

口惜しさに齒を噛む。

『で・・・？ 私をどうするつもりだ？』

挑発的な口調で言い放った。

捕らえられているという状況は自分に取って一番好ましくない。

こちらを殺そうとしてくれれば状況を打開できるチャンスはあるのだが・・・。

「クク・・・。 気丈な事で・・・。

ま、それはあいつにでも聞いてくれ」

あいつ？

奴の発言に疑問を持った瞬間、後ろに近づいてくる気配を感じた。

「お疲れ様です。ゼクセル。

いつもながら見事なお手並みですね」

この声・・・シヴィラか。

しかし・・・ゼクセル？

それなりに名のある雇われ術師だ。

まさかこんな外見で、ましてシヴィラと繋がりがあるとは思ってもいなかったが・・・。

「ハッ！ 難儀な仕事押し付けやがってよお・・・。

この姉ちゃん動き早すぎて影が利用できやしねえ。

お陰でこの様だよ・・・ったく。報酬は弾んでもらうぜ？」

と、大げさに肩の傷を見せびらかせている。

「ええ、わかってますよ。それにほら」

シヴィラはゼクセルの横に立ち、指を七色に光らせた。

「ああ、頼むわ」

ゼクセルの肩に印が描かれる。

印からシヴィラの指が離れた瞬間、

七色の光が急激に増し、一点に収束する。

光が消えた頃には奴の肩の傷はすっかり癒えていた。

「さんきゅ」

と、癒えた左肩を回している。

「・・・さて」

シヴィラがこちらに視線を向ける。

「あなたには、少々協力して頂きましょうか」

そういう事か。

あの時の復讐に私を利用しようとしてもしているのだろうか。

・・・くだらない男だ。

『馬鹿か。私が素直に応じるとでも思うのか?』

シヴィラはククツと笑い、

「ええ、思いますよ・・・」

ゆっくりと七色に光る指を目の前に突きつけてきた。

<接触> ; (後書き)

駄文を読みきって頂いてありがとうございます。

仕事中暇だった時に書いていたものです。

文章に関しては小説のセオリー無視で

読みやすさ重視の改行しまくりな感じで書いてみました。

&l t ; 暗雲 & g t ;

月虹

運命交叉

i n 6 2 8 3 m o n t h

c h a p t e r 2 > 暗雲 <

- - S i d e H o r u s - -

旅宿屋の一室のベッドで寝転びながら、一人考えに耽る。

【触れている対象の思い浮かべているものを視る事が出来る】

それが自分に与えられた能力。

便利な事は便利だが、アウラの能力のように直接自分の取るべき行動を

指し示す指標にはならない。

自分の取る行動はあくまで自分の判断で決めねばならないからだ。

>もしかしたら自分のしている事は間違っているのではないだろうか<

そんな考えに苛まれ続けながら、今まで自分の使命を果たす努力をしてきたが、

少なくともこれからは争いを止める為に

本来【助けるべき者】を敵とする事は無くなった。

この街には今、アウラが居る。

もし自分が間違った行動を取れば、彼女がそれを止めてくれる事だろう。

・・・そろそろか。

窓の外を見ると、既に月が昇り、
街の灯もまばらになり始めていた。

意を決し、立ち上がる。

先ほどの商人から得た男のイメージを頭の中で反芻し、
指先に魔力を集中させ、【転移】の印を紡いだ。

イメージする人間の元に一瞬で移動する事ができるといって、

この【転移】の印は本来、相当な危険を伴う。

対象とするイメージに揺らぎがあれば、

それは転移効果に影響を及ぼし、全く見当違いの場所に飛ばされる。
何度も失敗（海に落ちたり、上空に転移して酷い目にあつたことも
あつた）

しながら人をイメージする術を磨き、
何とか失敗する事は少なくなったが、
それでもこの術を使う時は慎重になる。

印を書き終えた後、もう一度集中した。
頭の中のイメージをより確実なものとし、
完成した印に手のひらを当てた。

視界が暗転し、回りの景色が急激に変わった。

どこかの屋敷、か？

周りを見回すと、ベッドに寝ている男が目についた。
中年の口元に髭を生やした男。

格好は違うが夕刻に商人から得たイメージの男で間違いないようだ。

しばし安堵する。

成功したようだな。

・・・さて。

問題はここからだ。

寝ていてくれたのは幸いだが・・・。

こいつに事実を追求しなくてはならない。

場合によっては・・・争いの元として殺す。

「・・・何者だ」

突如、ベッドから声がした。

気付かれたか

どっちにしても寝ていた事自体想定範囲外であつたので

仕方が無い事だが・・・。

『えーと何だ。怪しい者じゃない・・・ってのはダメ・・・だよな』
と、溜め息。

「・・・何者かは知らんが、このような時間に

私の部屋に忍び込んだ以上、ただではおかん」

と、男は枕元に飾ってある槍をつかんだ。

『ん・・・衛兵とか呼ばないのか？』

正直意外な反応だった。

これだけの屋敷だ。護衛兵も雇っている事だろう。

叫ぶことで衛兵を招集されるかと思つたが・・・。

「必要無い」

次の瞬間、こちらに向かって襲い掛かってきた。

早い。それなりの手練なようだ。

・・・ま、自分の力を過信しすぎちまう程度のレベル、か。
瞬時に目の前に印を思い浮かべる。

激しい金属音。

槍が【障壁】の印に阻まれこちらに通用していないのを見て、男は目を見開く。

そして、一瞬の隙ができる。

こちらはその隙を見逃さず、相手の両手両足に【束縛】の印を念映する。

印が輝きだすと同時に男はうめき声を上げる。

「く……くそ！ 何をした！」

意外と……すんなり捕まってくれたな
ほつと溜め息を吐いた。

念映は便利だが、普通に指で印を描くより遥かに疲れる事と、複雑な印は紡ぐ事が出来ない事、それに何より素早く動いている相手には念映できないといった欠点が多く存在する。

一定以上の使い手に使用するには、
今のようにここぞと言う時にのみ使用しなければ、
印は不発に終わり、無駄な疲労に襲われるだけである。
万能と言う訳ではないのだ。

おつと……

部屋の外を確認する。

先ほどの槍の衝突音で誰かやって来なければ良いが……。特に誰かが来る気配は無い。
ほつとして男の方に振り返る。

『さて……俺はあんたに聞きたい事があるだけなんだが……。』
と、男をなだめる様に言う。

男はこちらには目もくれず、部屋の外に目を向けていた。

・・・兵士を呼ぶつもりだろうか。

『ああ。衛兵を呼んでもいいが、その時は命の保証はしない』
そう釘を刺して置く。

なるべく余計な争いはしたくない。

「くっ・・・」

男は口惜しそうにこちらを睨み付ける。

『ま、とりあえず話を聞いてくれないか』

「・・・何だ」

と、不快そうにこちらに聞き返す。

何とか話を聞いてくれる状態にはなったようだ。

「えーと・・・まず・・・アンタは誰？」

そう、実際この男が誰だかはわからない。

ダシユタの御偉方とまでは解るのだが・・・。

「な・・・!」

男は目を見開いた。

「お前は私が誰かも分からずにこんな仕打ちをしているのか」

怒りを抑えるような口調でそう言ってきた。

まあ・・・当然の反応か。

『いやまあ、アンタが戦争発起の主犯って事はわかってるけどな』

正確にはその確証など全く無いが、カマをかけてみる。

それを聞いた男の驚きの表情を見ると・・・ほぼ間違いない様だが。

「貴様・・・マラノの者か・・・!」

ん？ マラノ？

確か・・・砂海の西地域を治めている小国だ。

『・・・そうか。マラノに戦争仕掛ける気だったのか』

「とぼけるな！ 他に誰が私をこのような・・・むぐぐ・・・」

とつさに男の口を塞ぐ。

『うっさい。衛兵が来るだろうが・・・』

しかし一つの都市が小国とは言え一国に対して戦争を仕掛けようとするとは・・・

如何に最近のダシユタの発展が目覚ましいものとは言え、少し無謀が過ぎるのではないか。

『ん・・・？』

そんな考えにふけつていると、一つ妙な事に気づく。
今、自分はこの男に触れている。

にも関わらず男のイメージしているものが【視え】ないのだ。

これは普通ならば有り得ない。

仮に本人が「何も考えていない」と言っている状態であっても、人間である限り脳の中で何もイメージしない、などと言うのは不可能なのだ。

考えられる原因はただ一つ。

この男は何者かに精神を支配されている。

ホルスの能力はあくまでその【対象】の考えているイメージを読み取るものであり、何かしら外的要因で体の支配権が別にある場合、

もしくは精神を操られている場合は何も【視る】事はできない。

この男の現状で判断すれば、後者であろう。

前者の場合は正気ではない事が多い。

「むぐ・・・む・む・・・！」

男が呻いている。考え事をしている間、口を押さえっぱなしにしまっていた。

『つと失敬、とりあえずお前は・・・』

「ぷはあっ！・・・衛兵っ！衛兵っ！

ここへ参れ！不審者が私を殺そうとっ！！」

誰かに操られているな。解放してやる。と言おうとしたが、耳をつんざくその叫びに遮られてしまった。

ったく・・・

舌打ちをしながら指先に魔力を込める。

こうなれば、衛兵が来る前にこの男の支配を解放せねば。

七色の光で印を描き始めると、男の顔色が変わる。

「貴様・・・印術師かつ！」

男の言葉を無視し、【解呪】の印を紡ぐ。

【解呪】の印はあらゆる呪いや魔術による支配を解放するが、複雑な印な為、念映による即時発動は出来ない。

『・・・うし』

後ろから慌ただしい足音が聞こえていたが、気にせず男の頭上に描かれた印に手を触れ、発動を促した。

「やめろおおお！」

バタンッ

印を発動し終えた途端、背後の入り口から大量の衛兵がなだれこむ。

「ヨキ様から離れる！！」

なだれこんだ衛兵達はこちらに槍の先を向け、こちらを威嚇している。

・・・ここは大人しくしとくか

『はいはい、と』

余計な争いはなるべく避けたい。

両手を上げ、男から離れる。

ついでに男に掛けられた4箇所【束縛】の印を解除した。
拘束の解かれた男が倒れる所を、衛兵の一人が支えた。
精神支配から解かれた際に気を失っていたらしい。

衛兵達がこちらに駆け寄り、後ろ手に縄で縛られる。

『つてえな……。んな強く縛んなくても逃げねえっての』
ま、少なくともそこのおっさんが目覚めて話を聞くまではな

「ええい！ さつさと歩け！」
ドスンツと背中を押される。

『はいはい……。』
こちらを囲む衛兵達は自分をどこかへ連れて行くつもりのような。
牢屋へぶちこまれるか……。はたまた拷問でもするつもりか。
さて……。どうなる事やら

- - Side S i v i l l a - -

！？

『っ！』

突然、頭に大きな痛みが走る。

この痛みは……

「どうした？」

隣に居たゼクセルがこちらを覗き込む。

『……。【傀儡】が何者かに解かれました』

「あ！？」

と、ゼクセルは後ろに居る者の姿を確認する。

「……。そうは見えねえが」

『いえ、彼女の事ではありませんよ』

「……。ああ、例の戦争起こさせようとした方か」

『そうです』

戦争が起こる事は【盗賊】にとっては都合が良い。戦地への物資を運搬途中に強奪する機会が増えるし、逃走兵、敗残兵をこちらに引き込み、勢力を拡大する事もできる。あのダシュタの防衛総長に印を施す機会があったのは紛れも無い幸運だったのだが・・・

「お前の印を解くつてのは・・・只もんじゃないな」

『ええ・・・。私もそこが気になっている所です』

かの者に掛けたあの【傀儡】の印にはかなりの魔力を籠めた。相当の光術の使い手が自分以上の印術師による解呪でも無ければ決して解ける事は無い筈。

そこまで考えてハツとする。

印術師・・・？

まさか・・・

『アウラ』

【傀儡】とした後ろの女に声を掛ける。

「なんだ」

【傀儡】と言っても単なる操り人形とする訳ではない。

こちらの命令、言葉には忠実に従うが、

本人の性格、外見等はあくまでそのままだ。

その為、一般人には操られている事を見破る事は難しい。

自分の扱える印術の中では最高位のもので、

魔力の消費は激しいが相応の効果をもたらす。

『あの印術師とはダシュタで別れたと言っていましたね』

「ああ」

『・・・では、あの男がダシュタに何を目的として来たか聞いていますか？』

女は少し考えるそぶりを見せた後、

「確か・・・【争いを止める】と言っていた」と答える。

『・・・やはり、そうですね』

あの男・・・

『どこまで私の邪魔をすれば気が済むのだ・・・』

あれだけの侮辱を与えただけでは飽き足らず、こちらの計画まで邪魔をしてくれるとは・・・

「まあ落ち着け。元々そいつを殺す予定だったんだろ？」

なら、殺す楽しみが倍増しただけじゃねーか」

と、横からゼクセルがなだめるような言い方でそう言って来た。

まあ、確かに一理ある。

『ええ・・・。そうですね』

絶対に・・・殺す。

「しかし・・・。まずくねえか？」

『・・・何がです？』

「その姉ちゃんにそいつを殺してもらう予定だったんだよね？」

操ってる事に気づかれれば術を解かれちまうんじゃないか？」

それを聞いて口元を歪める。

『それについては問題有りませんよ』

【念映】さえ使いこなす印術師だ。

奴が自分の術を解呪できる事自体は想定範囲内。

【念映】を使えない状況にし、

尚且つ普通の印を使わせる前に仕留める。

これが最善の策。

「・・・何か策でもあるのか」

『ええ、勿論です・・・』

- - Side Horus - -

まだか・・・

ここに閉じ込められてからかれこれ3刻、
今の所なんの音沙汰もない。

先ほどの男が目覚めれば何かしらアクションはあると思うのだが・・・。

石畳に鉄格子、明かりは入り口近くにあるカンテラのみ。

まあ・・・どう見ても牢屋だ。

決して居心地の良い物ではない。

【転移】の印を使えばいつでも出る事は可能だが、
あの男から話を聞くにはここで待っているのが一番の近道だと考えた。

目覚めればこちらの処分はどうあれ、

向こうの方から直接話を聞きたくなるのは必定。

・・・だと思ったのだが。

『遅い・・・』

つい、ぼやいてしまう。

精神支配から解かれたショックにしても
気絶の時間が少々長すぎるのではないか。
そのまま寝てしまったのだろうか・・・

可能性はあるな・・・

溜め息を吐き、石畳に寝転がる。

なら、寝て待つ事とするか

カタンッ

遠くから扉の開く音がした。

お出ましかね

足音が複数聞こえ、こちらに近づいてきた所で足音が止まる。

「お前達は外に居てくれ。あの者と二人で話したい」

・・・あの男の声だ。

「え・・・そんな！ 危険です！

あやつは貴方を殺そうとしていた者ですよ！？」

「頼む」

少しの間。

「・・・わかりました。我々は入り口で待機しております。

何かありましたら叫んで下さい。すぐに駆けつけますので」

「すまん」

好都合だな・・・

相手は1対1で話をするつもりらしい。

足音が一つになり、こちらに近づいてきた。

「この様な所に閉じ込めて申し訳ない。

本当は目覚めた後すぐにでも自室にお招きしようとしたのですが・

・・・

牢の前で男がこちらに頭を下げてきた。

『かまわない。話すなら、ここのが都合がいいわな。

・・・見たとこ俺以外に人は居ないようだし』

姿勢は変えないまま答える。

「はい」

『それに・・・あんなった結果はどうあれ俺はアンタの寝室に忍び込んだ。』

ま、牢に入れるのは自然なんじゃないか』

「それです」

男がこちらの目を見る。

「貴方は何故あのような時間に私の部屋へ来たのですか？

暗殺目的であれば私は既にこの世に居ません。

それどころか私に掛かっていた呪縛を解き放って下さった。

私としてはそれが不可解で仕方ありません」

ま、予想通りの質問だわな

起き上がり、座り込んだ体制を取る。

『その質問に答えるには……。一つ、聞かなきゃならん事がある』

「……。なんででしょう？」

男の顔に目を向ける。

答えによつては……。殺さねばならない。

『マラノと戦争をしようっていう件、

……。あれは、【アンタ自身】の意思か？』

「違います」

と、即答。

「私の使命はこのダシュタの街、そして何よりダシュタの民を守る事。

その民を危険に晒す行為など言語道断です」

淀みが全く無い口調。

嘘はついていないだろう。

『つてことは……。アンタを操った奴に、そう命令されたわけか』

「はい。操られた後にただ一言、＜マラノと戦争をするよう仕向ける＞

そう言われただけで私は何故かマラノを攻め取る事ばかり考えるようになったのです。

それ以来、もう一つの私の意識が勝手に体を動かし始め、

私自体は何故かそれを客観的に眺めながらも決してそれを止めることは出来ませんでした」

男はそう言って俯いた。

『命令を忠実に行う精神分離体を作り出したってどこか……かなり高等な術だな……それは……』

んで？　今は、もうそんな考えは無いな？』

「はい、部下にも即刻戦争準備の中止を命じました」溜め息。

とりあえずは無駄な争いは避けられた、か。

『それならば、俺からアンタにする事は何も無い。俺の目的は戦争を止める事。それだけだからな』

こちらの答えに、男はどこか釈然としない表情で、

「……もし私が、【私自身の意思で戦争を推進した】

そう答えていたら貴方はどうなさるおつもりだったのですか？」と質問してきた。

『んー……まずは、説得。

んでどうしても融通が利かないようであれば……』

……まあ、嘘をついてもしょうがないか

『殺す、予定だった』

そう言い放った。

男は特に驚いた表情もせず、

「……左様ですか」

とだけ返してきた。

カチッ

乾いた音がする。

男が手に持った鍵で牢の扉を開放したらしい。

『おいおい……。いいのか？』

場合によっちゃ、俺はアンタを殺そうとしてたんだぞ?」

こちらの言葉に、男は首を振り、

「【場合】によっては、でしょう。」

先程にも言いましたが、私は戦争などする気はありません。
むしろ言語道断だと考えています。

そしてそれはこれから変わらない。

ですからそのような【場合】は有り得ないですよ」

そう言いながら笑みを浮かべた。

『ハハハッ、なるほどな』

思わず笑いがこぼれる。

随分と聡明な男だ。今日までダシユタが自治を保ちながら
栄えていった理由、何となく分かった気がする。

「それに・・・鍵を開けずとも、貴方はいつでも出る事ができるの
でしょう?」

『・・・バレてたか』

まあ・・・操られていた時の記憶もあるだろうしな。

印術を用いればいくらでも脱獄する方法がある事ぐらい予測できて
も不思議ではない。

すつと立ち上がる。

「すぐに発つのですか?」

夜も更けていますし・・・寝室を用意させる事も出来ませんが・・・

「

『ああ、ちつと用事があるんでな・・・』

そう、この件が片付いたらすぐにでも確認したい事がある。

つと忘れる所だった

『最後にちと質問いいか?』

「どうぞ」

『アンタを操っていた奴の姿は・・・見たか?』

とりあえずは戦争を回避できたものの、
そいつを見つけない限りは根本的な解決にはならない。
・・・まあ、あれだけ高度な精神支配を施せる者だ。
恐らく顔を見られるようなマヌケな真似はしていないだろうが。

「確か・・・全身を赤いローブで包んだ男です。

残念ながら相手は深くフードをかぶっていたもので、

顔までは見えませんでした。・・・」

言葉の通り残念そうな顔でそう答えてきた。

この男としても自分を操っていた男の正体は突き止めたのだろうか。

『一応・・・見せてもらってもいいか？』

と、男の肩に手を触れる。

「・・・は？」

『そいつの姿を思い浮かべてくれ』

「は、はあ」

男は戸惑いがちに目を閉じた。

まあ別にそんなに本気で思い浮かべてもらわなくても
そいつの事を少し意識してもらっただけでいいんだけどな

【視え】た。

暗い赤色のローブで全身を包んでいる。

背格好から察するに男なのだろうが、

男の言うようにフードを深くかぶっているせいか、

顔はほとんど確認できない。

・・・何となく、既視感はあるのだが・・・。
思い出せない。

『悪い、もういいぞ』

男の肩から手を離れた。

「・・・今のは？」

わけが分からないといった表情でこちらを伺う。

「んー・・・、俺は人の考えてるものを覗ける能力がある

・・・つつつたら信じるか？」

男が目を見開く。

「・・・貴方は、一体・・・」

と、何か聞いたそうな表情をするが、

思い直したように頭を振る。

「・・・いえ、私を支配から解放して頂いた恩人に

野暮な詮索は止めておきますか。

それでは、出口まで案内しましょう」

『あーいや、その必要は無い。こっから直接行くわ』

え？ と小さな驚きを見せる男をよそに、

指先に魔力を籠め、前方に【転移】の印を描く。

「なるほど・・・。私の部屋へ入った時も、その印術を使用したの
ですか？」

描かれた印を見ながら興味深そうに聞いてきた。

『ご名答』

そう言いながら、転移する【対象】の顔を思い浮かべる。

・・・決して忘れる事の出来ない【親】の顔を。

『じゃあな』

印に手を当てようとする。

「お待ち下さい」

呼び止めの声に反応し、振り返る。

「貴方の名前をお聞きたい」

と、真剣な眼でこちらを見ている。

「たはー・・・。参ったな。」

今までのお堅い態度を見る限り、

アウラの時みたいにはぐらかせる相手じゃなさそうだし……。

『……アンタは？』

とりあえず聞き返してみる。

男はその言葉にハツとしたような表情をし、

「こちらから名乗るのが筋ですね。失礼しました。

私はダシユタ防衛総長のヨキ・グルヴェインと申します」

……そんなにクソ真面目に答えられると困るんだが。
しばし悩む。

ヨキはこちらを見たまま次の言葉を待っているようだ。

仕方ない……ダシユタの幹部であれば、いずれ何か縁があるかもしれないしな。

『……ホルステッド・ティルフェルム、だ』

その言葉に、ヨキが大きく目を見開き、呆然としている。

あの反応を見ると、やはりこちらの事は知っている様子だ。
無用な詮索を受ける前に……

退散。

『んじゃそう言う事で』

と、そそくさと転移の印に手を当てた。

- - Side Yokii - -

「ホルステッド・ティルフェルム、だ」

目の前の男はそう言った。

余りの衝撃にしばし呆然としてしまう。

何故、このような所に？

そう聞こうとした時には、既に彼の姿は無かった。

ホルステッド・ティルフェルム・・・

東の山岳地方に栄えるティルフェルム教国において

【生ける守り神】として崇拜されている者の名前だ。

文字通り実在し、200年もの間あの国の実質的な王を勤めているらしい。

不老不死だとか、あらゆる術を使いこなすだとか、

夜空に星々を操る力があるだとか神がかりな噂は絶えない。

中にはそれらはティルフェルムが他国牽制の為に用いているデマで、本当は似た者を代わる代わる王位に乗せているのではないか、などと言う噂もあるが、真相は定かではない。

そんな立場の者がこのような所に何故・・・？

彼が偽りを言っている可能性もあるが、

あの場でそんな嘘をつく意義は感じられない。

というより・・・あの若い見掛けに反する独特の威圧感、昨日見せたあの卓越した印術。

そして真実は定かではないが、

「相手の考えているものが見える」

そんなことも言っていた。

いずれにしても彼が只者ではない事は明白。

・・・だが。

『いかな・・・』

そう呟き、軽く溜め息を吐く。

考えても判る事ではない。

彼が自分を救ってくれた事は純然たる事実。

それで良いのではないか。

そんな考えに至る。

それよりも、自分には山ほどやる事があるのだ。
操られている間に自分がしてしまった事の
後始末をしなければならない。

軍備の停止に、領主との会談、
緊張状態にあるマラノにも自ら弁明に赴く必要があるだろう。

忙しくなりそうだな・・・

だが苦では無い。

自分の意思で行動する事。

たったそれだけの事が何と晴れ晴れしい事か。

そんな事を思いながら、外の方へと足を踏み出した。

- - Side Horus - -

【転移】の印が消え、巨大な樹の前に降り立つ。

左を見ても、右を見ても深い、深い森が目に入る。

だが、この大樹の周囲三十メートル程度には木々はおろか、
草の一本さえ生えていない。

まるで、植物達がこの大樹に畏怖するかのように。

400年程前、自分が初めてこの地に来た時から

・・・いや、恐らくこの樹がこの地に在ったその時から、
ここは何も変わらない。

大樹の【種】を宿した者にしか見ることすら適わぬ
結界を、【こいつ】が張っているからだ。

『よつ』

目の前の【樹】に声をかける。

すると、樹の根本から丸く淡い緑の光が沸き、
目の高さまでゆっくりと上昇する。

その光は眩く輝きながら人型へと姿を変え、

次の瞬間、光が収まり、その姿がはつきりと現れる。

男とも女とも取れる中性的な顔立ちと、

鮮やかに光る緑の長い髪。

この大樹ユグドラシルの精神体である【白夜】もまた、
初めて見た時と何一つ変わらない。

>>お帰りなさい<<

頭の中に透き通った声が響くと同時に、
目の前の【モノ】が目を開き、

全て見透かすような真紅の瞳でこちらを見る。

前に見た時は、思わず目を逸らしてしまったものだが、
今回も同じなのは癪なので見つめ返し、

『アンタは・・・変わらねえな』

そう言い放つ。

>>貴方は　大分、成長しましたね<<

そう言いながら穏やかに目を細める。

『ハハッ、皮肉にしか聞こえね』

>>　そろそろ、来る頃だと思っていました<<

こちらの嫌味を無視し、本題に入ってくる。

『ま、そうだろうな。』

・・・アウラを俺に会う様、仕向けたのはアンタだろう？』

>>そうです<<

やっぱりか

『ってことは・・・【解禁】って事か？』

・・・以前この白夜と会った時、

万が一自分と同じ【種】を体内に宿した者を見つけても、決して名乗ってはいけない。
そう、釘をさされていた。

>>はい。彼女は既に答えを見つけ、

一人で自分の使命を果たす術も身に付けました。
もうあなたに会わせても良いと判断し、

彼女の能力に【干渉】する事で貴方と会う様、導きました<<

『答えを見つけた・・・か』

【何故人を助ける】といった問いに、

【人を助けるのに理由などいるのか】

そう言い放った彼女の目に確かに迷いは無かった。

しかし・・・

『前の”月虹”は確か20年前くらいだったよな？』

>>・・・そうです。あの時に彼女を【再生】させました。

その、強い想いに答えて・・・<<

『そうかい・・・』

複雑な思いで生返事をする。

あの見た目で判断する限り、ユグドラシルの【種】を宿し、【再生】したのは20歳前後・・・。

彼女はたった40年であの境地に至ったのか。

自分が使命に対し迷いが無くなったのは、
100歳を過ぎてからだった気がする。

と、こちらの様子を見てか【白夜】が微笑みを浮かべる

>>あなたと彼女ではその【役割】も【意味】も違います。

代々【調停者】の方は答えを見つけるのに時間がかかります。
何も、気に病む事はありません<<

『はいはいわーったよ・・・』

この”樹”はちよくちよく人の心を覗くから困る

【白夜】はこちらの反応を見据えた後、表情を無に戻し、

>>では【調停者】と【救済者】

対なるあなた達は、共に歩み、各々の使命を果たして下さい<<
と言い放ち、その姿を消していった。

『・・・ったく。相変わらず言いたい事を言っただけやがる』

樹に向かって文句を言う。

『ま・・・』

右手の指先に魔力を込める。

『そうするさ。言われなくてもな』

そう呟きながら、【転送】の印を紡いだ。

- - Side Aura - -

自分の中に二つの感覚が共有している。

目を開いている時と閉じている時。

それぞれで居る場所が全く異なる。

目を開けば、ただひたすら広いどこまでも続く暗闇。

本当に目を開けているのか分からない位、何も見えない。

いくら歩こうとも、いくら叫ぼうとも

自分が進んでいる事もわからない、

自分が何を叫んだかすら聞こえないそんな世界に身を置いている。

そして目を閉じると、

元々私が居た世界、広大な砂漠が見える。

砂が擦れ合う音も聞こえるし、

自分が何をしているかと思い出す事が出来る。

まるで元の世界に戻ったかのようだが、

たった一つ違うのは、私の意志では体を動かす事が出来ない。

ただ【もう一人の私】がしている行動を見ているだけ。

「良いですね？ アウラ」

聞き覚えのある声が私の名前を呼ぶ。

『・・・分かった』

・・・私の声。

目の前の男に只忠実に従う、もう一人の私が発した言葉。

何をさせるつもりだ・・・

もう一人の自分と共有した記憶を反芻する。

>ホルスという男を見つけ次第、正面から【縮地】で背後に回って下さい

恐らく奴はあなたが【縮地】を使用した瞬間、正面に【障壁】を張るでしょう

背後は一時的に無警戒になる筈です。その隙に 刺し殺しなさいく

薄笑みを浮かべながらそう私に命令する男 印術師シヴィラの姿が浮かぶ。

なっ・・・

確かあの時私に「協力して欲しい」

あの男はそんな事をほざいていた。

先日自らが苦渋を舐めさせられた同じ印術師、ホルスへの復讐に、だ。

私が正気であればどんな事をされても協力するつもりは無い。

だが・・・私の体の支配権が別にあるのならば話は違ってくる。

この男は私に直接手を掛けさせるつもりだ・・・。

『何故【障壁】を張ると言い切れる？

奴は確か、【結界】という全方位防御の印術を使用していた。

あれを張られては私の攻撃は通用しないのではないか？』

記憶の中のもう一人の自分がそう言った。

ホルスが【結界】を使用していたのを見たのは紛れも無い、私自身もう一人の私も、私の記憶を継承しているという事が・・・。

シヴィラはそれを聞き、頭を振る。

>いえ、その心配には及びません。

【結界】はかなりの高等印術、如何な卓越した印術師といえど念映など不可能です。

従って貴女の【縮地】を確認してから発動はできませんよ。

咄嗟の危険には【障壁】を張るしか術が無い筈です。

危険を察知した方向に向けて、ねく

と、嘲る様な笑いを顔に浮かべている。

同じ印術師という事でその特徴も弱点も心得ているという所だろうか。

そうなるとホルスが自分を振り返り討ちにする事に【期待】は出来ないかもしれない。

> 万が一に備え、少し奴の念映を【使いにくい状況】にします。

貴女はただ、奴を確実に仕留める事を考えて下さい。 良いで
すね？アウラ<

『わかった』

無感情な声でそう答えた後、私は歩を進める。

向かう先は、砂都ダシユタ。

何とか【私自身】を止めようと足を動かす事を必死に拒否しようとするが、

どうにもならない。完全に体の支配権はもう一人の自分にある。

例え【不死】であろうとこんな事になつては何の意味も無い。

あのような男に操られてしまう事態を招いた自分への憤りと

自分の意志とは無関係に動くこの体に絶望感を抱きながら、

只ひたすらにもう一人の私に抗おうと足掻いていた。

- - Side Horus - -

再び砂の都へと視界が移り変わり、

自分の体が急激に下降する感覚に襲われる。

すぐに足元に【浮遊】の印を念映し、自分自身の体を空中に留めた。
地平線からは太陽が顔を覗かせていた。

転移先は【アウラの100メートル上空】とした。

相手がどこにいるかわからない状況で

【転移】を用いる際は対象の上空としている。

移転先が建物の壁で一時的に動けなくなってしまう、

といった事を避ける為である。
すでに上空へ転移すると判っていれば、転移後の危険は上空の方が少ない。

・・・最も、この方法は度重なる転移の失敗で、意図せず上空に転移してしまった経験から得た物でもあるが・・・。

先のヨキの下へ行く時は、対象が軍部の建物と予想されたので、上空に出れば見つかる危険性があつた為、半ば博打気味で本人の間近に転移をしたのだ。

今回はそのような事をする必要は無い。

さて・・・

転移の結果は全く問題が無いのだが、別の問題が発生した。

『どういうこつた・・・これは・・・』

眼下の砂都は異様な事態となっている。

街全体に何かが覆っていて、アウラの姿を確認する事はおろか、建物の高い部分程度しか見る事ができない。

『霧・・・か・・・？』

砂都ダシユタは文字通り砂漠の中の街である。

砂漠において霧が発生するなど、極々稀で、

まして都合よくダシユタ全体を覆うなどという事はまず有り得ない。
恐らくは、人為的なものだろう。

とりあえず・・・アウラを探すか

【浮遊】の印の力を弱め、ゆっくりと高度を下げる。

地面に降り立ってみるとますますその視界の悪さが際立つ。

夜も明けているというのに、5メートル先すら見る事はできない。

おいおい……

いくら近くに居るとわかつていえるとは言え、これでは案外探すのは骨かもしれない。

いっそ再度【転移】でアウラのすぐ傍へ転移してしまおうかと考えた矢先

「ホルス……か？」

前方の霧の中から聞き覚えのある声が響く。

「ん、ああ。アウラだな？」

「そうだが……私に何か用か？」

霧の中から淡白な声で答えが返ってくる。

相変わらず……愛想わりーな……

思わず苦笑してしまう。

「ああ。とりあえずどこか入らないか？」

この状況じゃあ……まともに話す事もできん。

しかし良く俺の姿が見えるなお前は……」

こちらからではわずかにシルエットが見える程度。

とてもじゃないが声を聞かなければアウラとはわからなかった。

「目は良い方なのでな……。今、そちらへ行く」

と、急激に肌がざわついた。

長きに渡る生の中で身につけた勘が危険信号を知らせている。

咄嗟に前方に【障壁】の印を念映する。

前方のアウラのシルエットが消えた。

直後、横に風が流れる。

縮地か・・・！

そう思った時には既に後ろから鋭い痛みが走っていた。

- - S i d e A u r a - -

声にならない叫びを上げる。

自分の中の時が急激にゆっくりとなり、

たった今感じたその感触が重く強く、のしかかる。

この感触自体は慣れたものだった。

私は必要があれば・・・いや、刺されても致し方ない連中に対してのみ、

この手で短剣を振るっていた。

最初の頃は、例え相手がどんな者にしろ、

”人”を殺した事に対する罪の意識に苛まれた。

だがいつしかこの砂海に巣食うそういつた連中をどこか

”人”とは思わず、無機物として扱い、

それを壊しているような感覚に変わってきた。

だが今私は・・・

初めて”人”を刺した。

そんな気がする。

もう一人の私が突き出した短剣は、

目の前の男　ホルスの首筋を突き刺していた。

確実な急所・・・彼が助かる事は決して無いだろう。

短剣を抜き取ると、

黒衣の印術師は鮮血を後ろに噴出しながら地面へと体を埋めた。

もう一人の私はいつものように短剣に付いた液体をヒュッと払い飛ばした後、

倒れた体の状態を確認しようと手を伸ばす。

だが、私は腰を屈めた体制のまま動きを止めた。

そして何故か、もう一人の私の動揺を感じ取れる。

「つつう……いつてえ……」

『え？』

意識だけの私ともう一人の私の言葉が初めて一致した。

有り得ない光景だった。

死んだ筈の男が苦い顔をしながらゆっくりと立ち上がり、傷がある筈の場所を手でさすっている。

『馬鹿な……何故……』

出血が止まっている。

何かの術、か……？

彼を刺した幻術でも見せられたのだろうか。
……否。

目の前の彼は確かに自身の血で汚れていた。

そしてあの苦痛を浮かべた表情。

確かに彼は一度致命傷を負っている筈。

となると……傷を瞬時に治癒した、という事だろうか。

この男の底知れない実力を考えれば有り得ない事ではないが……。

ホルスは首をさすっていた手を外し、私の方へ顔を向け、

「まさかお前も……か？」

そうため息混じりに言いながらこちらを諦めた様な表情で一瞥する。

『つく・・・!』

再度ホルスに攻撃を仕掛けようとするが、何故か途中で手が止まる。もう一人の私の動揺がさらに広がって行くのが手に取るように感じ取れる。

視線の先にある自らの手が七色の光に包まれている。

どうやら、ホルスに何かしらの術を掛けられ、体の動きを封じられたらしい。

「ま、ちつとじつとしててくれ」

恐らく・・・勝負は決した。

先日の闇術使いに引き続き、

またもや捕らえられての敗北に複雑な思いはよぎるが、

この結果自体にはひとまず安堵する。

後は・・・

ホルスが私をどうするか、だが・・・

自分が操られている状態にある事をホルスが気づき、術を解除してくれる、という期待が無いと言えば嘘になる。

しかし自分の命を狙った者に対し、真っ先に”操られている”

などという考えに至る者はそうは居ない。

ましてホルスとは一日程度行動を共にしただけで

さして長い付き合いというわけでもない。

むしろ”裏切られた”、”最初から自分の命を狙う為に近づいた”

などと言う、負の考えに傾くのが普通だろう。

ホルスは正面に立ち、

「ちと、調べさせてもらっぞ」

とこちらに手を額にあててくる。

『何を・・・』

抗議しようとする私を無視し、

「やっぱりか・・・」

僅かに表情を曇らせながら呟き、額に当てていた手を下げる。

「解放してやる」

ホルスは指を立て、七色の光をその先から発した。

もう一人の私はそれを見て目を見開く

『や・・・やめろ！！』

動揺を大きくし、必死に束縛から逃れようと四肢を動かそうとするが、

ホルスの仕掛けた印は全くそれに動じる気配は無い。

解放・・・

その言葉の意味する事がシヴィラによって

自らに仕掛けられた術に対するものだ

と認識するまでしばしの時間を要した。

気づいてくれたのか・・・？

安堵と同時に自己嫌悪に襲われる。

操られていたとはいえホルスをこの手で刺したという事は紛う事なき事実。

それが彼を死に至らしめなかったのはあくまで結果論だ。

一歩間違えば彼を殺していた。

正直、解放されたところでどの面を下げ接すれば良いのかわからない。

ホルスが目の前に印を描き始める

が、途中で何故か手を止め、眉を一瞬ぴくつと吊り上げた。

「そうか・・・」奴ら”が私の解放を大人しく見ているわけは無い、か

辺りの様子が急激に変わっていた。

ダシユタ全体を覆っていた霧

私を印術で操ったあの男、シヴィラの【水術】によって

呼び出された霧が掻き消えていった。

そして・・・

「・・・誰だ？」

霧が晴れた後、ホルスの後方に闇術師ゼクセルの姿があった。

- - Side Si villa - -

よし！

指先に最大限の魔力を集め、印を紡ぐ。

突然上空から奴が現れたのも然る事ながら、

傀儡としたあの女、アウラが致命傷を与えたにも関わらず、

あの男が立ち上がった時には冷や汗を覚えた。

傷を負った瞬間に【治癒】の印を念映でもしたのだろうか・・・。

だが結果的にゼクセルがあの男の”影”を捕らえた。

奴の影を出す為に霧を晴らした結果、

奴の念映による危険性を高めたが、

朝陽の方向と高さが幸いしてか、

奴の背後、それも10数メートル程離れた所で

ゼクセルが奴に術をかける事ができた。

対象の影の上に立ち、数秒間足元に置いた相手の影に魔力を送る事で、

相手の動きを封じる。

【シャドウホールド】は闇術の基本ながら、その汎用性は高い。

ゼクセルと組んで暗殺を行う時はこの術でゼクセルが動きを止め、自らが印術により対象を仕留める、という事が多い。

奴が動けない事とこちらが奴の死角に位置する事。

この二つの条件から奴から念映による印の攻撃を受ける事はない。念映はあくまで姿を確認したもの仕掛けるもので、こちらの姿が確認できない限りそれを行う事はできない。

後は 自らが扱える中で最も強力な印【獄炎】を使い・・・
確実に息の根を止める。

例え【障壁】を念映をしたところで、この印の威力であれば防がれる事は無い。
そして直撃すれば【治癒】の印などで延命等は出来ない。

完成した【獄炎】の印は強烈な赤い光と共に、自らの体の倍程もある巨大な炎の弾を生成し、影を捕らえられて動けないあの男の元へと飛んで行った。

- - Side Horus - -

正面の朝陽の姿を見て舌打ちする。

シャドウホールドか・・・

いくら霧が掛かっていたとはいえ、自分の影を背後に置いてしまったのは迂闊だった。

とはいえ、自らの生まれ持ったの魔力属性は”光”である。

そして印術だけではなくその生まれ持ったものを生かした光術の方も何年も前に大抵の術を習熟している。

頭上に光を発生させ、一時的に影を消し、拘束を解くことは造作も無い。

だが・・・間髪入れずに後方から強い魔力を感じる。

目の前のアウラが目を見開く。

恐らく【障壁】では防げない威力の魔法がこちらに向け放たれたのだろう。

拘束を解いて避ける事は容易いが、その場合アウラが魔法をまともに受けてしまう。

周到な事で・・・

最も まともに喰らった所で二人が死ぬという事は無いが・・・死なないにしてもそれなりの”苦痛”はある。

『仕方ない・・・』

軽く溜め息を吐きながら背後に魔力を集中させた。

攻撃が”魔法”と分かっているのなら対処方法は他にもある。

それなりに魔力を消耗するので余り使用したくないのが本音だが・・・。

魔法がこちらに達しようとする所で、後ろに光の幕を張る。

【ディスプレイールド】

光術の最上位魔法の一つで、光の幕を作り出し、その場所を通過した全ての魔法を無効化する防御魔法。

後ろから放たれた魔法は炎系列の魔法だったのか、少し熱を感じたが、すぐにそれも収まった。

魔法の無効化に成功したようだ。

「な………!!」

背後から声上がる。

ん……？

聞き覚えある声のような……

そういえばアウラの攻撃方法にしろ、どうにもこちらが印術師であり、

”念映”を使用する事と、その対処法に沿った奇襲を連発してくる。

……まあ……心当たりが有り過ぎて誰が誰だかわからないが。

今まで自分に襲い掛かった者、争いを持ち込んだ者で

印術で脅して逃がした人間は数知れない。

『んじゃ……こちらから行こうかね』

二度目というのならば容赦はしない。

最も……アウラを操り利用した、という点で

例え二度目で無くても万死に値するが。

まずは【シャドウホールド】の解除。

頭上に光を発生させるべく魔力を集中する。

相手の目を眩ます光術の基本【フラッシュ】は闇術による影を利用した大半の術を一時的に無効化する。

頭上から眩い光が発生したが、
何故かその前には既に動けるようになっていた。
不思議に思いながら背後を見て、舌打ちする。
既に人影が無い。

『逃げられたか・・・』

追えば間に合うかもしれないが、
とりあえずアウラをこのままにしておくのは忍びない。

ま、いいか

既に奴らの顔はアウラが見ているだろう。

アウラの意識が戻ればアウラから奴らのイメージを引き出し、
【転移】の印でどこに居ようが追える。

「く・・・離せ!」

一通り事態が飲み込めたのか、再び拘束から逃れようと抵抗する。

『あーわーったわーった。【解放】するからちよつと待ってる』

アウラを解放すべく印を紡ぐ。

『ま・・・今のお前にとっては【消滅】だろうがな』

完成した【解呪】の印に手を触れ発動させた。

「や・・・止め・・・!」

術によって形成された支配が解放されていく。

こちらを睨んでいたアウラの目付きが変わった。

解呪は問題無く成功したようだ。

それを確認すると同時にアウラの手足に仕掛けた【呪縛】の印を解く。

『・・・つと』

アウラが膝を地に落とし、倒れようとする所を支える。

「すま・・・ない・・・」

こちらに向けてそう一言だけ言うと、がくつと支えた手にもたれ掛った。

術が解かれた瞬間に気絶・・・先のヨキと同じ症状だ。

目を据わらせる。

『どうやら・・・同じ奴と思って間違い無さそうだな・・・』

ダシユタの防衛総長を操り戦争を助長しようとしたこと。

そして今回の件・・・。

もはや放置して良い対象ではない。

気絶したアウラに目をやる。

とりあえずは・・・宿に戻るか。

「さん！早く！！」

と、なにやら通りの奥の方からやかましい声が聞こえてきた。

声のする方に顔を向けると、

頭に三角巾を巻いた中年の婦人が

ダシユタを見回っている衛兵の手を引っ張り、なにやら騒いでいる。

「あの男です！ 嫌がるあの女の子に無理やり怪しげな術を掛けてたんですよ！」

・・・婦人の指は、こちらを指していた。

『・・・・・・・・・・は？』

- - Side Zexel - -

ダシユタの北門近辺の一角。

この辺りは倉庫が多い為、この時間帯は大抵市場への道を荷車が絶えず行き交っているが、今日は見事なまでにその姿が無い。

砂漠の民はこと天候に関しての変化に敏感だ。

それは何よりも砂嵐を恐れての事。

砂嵐の日は必ず西の空が淀むという予兆がある。

そんな日は暗黙の了解で全ての商店は店を開く事無く、皆それぞれの家で静かに砂嵐が過ぎ去るのを待つ。

今日は特に砂嵐の兆候も見えなかったが、

シヴィラが水術で呼び出したダシユタを囲う霧は、ダシユタの民の警鐘を鳴らしたのか、

砂嵐の日の如く商売をしている者の姿など無い。まあそれも計算の内ではあった。

その全く人影の無い倉庫の壁にもたれながら切れた息を落ち着かせた。

ここまで全力で走ったのはいつ以来だろうか。横に居るシヴィラもめずらしく息を荒げている。

「んじゃ・・・こちらから行こうかね」

あの黒衣の印術師がその言葉を口にした瞬間、本能が自らに死刑宣告を与えた。

光魔法を扱えるというのであればあの程度の拘束は意味がない。迷う事無く逃げに入っただ、正直逃げ切れるとも思っていなかった。

だが・・・

『追って来て・・・ないのか？』

倉庫の壁の物陰から覗いているシヴィラに問いかける。

「ああ・・・」

奴も同じように感じたのだろう。

その口調からは普段の余裕が微塵も感じられない。

何故か後ろから追ってくる気配は無かった。

かわりにいつ奴の魔法が飛んでくるかと生きた心地もなかったが、その様子も無く、ここまで逃げてくる事が出来た。

「どうやら」見逃された”らしい。

・・・冗談じゃねえ

『なあ・・・シヴィラよ・・・』

「なんだ」

シヴィラは横で何か思いつめたような顔をしながら生返事をする。

奴には悪いが・・・

この仕事は降りる事に決めた。

当然、契約の不履行になる訳だから金は貰えず、

今までの労力も無駄となるが・・・。

正直二度と奴と関わりたくない気持ちの方が強かった。

『悪いが』

それを切り出そうとした瞬間、

シヴィラの表情が一変する。

「降りる、というのですか？」

氷のような無表情でこちらに顔を向け、問いかけてきた。

・・・まずいな

キレた時の表情だ・・・。

『・・・と言ったらどうなるんだ？』
背中を一本の汗が伝う。

シヴィラはそれに答えずに、
スツとこちらに手の平を向けてきた。

『オイ・・・正気か？』
シヴィラの手の平に魔力が集中する。
魔法で闘り合うというのであれば、
奴に手の内は全て知られている以上、こちらに勝機は薄い。

『待て・・・わかったよ』
両手を上げながら、はぁ、と大げさに溜め息を吐く。

その様子を見て、シヴィラは手を下げるが、
表情は依然として変わらず、無表情のままだ。

『だがよ・・・正直勝ち目があるとは思えないぜ？』
奴の使う光魔法は俺と相性が悪いし、
何より奴の魔力量はケタが違う。

・・・おまけにあの女の術も解かれたんだろっ？』
ただその現実を告げる。

先ほどシヴィラが強い頭痛を感じていた事から、
あのアウラとかいう女にシヴィラが掛けた術も解かれたと考えて良
い。

印術師一人でも勝ち目が薄いのに、
あの女まで加われれば余計にこちらの旗色は悪くなる。

だがシヴィラはその忠告も聞かずに
ただ前方の地面を無表情に見つめ、何かを考えている。

『まだ何か・・・策があるのか？』

そう聞きながらも余り期待はしていない。

奴に対抗し得る手段など有るとはどうしても思えない。

だが・・・

「奥の手を・・・使う」

策でも何でもない、ただの”無茶”をシヴィラは口に出した。

『おいおいおいおい！ まさかアレを使う気か！？』

「・・・ああ」

シヴィラは淡々と答える。

”アレ”を使う意味はこの男にもわかっている筈。

確かにあの男も倒せるかもしれないが・・・

制御仕切れなければ自分達の命も危うい。

そして恐らく・・・この辺りは焦土と化す。

『・・・いいのか？』

ダシユタはこの男にとってもそれなりに思い入れのある場所の筈。

いずれは彼の地の支配権を得ようと画策しているようにも見えたが・
。。。

「ああ。あの男を始末しなければどの道、私に未来はない」
あつさりとそう答える。

確かに・・・あの女から自分達の情報は奴に届くだろう。

そうなれば、これから奴に命を狙われ続ける危険性は高い。
ならば確かに、どのような手段を用いても奴を殺すべきだ。

『判った。んなら一旦アジトへ戻るんだろう？』
それに口では答えず、シヴィラは前を歩き出した。
こちらにもそれに無言で後ろに続く。

”アレ”はダシュタ近郊のアジトの地下室に隠してあるらしい。
入手する際の仕事には携わったが・・・。
まさか自分がその使用にまで関わるとは夢にも思わなかった。

鬼気迫るシヴィラの背中を見ながら、ふと溜め息が漏れる。

俺の人生もここまで か？

と、独り天を仰ぎながら苦笑した。

- - Side Horus - -

「ですからー！ その人が若い女の子がやめてえ〜って嫌がつ
ているのを

この男が女の子の頭を無理やりこつ

婦人は片手を前に出してなにやら怪しい手つきを表現しながら、
一心不乱に”事情”を説明する。

・・・何か 発言ごとに微妙に脚色されていくんだが・・・
眉間にしわを寄せ、両こめかみを片手で抑えた。
対面にはつい昨日に会ったばかりのダシュタ防衛総長ヨキと、
自分をここまで連行してきた衛兵が困ったような顔で婦人の”証言
”を聞いている。

ダシュタ防衛部隊詰め所の一室。
いわゆる取調室といった場所だろうか。

思わぬ濡れ衣を着せられ、こんな所に連行されてきてしまった。

迂闊だったな・・・

溜め息が漏れる。

あのような異常な霧が発生していて人通りは無いだろうと油断していたが、

考えてみれば霧が晴れたら外の様子を覗く住人が居るのは当たり前だ。

にもかかわらずあんな道端で騒ぐアウラに術を掛けていれば、周りの目からは奇異の目で見られるのは至極当然といえば当然だろう。

連行される前に【転移】なりなんなりで逃げる事も可能だったが、アウラを休ませる場所の確保もしたかったし、

ダシユタ防衛部隊にはヨキという”ツテ”もあった。

ついでに彼に今朝の霧の事を説明する必要もあるだろうと、黙って連行されてきたものの・・・。

「しまいには怪しい術にかかって気絶した彼女に抱きついて」

『いやまてそれはいくらなんでも違うだろう!!』

話がさらにあらぬ方向へ飛んだので思わず早口で突っ込みを入れる。

婦人はひつと驚くと、立っている衛兵の後ろに隠れ、

「脅しても無駄よ！ 私はそんなものには屈しないんだから！」

と、衛兵の体から顔を半分出してこちらを睨み付けて来る。

・・・このババ・・・

殴りたい心情を押さえ、ただ大げさに溜め息を吐き、元の姿勢へと戻る。

「まあまあ・・・事情はわかりました。

後は我々の方で処遇を決定致しますので、ご婦人はお帰り頂いて結構ですよ」

ヨキがたしなめるように言う。

婦人は一瞬むっとした顔をした後、

「もつと嚴重に見回りお願いしますよ!？」

こんな男がうるついていたら安心して外を出歩けないじゃない!」
と、ヨキに突っかかっていた。

「申し訳ありません。警備の方は一層強化して参りますので。

おい、すまないがこの婦人を家までお送りして差し上げてくれ」
彼はそれをさらりと流すと、立会いをしていた衛兵にそう声を掛け
た。

衛兵は少し戸惑った顔をする。

「しかし、この者と貴方二人になってしまいますが」

ヨキは無言で衛兵を見つめる。

衛兵はそれを見てハツと何か気づいたような顔をする。

「いえ、要らぬ心配を致しました。ではご婦人、こちらへ。」
と、衛兵はまだ喋り足り無そうな風情の彼女を連れ、退出していつ
た。

・・・しばしの無言。

なにやら少々気まずい雰囲気が漂う。

「まさか、こんな形で貴方にまたお会いする事になるとは思いま
せんでしたよ」

と、半ば笑いながらヨキがこちらに顔を向ける。

『俺もだよ』

片手でこめかみを抑えたまま小さく首を振り、大げさに溜め息を吐

く。

ヨキはハハつと小さな笑いをこぼした後、
「さて・・・説明をして頂けますか」
と、少し表情を改める。

『ああ。・・・だがその前に』
もちろん説明は元々するつもりだったが、一つだけ気に掛かっている事がある。

「彼女なら、客室にて休ませてあります。ご心配なく」と、聞く前にヨキはそう答える。

『ん・・・そうか』
なら安心だな。

『ま・・・単刀直入に言うとな』
と、少し間を置いた。

ヨキは答えを促すように、こちらに視線を送っている。
『アウラは　ああ、今その客室に居る奴の事な。
あいつはお前と同じで精神を操られていた。

んで恐らくは　操った人間も同じだ』
そう言うときヨキは大きく目を開ける。

「それで、彼女は術師の顔を見たのでしょうか？」
『恐らくな。少なくともその仲間の顔は見ている筈だ』

全員フードなどで顔を隠している可能性も否定できないが、最後のあの魔法、あれは顔を隠したままなどで放てる魔法ではない。操られていたとはいえ、外の景色は見えていた筈。
あの位置関係からしてアウラがその者の顔を見た事は間違いないだろう。

『ついでに今朝の霧も恐らく奴らの仕業だ。

目的は 多分俺の命を狙う為、だな』

「え・・・」

ヨキが不思議そうな顔をする。

”霧”を出すという事とこの身を狙うという事が結びつかないのだろっ。

『 まあ、簡潔に言うとおあいっ状態だと俺の力は半減される

そういう状態で、わざわざアウラを操って襲わせた事から、

目的が俺の命にあるという事は明白だな』

なるほど、とヨキは深刻な顔で頷く。

『とにかく、野放しにして良い奴らじゃない。

アウラが目覚め次第記憶を引き出し、そいつんどこへ行つて来る』

「では兵を数名、急いで手配します。どうかお連れ下さい」
首を横に振る。

『いや、いい。奴らのアジトかもしれない場所へ直行するんだ。

万が一にも無駄な犠牲は出したくない』

それに正直いくら日頃鍛錬をした衛兵であろうと

魔法での戦いになれば、足手まといにしかない。

「ならば私が・・・」

『おいおい・・・ダシユタの防衛総長がここを離れてどうする』

「そう ですね・・・」

残念そうな面持ちのヨキ。

まあ、敵は先日まで自分を操っていた相手だ。

少しでも何かをしたいという気持ちはわからないでもないが・・・
悪いがこの件で彼らが力になれることは何もない。

『まあ奴らの事については任せてくれ。

とりあえず　アウラの居る部屋まで案内してくれるか?』

「わかりました。こちらへ」

そのヨキの促しで立ち上がると、

入り口の扉がガチャリと音を立てた。

- - S i d e A u r a - -

うつ

急な光に目が眩み、右手を目の上に添えた。
その添えた右手を見てはつとする。

戻った・・・のか？

視線の先の手を握ったり開いたりしてみる。
それは紛れも無く、自らの意思で動かしていた。
安堵に息を吐きながら、手から視線を外して周りを見回した。

『ここは・・・・・・?』

体を起こす。

部屋の造りからしてどこかの屋敷の寝室・・・だろうか？

何故、私はこんな所で眠っている・・・？

改めて自分の置かれた状況を考える。

あの時ホルスが自分に向けて印を描いた後、
自分を縛っていた何かが壊れたのを感じた。

「解放してやる」

彼は確かに意識の奥に封じられた自分に向けてそう言った。
ホルスが紡いだあの印は、恐らく私に掛けられた術を解呪するもの
だったのだろう。

だがそのすぐ後からの記憶が無い。

術が解放された反動が何かで気を失ってしまったのだろうか。

寝ていたベッドから離れ、立ち上がる。

こんな所で寝ている場合ではない。

まずはホルスに会わなければ。

あの男には・・・大きな借りが出来た。

彼が何かを為そうとしているのであれば

それを手助けする事で今回の恩に報いたい。

ある種決意にも似た感情で前を見据えながら扉に手をかける。

部屋を出ると、横に向けて広い廊下が伸びていた。

これだけの広さ、個人の所有する建物ではないだろう。

かといって宿屋という雰囲気ではない。

壁に装飾用の武器が立てかけてあったり、

天井際には青い旗が垂れ下がっていたりする。

人の気配は今の所しないのだが、

何か建物全体に熱が籠ったような覇気を感じる。

雰囲気としては”砦”という言葉が相応しいだろうか。

何故こんな所に連れて行かれたのだろうか・・・？

首を傾げる。

罪人として預けられたのであれば、

そもそもあのような客室に寝かされているのはおかしい。

まあ、考えた所で分かる訳も無いか

とにかく、人を探そう。

廊下を歩きながら人の気配を探る。

と、一つ奥の部屋の方から僅かに人の話し声が聞こえた。
話し声が聞こえた部屋に歩み寄り、

扉に耳を当てて。

念の為、気配は殺した。

> ですね・・・<

壮年の男の声が何かを呟くように言っているのが聞こえた。

現状の情報が何かしら得られるかもしれないな。

このまま話を聞いてみる事にした。

だが

> まあ奴らの事については任せてくれ。

とりあえず アウラの居る部屋まで案内してくれるか？<

・・・！

聞き覚えのある声。

紛れも無くホルスの声だろう。

会話の内容を理解するよりも先に手が動いていた。

> わかりました。こちらへ<

ガチャ

目の前の扉を開ける。

ノックもせずに突然部屋の扉を開けてしまった事にはっとし、

『失礼する』

と、咄嗟に声を付け加える。

扉を開ききると、少々呆然とした顔をした二人の男が
こちらに視線を向けているのが見えた。

ヨキが扉を開く前に何故か扉は自然に開いた。
「失礼する」

と、透き通った声と共に入ってきたのは
これから様子を見に行こうとしていたアウラだった。

『よう、起きたのか』

向こうから来てくれたのは幸いだっただか。
とりあえず手を上げて挨拶をする。

「ホルス・・・」

と、アウラはそれに答えず、何か神妙な顔でこちらに顔を向ける。

『もう、体の方は平気なのか？』

人を操る系統の術は身体への負担が大きい。

場合によってはしばらく体が不自由になる場合もある。

最も、ある程度鍛えている者であれば、

大抵は数時間の眠りで問題なく元に戻る可能性が高いが。

「ああ」

静かに返事をしながらこちらへ近づいてきた。
ん・・・？

そのまま手が届くくらいの距離まで近づくと、
アウラはスツとこちらに頭を下げてきた。

『お、おい・・・』

いきなりの事で戸惑う。

「すまなかった」

続いて真剣な口調での謝罪。

こちらとしてはもう既に忘れかけていた出来事だったが、それは恐らく自分に短剣を突き立てた事に対するものなのだろう。実際にそれは彼女であって彼女ではなかったもので、仕方の無い事だ。

しかしそんな操られていた事実を言い訳ともせず、何よりも先ずその事に対しての謝罪を優先させる姿勢は、目の前の女性の誠実さを示している。

「では私は勤めがあります故、失礼させて頂きます。・・・ご武運を」

横からヨキがそう言いながら礼をし、そそくさと部屋を出て行った。彼なりに気を使ってくれたのだろう。

アウラは先ほどの姿勢のまま頭をずっと下げている。

その真摯な態度には微笑ましいものすら感じるが、いつまでもそのままにさせておくのは忍びない。

『とにかく・・・アウラ、頭を上げてくれるか？』

たしなめる様に言うが・・・
反応なし。

んにやろっ・・・

『おい・・・このままじゃ話もでき』

「手伝わせてくれないか」

こちらが言葉を言い終わる前に頭を上げた後、

こちらの目を見据え、有無を言わさぬといった口調でアウラがそう言った。

『・・・は？』

手伝う？

「ホルス、確かお前は目的があつてこの街に来たと言っていたな。

【争いを止める】、と。それを、私の持てる力の限りをもって手

伝わせてもらっ」

いきなりの事で思わず頬をぽりぽりと指でかく。

手伝わせてもらっ・・・って決定事項かよ

その強引さに苦笑してしまう。

とはいえ元よりそのつもりだ。

今回の事だけではなく、これからもずっと、アウラには同行して貰わなければならない。

『ああ、んじゃあよろしく頼む・・・』

が、その前にアウラには一つ言っておく事がある』

「・・・なんだ？」

と、少し首を傾げながらそう聞き返してくる。

言っておく事。

即ち 自分の正体。

とは言え先ほど首を刺された際、その傷の治りを見ていた筈。もしかしたら既に勘付いているかもしれないが・・・。

『ちと短剣を一本貸してくれるか？』

と、アウラに手を差し出しながら言う。

アウラは不思議そうな顔を一瞬するが、

腰にかかっている一本の短剣を鞘ごとその手に乗せてくれた。

短剣を鞘から取る。

ギリリと輝く刀身。刃こぼれ一つ無い。

それが相当な業物だと言う事は容易に想像できる。

その短剣を右手で持ち、鞘を持つ左手の甲に対し刃を立てて近づけ

た。

- - Side A u r a - -

『な・・・何を』

止める間も無くブスツと彼は刀身を自らの左手の甲に深めに埋めた。赤い血が滲み出る。

「ま、見てろ」

とホルスは刀身を離す。

すると　　滲み出ていた血がすぐに止まった。

『む・・・』

これは、あの時　私がホルスの首筋を刺した時と同じだ。

『それは・・・魔法なのか？』

とは言うものの印や光術の発動は見当たらなかった。

今更ながらに不可解だ。

ホルスはそう言う私に向かって露骨にため息を吐きながら、短剣を鞘にしまってこちらの手に返す。

「おいおい・・・まだ気付かないのか。」

これは魔法でもなんでもない。俺の【体質】だ。

その意味、お前ならわかるだろう？」

その言葉に一瞬我を失う。

え・・・・・・・・？

ホルスは【体質】と言った。

どんな傷も瞬時に直し、決して死ぬ事は無い。

私は、そんな【体質】を持つ人間を知っている。

それは 私自身。

『そんな・・・私と・・・同じ？』

辛うじて声を紡ぎだす。

「そうだ。俺はお前と同じ ってのはちと違うな。

アウラ、お前が俺と同じ、【ユグドラシルの種を体内に宿す者】
って奴だ」

ホルスは諭すようにそう言った。

ユグドラシルの種・・・？

『どういう事だ・・・？ お前はこの【体質】の根源を知っている
のか？』

・・・少なくとも私は知らない。

私はあの時、ただ必死に生きたいと願っただけ・・・。

「まあ、その事についてはおいおい説明するが、
とりあえず俺達をこういう体質にした【根源】はしっかり居るっ
てことだ

最も、今この世に”種”を埋め込んだ人間は3人だけだが」

『ホルス』

私がこういった運命を辿る事になったことに
何かしら外部の力があつた事はわかっていた。

だが別にそれが何か、などという事には余り興味はなかった。
それよりも・・・

「ん・・・、何だ？」

ただ一つだけ聞きたい事は・・・

『お前は、私と同じ時を生きる者・・・なのか?』
そう、ホルスの眼を見据えながら問う。

ホルスはその目を丸くするが、

すぐに何処か全てを理解したような表情で頷き、

「ああ、そうだ」

と答えた。

『そうか・・・』

それを聞いた途端、何か自分の中にある靄が晴れたような気分になった。

『私はずっと、独りだと思っていた。

私と同じ存在が居たという事は、正直嬉しく思う』

ホルスが肩をすくめる。

「俺もだよ。 嬉しい以上に驚いたがな」

それを聞き、一つ疑問が沸いた。

『そう言えば・・・お前はいつ、その事に気が付いた?』

「ん?・・・ああ、そりゃアウラの能力を教えてもらった時だが」と、さも当然のように言う。

む、と眉を寄せる。

『何故、その時点で言わなかった』

と聞くと、ホルスは少し困ったような顔になる。

「んー・・・いや、ちよつと釘を刺されててな。 お前と会っても自分の正体を明かすな、と」

そう言いながらホルスはぱりぱりと眉間をかく。

『・・・誰にだ?』

・・・聞かなくても大体の想像はつくが。
「まあ・・・俺とお前の、親つてとこだ」
やはりか

「・・・要は、私達にこの能力を与えた者か」
「ああ」

ホルスはそう返事をした後、少し考えるような仕草をした。

「どうした？」

と聞くと顔を再度こちらへ向ける。

「いや・・・。一度会うか？ そいつに」
と、複雑な表情でそう言つて来た。

私は首を横に振る。

「いや・・・必要無い」

嫌悪感というもののまでには至らないが・・・。
何故か進んで会いたいとは思わない。

ホルスはハハツと笑いながら

「だよな」

と頷き、同意の意を示す。

彼も同じような気持ちなのだろうか。

まあ、その事はもう良い。

「さて・・・これからどうするのだ。

私は何をすれば良い？」

彼の目的の達成を助ける事、

今はそれを一刻も早く行いたい。

と聞くとホルスは少し表情を締めた。

「ああ、じゃあちつとじつとしててくれ」

『・・・？ ああ』

ホルスは目を瞑り、こちらの肩に手を触れてきた。

- - Side Horus - -

『お前を捕らえた奴らの顔を見たか？』

アウラの肩に触れながら質問をする。

と、見覚えのある顔とそうでない顔が浮かぶと共に、

「・・・こないだオアシスで襲ってきた奴だぞ。」

この近辺の盗賊を仕切っている印術師シヴィラだ。

もしかして・・・気づいてなかったのか？」

アウラが怪訝そうに訪ねてきた。

あ。

『あー・・・あいつか・・・どおりで聞いた事のある声だと思っ
た・・・』

とようやく記憶を掘り出した自分に

アウラは少し呆れたようなため息を吐く。

「もう一人は奴の仲間らしい。一見戦士のような風貌をしているが
その実、奴は闇術を使う。拘束系の術に長けているようだな」

そうアウラが敵に対する特徴を言っている間、
彼女からの記憶も同時に探る。

大男を切りつけた後、受けた返り血から魔力が広がり、
拘束されていく姿が浮かび上がった。

『ブラッドバインドか・・・。それなりに発動も早いな』

と言いながら目を開く。

目の前のアウラは目を大きく開いている。

「どういうことだ・・・？」

確かに私は奴にその魔法で捕らえられたが・・・」

その反応に何となく満足し、少しにやけてしまう。

『アウラ。お前は不死という他にももう一つ能力があっただろう？』
助けるべき者を【視る】能力。

彼女にそういった能力があるのならば、
自ずとこちらにも同じか能力もじくは何か別の能力があると予想できるだろう。

案の定アウラは「あっ」、と声を漏らしながら何か気づいたような顔をし、

「そうか・・・。それがお前の能力なのか。

触った対象の記憶を探る・・・と言った所か？」

触れた肩に目を移しながらそう答える。

『ご名答』

肩から手を離す。

とにかく、どちらにしても奴らの顔はわかった。

ならばすべき事は一つ。

『さて・・・準備は良いか？』

そう聞くと、

アウラは少し首を横に傾け、

「構わないが・・・どこへ行くのだ？」

と、問いかけてきた。

『ん・・・？ 奴らのアジトだが』

「・・・奴らのアジトの場所を知っているのか？」

少し怪訝な顔で聞いてくる。

アウラの前では【転移】の印を使った事はない。確かに先ほどまで記憶にすらなかった連中のアジトを知っているとなれば不思議に思うのも無理はない。

『ああ、【転移】の印を使う。』

対象の顔さえ認識していれば一瞬でそいつの元へと飛べる』

アウラはそれを聞き、ほう・・・と感心した後、

「成る程・・・それであの時私の前に突然現れたのか」と納得したように呟く。

あの時というのは彼女が操られた時の事を示しているのだろう。

『そういうこった。　んじゃ、つかまってくれ』

というと、アウラは手を掴もうと言う所でそれを止め、首を傾げる。

「待て、何故奴らの所へ行く？」

確かに許しがたい奴等だが、まずはお前の目的を優先させるべきではないのか？」

ああ・・・そうか。奴等がやった事については知らないんだっけか。

俺の説明不足も多いが、意外と細かい事を気にする奴だな・・・。

一番奴等に怒りを覚えているのはこいつな筈なのにな。

と、そんな事を考えつつ事情を説明する事とした。

『んーと、だな。このダシユタが戦争を仕掛けようとしていたのはダシユタの防衛隊長　ああ、さっきここに居た奴な。』

そいつが何者かに精神支配を受けてたせいであって、

それ自体は支配を俺が解呪した時点でほぼ解決したんだが・・・』

そこまで言つと、アウラも事情を察したようだ。

「精神支配・・・成る程・・・。諸悪の根源は奴等なのか」

そう言いながらあっさり納得するアウラ。

諸悪の根源で・・・やっぱちょっと微妙に単純だなこいつって・・・

・
思わず笑みがこぼれそうになる。

『んじゃ、わかったならつかまってくれ』
と、再び手を差し出す。

「ああ」

差し出した左手をアウラが掴んだのを確認し、
右手で印術を描きだす。

大体、上空五十メートル・・・ってどこか
あの男の顔を思い浮かべ、
相応の魔力加減をしながら印術を完成させた。

『じゃあ・・・行くぞ?』

左に顔を向ける。

アウラが無言で頷くのを見届け、【転移】の印に右手を当てた。

<暗雲>（後書き）

ここまで読んで頂いて本当にありがとうございます・・・

&l t・契約&g t；

月虹

運命交叉

i n 6 2 8 3 m o n t h

c h a p t e r 3 > 契約<

- - S i d e S i v i l l a - -

アジトの自室。

薄暗いその部屋には多くの書棚が並んでいる。

その7割が魔術書、残りは世界各地の逸話を記したもの。
当然、いずれも盗品だ。

大抵は読み尽くし、既に無用の長物と化しているが、
捨てる事はしない。

書棚で出来た通路の奥、そこに一冊だけタイトルの無い黒い本が立
てかけてある。

所詮、周りの本はこれを隠す為のカモフラージュにすぎない。

「本当に・・・使うのか？」

横の男が低い声で問いかけてくる。

それに答えず、その本を手を取った。

おのれ・・・

顎がぎりぎりとう鳴るまで歯を噛み締める。

体の中に燦る炎はいつまでも消えてはくれない。
恐らく・・・あの男を殺すまで続くだろう。

今まで、こと魔法において自分は他者の下に立った事がない。
それはそもそも”印術師”というものの自体の
絶対数が至極少ないという事もある。

例え相手がどのような卓越した魔術師でも
それは違う土俵の相手。
そして戦えば相手は”印術”に対する認識が薄い場合が多く、
そこを巧く突く事で勝利を収めてきた。

一度だけ自分と同じ印術師と対峙した事があるが、
それも取るに足らない相手であつた。

心のどこかで自分は魔術師の中で最強、
などという驕りを持っていたのかもしれない。
それを・・・。

その自信をあの男が完膚無きまでに叩きのめした。
自分と同じ”印術”において圧倒的なまでの力の差を見せ付けてき
た。

あの男と自分。

何故同じ時代に生まれてきたのかと運命を呪う。

あの男がこの世に居る限り、自分は前に進む事は出来ない。

だから殺す。

例えばどのような手段を用いても・・・。
手に取った書物を睨む。

この本を手に入れたのは3年前にとある集落を略奪した時である。集落の奥に仰々しく祭っており、集落の民が何か必死になって護っていたので、その時は何か金になるものと思い、本を護っていた集落の民を一掃し、持ち帰った。が、その本の発する只ならぬ気配が気になり、書物を漁って色々調べた結果、それは想像もしていなかったものだった。

その名を「封龍の書」。

常軌を逸した力を持つ”霊獣”を封じた物らしい。そしてこの本に一定量の魔力を送り込む事で

”霊獣”の封印を解く事が出来るらしいが、今までに試した事は一度も無い。

未知のものは危険が高いからだ。

”霊獣”はある条件を満たせば従える事が出来るらしいが、

その肝心の条件は結局未だにわからない。

”霊獣”の方からその条件を提示されるらしいが、それも定かではない。

だが、もはや今はそのような事で躊躇をしている時ではない。

と、なにやら部屋の入り口の方から大きな音がした。

音がした方を睨む。

そこには扉のノブを持ち、なにやら血相を変えた部下が居た。

「あ、あの印術師が・・・そ、空から突然現れました！」

『く・・・』

舌打ちをする。

あの女の術が解けた以上、

ある程度この場所が知れる事は覚悟していたが、
思いの他早く来てしまった。

それにしても・・・

空からだと・・・？

そう言えば奴は先程も空から突然現れた。

もしや、【転移】の印でも使っているのだろうか。

失敗の際に様々な危険が付きまとうあの印は

自分にはとても出来ない。

それをあつさりと使用して見せるあたり、

改めて奴との力の差を覚える。

屈辱に唇を噛み締めながら考える。

とにかく・・・今は”霊獣”を呼び出す時間が欲しい。

『ゼクセル・・・』

隣の男に顔を向ける。

「・・・わーったよ。時間を稼げばいいんだな。

まあ、雑魚共も居る事だし10分程度なら稼いでやる」

こちらの意を察したのか早口でそう答えてきた。

『頼みます。私は集会場にて”霊獣”を呼び出しますので

そこに到達できないようにしてもらえれば結構』

大きな仕事を行う際に部下達を集める集会場。

そこがこのアジトにおいて最も広い場所だ。

”霊獣”の大きさが判らない以上、あそこで行うのが無難だろう。

「了解。・・・でかい援軍を期待してるぜ」

といいながらゼクセルは入り口ロビーに向かう通路へ駆け出した。

それを見送りつつ、自らも黒い本を抱え、

集会場奥への直通路に足を向けた。

視界が一瞬暗転した後、突如開けた場所に景色が移り変わる。

つて……

急激な下降感と共に下を見る。

かなりの高さから落下していた。

この高さからの着地はさすがに足への苦痛が伴っだろう。

……いや、寧ろ一度折れる。

『ホルス、これはどういう』

とホルスに問い詰めようとした所で落下が止まる。

足元に印が浮かび上がっていた。

「ん？　なんだ？　場所間違えたか？」

さも何も無かったかのように言う。

下を見ると確かに見覚えのある場所、

操られていた時に一度来た場所で、

恐らく奴のアジトと見ていいだろう。

『いや……恐らくここで問題はない。』

だが、何故このような高い場所に移動したのだ？」

「ん？　ああ……【転移】の印っつーのは移動先を

対象からの座標　……んーつまり、例えばアウラから後方上1

0メートル、

とかしか指定できないんだが……。

該当する場所に何があろうとそこに文字通り【転移】しちまうわけで・・・。

何か物があるとハマって動けなくなったりするわけだ。
つつー事でよっぽど対象の場所が特定できていない限り

何か物がある可能性が一番少ない上空に移動するのが妥当なわけだ」

と、ホルスはなにやら得意げに説明してきた。
それなら・・・。

『そういう事は先に言ってもらいたいものだな』
むすつとそう答える。

ホルスは一瞬目を大きく開けると、
あー・・・と呟いた後、

「ひよつとして・・・びびったのか？」
と悪戯っぽく笑いを含みながら問いかけてくる。

む・・・

『別に』

と、目をあわずに答えた。

正直、驚いた事は確かだ。

「ほーう・・・」

何やら口元を上げ、意味深な目でこちらを見てくる。

くっ・・・この男は・・・

何も言わずホルスを細い目で睨みつける。

ヒュンッ

そんなどうでも良いやり取りをしている最中、
一瞬横で何かが風を切る音がした。

『「ん？」』

ホルスと同時に疑問の声を発しながら下を見ると、
下にはシヴィラの一味と思われる者が数人、
こちらに向けて弓を構えていた。

忌々しげに舌を打つ。

『・・・ホルス、少し高度を下げてくれ』

短剣の鞘に手を当てる。

もう少し地面に近づけば、即座にこの浮遊している印から飛び降り、
奴らに切りかかる事が出来る。

だがホルス下を見たままは制止の手をこちらに差し出した。

「いや、いい。これで十分だろ」

と言いながらスツと目を細めた。

・・・印の念映という奴が

突如下に居る者達の前に光が現れ、
全員が吹っ飛ばされるのが見えた。

『反則だな・・・あれは』

苦笑しながら呟く。

「いや、まあ・・・そうでもない。

こうやって相手の姿が見えていないと使えないしな」

と言いながらホルスは一瞬下に目を向ける。

途端、足元の印の光が弱まり、高度が少しずつ下がっていった。

『成る程・・・それである時、奴らは霧を出して姿を隠したのか』

同じ印術師故、念映は使えずともその弱点は理解していたわけか。

「多分な・・・」

地面に降り立つ。

先程弓を構えていた奴らは、倒れたまま動かない。

恐らく気絶しているのだろうか。

「少し強めに発動させたからしばらく気を失っているだろう。

命には別状は無い筈だ」

こちらの視線の先を感じてか、ホルスがわざわざ説明をしてきた。

「・・・そうか」

無感情に返事をする。

私ならば盗賊などに容赦はしない。

そもそも”人”として見ていないからだ。

私がやっていたら恐らく奴らを皆殺しにしていただろう。

そういった面ではホルスは奴らの命を救った事になる。

「さて・・・入るとしますか」

といいながらホルスは奴らのアジトの入り口 地下へ続く洞窟のような穴へと歩を進める。

・・・ん？

入り口の奥で一瞬、何かが動くのが一瞬見えた。

「 待て」

前を歩く背中に制止の声をかける。

「・・・ああ、見張りがもう一人居たっばいな。

奥へ逃げたようだが・・・」

『どうする？ 奴等に私達が来たという事を知られたも同義だが』

自分達が来たと知れば、奴らはそれなりの対策をしてくるだろう。

無闇に突入するのは危険性が高い。

ホルスは歩を止めて一瞬考えるそぶりを見せる。

「んー・・・。かといってここで時間を与えれば余計状況は悪くなるぞ？」

こちらに顔だけを向け、そう答えてきた。

確かに、今の見張りがシヴィラ達に知らせてから時間が経てば経つほど、

何かしらの備えをさせる余裕を奴等に与える事となる。

『・・・そうか。それもそうだな。』

よし、行こう。奴の部屋まで案内をする」

タツと入り口へ向かって駆け出す。

「了解、 気をつけるよ」

と、後からホルスが続く。

『わかつている』

雑魚が何人居ようがさほど問題はないが、あちらには卓越した闇術師がいる。

特に自分の影の位置には注意を払わなければならない。

下り坂の薄暗い通路を突き進む。

途中、いくつか脇道があったが、

操られていた時の記憶によると奴の部屋へはこの先を真っ直ぐ突き進み、

広めのロビーに一度出なければならない筈。

あの場所に、ある程度の敵が待ち構えている可能性が高いか・・・

待ち構えて敵を迎え撃つには最適な場所であった記憶がある。

入ってくる者は何の障害物もない広い場所に出るしかなく、

待ち構えている方は柱やロビーにある階段から登れる

2階通路からも身を隠しながら侵入者を狙い打つ事も出来るだろう。

ある程度の人数に死角から一斉に弓を射掛けられれば、

避け切れない可能性もある。

『ホルス』

足を止め、後ろに居るホルスに声をかけた。

余計な傷は成るべく避けたい。

もし奴等も同じ場所に居た場合、それが決定的隙になる可能性が高いからだ。

ホルスが突然止まった私にぶつかりそうになるが、

「なんだ？」

同様に足を止め、こちらに耳を向ける。

この男ならばあらかじめ知らせておけば

何かしらの対策を成してくれるような気がする。

『もうすぐ開けた場所に出る。』

待ち伏せされるとしたらあそここの可能性が高いのだが……。

多方向から来る飛来物を防ぐ手段というのはあるか？』

「ん、ああ。矢とかか？」

そう聞いてくるホルスに首を縦に振って答える。

「そうだな……【結界】の印を強めに張れば何とかなるだろう。

最も、一定以上の強さの直接攻撃を防ぐ事はきびしいけどな」

そう言いながらも既にホルスは頭上に印を描き始めた。

あれは……前に砂嵐を防いだ印か

『頼む。直接の攻撃があれば私が何とかしよう』

「了解。　　はいよ」

と、頭上に描かれた印にホルスが手をかざすと、

印が光りだし、甲高い音と共に周囲に微かな光の膜のようなものが形成された。

「大体俺の周囲２メートルが範囲だな。

そこから出れば無防備だ。注意してくれ」

『わかった。　　では行こうか』

改めて気を引き締める。

「ああ」

通路の先、わずかに見える明かりに向かい、駆け出した。

- - Side Z e x e l - -

眼下の入り口を慎重に見据える。

奴らが外に現れたのであれば、

シヴィラの部屋に行くにしても、

今シヴィラが居るであろう集会場へ向かうにしても

必ずこのエントランスを通らなくてはならない。

そしてこのエントランスはこういった

外敵が侵入した際に備えて作られた場所らしく、

対象が必ず通らなければならない入り口から出る広間は

前後左右に二階層の通路があり、

身を隠しながら相手を狙い撃ちする事が出来る。

当然の事ながら今も召集できるだけのシヴィラの部下を2階通路に

待機させてある。

明かりは主に1階の広間を照らしており、

今自分とシヴィラの部下を配備している2階通路は、

下に居る者からは姿を確認し辛い筈。

まだ自分は目にしてないのだが、

あの印術師は姿を視認した者に対し、

いつでも瞬時に印術を用いる事が出来るという。

例え奴がこちらを視認する為に光術で照らしたとしても、

柱に身を隠す事ができる。

奴の対策には打ってつけの場所だが・・・。

不安は全く拭い切れない。

奴の力は計り知れないものがある。

加えて短剣使いのあの女・・・。

前回は上手く捉えたものの、縮地すら使いこなす達人だ。

こちらが既に闇術師と知られているからには

前回の様に簡単には倒せないだろう。

それに、例え闇術で捕らえたとして印術師の方に

解かれるのがオチだ。

”勝つ”事は不可能に近い。

ならばとにかく今はシヴィラが霊獣を呼び出すまでの時間を稼げばいい。

と、入り口の方から物音が聞こえてきた。

来たか・・・。

これだけ待ち伏せに適した場所、

少しは警戒をしてくると思ったが、

奴らは堂々と広場まで歩を進めてきた。

その瞬間シヴィラの部下に射掛けさせる事も考えたが、
寧ろそれは奴らを刺激するだけと思った。

深く息を吸い、心を落ち着ける。

先ずは・・・。

『よう』

姿は隠しつつ、奴らの所まで聞こえるくらいの声を放った。
途端、広場にいる二人は足を止め、周囲を見回す。

「その声・・・ゼクセルとやらか」

女のほうで短剣の柄に手を当てながら低い声で答えた。

『お前ら、何の用でこんなところまで来たんだ？』

目的は自分達の命な事は判りきっていた。

だがこういうくだらない問答でも時間を稼ぐ事は出来る。

「知れた事を・・・」

と、女が短剣を抜いた。

そしてその横で今まで無言だった男が口を開く。

「で？　　いつまで隠れてるつもりだ？」

そう、”こちら”を向いて言った。

それに反応し、

「・・・そこか」

と、女の方もこちらへ視線を向けてくる。

途端、背中を一筋の汗がつつたう。

この場所は音の反射でどこから喋っていたかなど特定は難しい筈。
だがあの視線・・・。

明らかに奴はこちらの位置を把握している。

「ホルス　奴は私に任せてくれないか」

こちらが次の行動を迷っているうちに、

下から静かな声が聞こえてきた。

何？

任せてくれという事は手を出すなという事だろうか。

「ん？　でもお前あいつに　いや、わかった。

んじゃ俺は雑魚の相手でもしてるかね。

・・・そっちの邪魔にならんようにな」

途端、待機させていたシヴィラの部下達から緊張感が走る。奴らはしっかりと他の連中の存在にも気づいていたらしい。「・・・すまない」

と、女はこちらに体を向け、姿勢を低くした。

【縮地】で突っ込んでくるつもりか。

好都合だ。あの女一人であれば時間を稼ぐ事は容易い。いや、それどころか返り討ちにしてやる。

女の向く方向から予想される到達地点は、目の前の柱。ダツと一飛びに柱から身を離し、

同時に影の針を地面から生みだし、対象へと突き刺す【シャドウニードル】を発動すべく魔力を地面へと送った。

次の瞬間、予想通り女が柱に横向きとなって現れた。そのままこちらへと飛ばうとしているが、そうはさせない。

『おらよ！』

地面に送った魔力を解放した。

直後、地面から数本の黒い針が女に向けて伸びる。

女はそれを見て、こちらにそのまま向かうのを諦め、こちらとは逆側に飛んだ。

柱に影の針が突き刺さり、先ほどまで女が居た場所を抉る。

その結果に、両者共忌々しげに舌を打つ。

仕方ねえな・・・。

まずは奥の通路に誘導するとうしよう。

狭い場所であればあるほどこちらの魔法は捕らえ易く仕留め易い。背後のシヴィラの部屋へと続く通路へと駆け出した。

- - Side Horus - -

アウラと闇術師の男が奥へ消えていくのを見て
軽く息を吐く。

大丈夫かね・・・

行かせてしまったものの少々不安だ。

何せ相手はアウラを一度捕らえた相手。

だが逆に考えればアウラにとっては清算したい相手だ。
自分が倒す事は恐らく容易いが、

それではアウラの心にしこりを残す事となるだろう。

ま、こつちをなるべく手早く済ませようか。

手は出さないにしても個々に動くのはなるべく避けたかった。

『おいお前ら！』

片手を腰に手をあて、この広間にいる全員へと
聞こえるように大きな声で話し掛ける。

『俺は別にお前らを捕らえに来たわけでも、

殺しに来たわけでもない。

用があるのはさっきの男とお前達のリーダーだけだ。
黙ってここを去るならば別に見逃してやっても
』

キンッ

と甲高い音が聞こえた。

先ほど仕掛けた【結界】に矢が当たったようだ。

ぽりぽりと頭をかき、深く息を吐いた。

『何であんな奴をそこまで守ろうとするかね・・・』

気が重いが・・・まずはもう少し脅してやるしかないか。

バツと上に片手を上げ、その手に魔力を集中させつつ、

足元に【浮遊】の印を念映する。

『お前らとあの男を繋ぐ物は何なんだ？』

浮遊の印により、体が周囲の2階通路と同じ高さまで浮かぶ。

その間、前後左右から何本もの矢が飛来し、

甲高い音を奏でながら結界への攻撃を繰り返していた。

『忠誠か？』

右手の魔力を解放し、光術【フラッシュ】の応用魔法、

発した魔力が持続する限り光を発し続ける【フラッシュライト】を
頭上に仕掛ける。

『物欲か？』

仕掛けた頭上の光により、2階通路のほとんどが光に照らされる。

結果、柱で身を隠しきれない者の姿がこちらから視認できた。

『それとも・・・』

目を細め、視認した者に片っ端から
やや弱めの【衝撃】の印を念映する。

『恐怖か？』

パアンツ！と弾ける音と共に、

【衝撃】を念映した者の体が吹き飛ぶ。

弱めに仕掛けた為、気絶はしない筈。

ただそれなりの痛みはあるだろう。

対象の者は地面にうずくまり、

念映を仕掛けられた部分を押さえながら喘いでいる。

『・・・今のは弱めに撃った。

その10倍程度まで強くする事も可能だぞ？

ま、その際は仕掛けられた場所が吹っ飛ぶだろうな』

周囲を見回しながらプレッシャーを掛ける。

「ひ・・・ひい」

横から声がしたのでそちらに顔を向ける。

今さっきまで死角に入っていたようで

先ほどの念映対象者では無い。

今のは見て腰を抜かしたのか、

地面に尻をつけながらじりじりと後ろに下がっていた。

その姿を見て溜め息を吐き、

『さて・・・』

視線を前方に戻して再び全員に問いかける。

『もし、奴とを繋ぐものが忠誠でないのならば

今すぐこの場を去れ』

先ほど【衝撃】を念映をしたのは半数程度だろうが

残りの者からの矢はもう飛んでこない。

『お前らのリーダーは少しやりすぎた。

だから 俺が確実に殺す』

発する声を少し低くする。

『だから奴について行き、甘い汁を吸う事ももう出来ないし、

奴の力に恐怖し、付き従う必要もなくなる』
浮遊の印を調整して前方の通路に体を進めた。

『もし、奴に絶対の忠誠を誓っていると言うのなら
仕方が無い。奴と 心中してもらおう事になる』
浮遊の印を消し、2階の通路に降り立った。

『その事を踏まえて 』
そう勤めて穏やかに言いつつ背後を向き直る。
『もう一度、考え直してはくれないか?』

- - Side Aura - -

床や左右の壁を蹴りつつ、迫り来る黒い針の嵐を避け続ける。
奴が放つ影の針は、決して速度は速くなく、
動きも単調な為、至極避けやすくはある。

だが今問題なのは奴に近づく事ができない事。
先ほどの場所とは違い、この通路は余り避ける場所に余裕がない。
奴の攻撃を避けるだけならば何とかなるが、
奴との距離を一定以上縮めようとすると、
相手は的確にそれを阻止するように攻撃をしてくる。

『くっ・・・!』
もどかしさにぎりりと歯を噛み、
地面を蹴って一端奴との距離を取った。

前方に居る男も何やら口元を歪めながらも攻撃を止め、

地面に両手を構え影の針をいつでも出せるような状態で構えている。しばしお互いに動かず睨み合う。

このままではろちが明かない。
姿勢を低くし、【縮地】の体勢を取る。

それを見た前方の男はまるで待っていたとばかりにさらに唇を吊り上げる。

笑っている・・・？

それを見て引つかかっていた物が確信に変わる。

奴はどうも【縮地】の”前方直線にしか移動できない”
という特性を見抜いているように思える。

先の戦いの時、奴に致命傷を負わず事が出来なかった事、
それに加え、先ほど奴はこちらの到達地点にすぐに攻撃を加えてきた。

恐らくこちらの構えを見て、到達地点を予測されているのだろう。
そうなる就先ほどのまでの攻撃は、こちらが痺れを切らして【縮地】
を使うのを
誘っていたようにも思えてくる。

こちらの通過地点、到達地点を読まれてしまうのであれば、
この狭い通路で【縮地】使えば、奴の魔法の直撃を受けてしまう可能性が高い。

但し・・・

普通に使えば、な

こちらとて前回の戦いで全て手の内を見せたわけではない。
狙う”地面”を鋭く見据える。

今こちらが体を向けている角度は奴のやや右。

返り血を浴びる事無く仕留めるには【縮地】で奴の後ろへ移動し、その途中、左の短剣で奴の首筋を断つ事。
それが”奴”の予想しているこちらの思惑だろう。

すうと息を吸い、それを肺の中に留めながら目を閉じる。

『【陽炎】』

静かにそれを呟きながら閉じた目を開いた直後、
強く、地面を蹴った。

- - Side S i v i l l a - -

『・・・よし』

自らが送った魔力に満たされた【封龍の書】を地面に置く。

霊獣を従えるには3つの段階がある。

一つ目は霊獣を封じた物 いわゆる”魔陣器”と呼ばれる物に
一定量の魔力送り込む事。

これはどのような霊獣であろうとも共通の作業である。

この時点でその魔力が霊獣へと流れ込み、

霊獣は自らの力で”魔陣器”から出る力を得る。

二つ目は”力の言葉”を発する事。

云わばその霊獣に対して呼びかけを行うもので、
形だけの儀式のようなものだ。

これにより、霊獣は現世に姿を現す。

そして三つ目は”契約”を行う事。

これに関しては何をして良いのかが一切わからない。

どのような書物にも記されていないのだ。

今まで封龍の書を持ちながら靈獣を召喚してみなかったのもこの部分に一抹の不安を抱えていたからだ。

只一つ分かる事は契約条件は靈獣が提示する、という事。この事自体も今一つよくわからない。

提示するというのは靈獣が喋るとでも言うのだろうか。

未知の危険は侵さないのが信条であったが、そのような事を言っている場合ではなくなった。とにかく・・・今は力が欲しい。

置いた本から距離を取り、封印に向き直る。両手を広げ、封じられた龍への言葉 力の言葉を発した。

>>我 汝を縛りし古の楔を解き放たん
汝 永久たる常闇より出で、万物を平伏せしめる其の力、我が前に示せ！<<

その自らの声が周囲の壁から反響した瞬間、床に置いた【封龍の書】が、怪しく赤い光を放ち始めた。

- - Side Horus - -

『んー・・・』

現状を見てどうしたものかと頭をぼりぼりとかく。

道化を演じてまで脅した効果はしっかりと現れ、大半の者が色めき立って階段を駆け下り、出口へと群がっていった。

元々狙いは奴ら二人。

今回に関してはここに居る人間からしてみれば
自らが”争い”を持ち込んでしまったようなものだ。

それは更なる災いの種を摘み取る為に止むを得ない事とはいえ
ここで戦う事は正直自分自身の信条に反する。

だが・・・

えーと・・・3人か・・・

正直言つて、残った時の事を考えていなかった。

あれだけ脅してもここに残るだけの者が、

盗賊に身を堕とした者達の中に居るとは思っていなかった

『で・・・残っているお前らは・・・』

あいつに絶対の忠誠つてやつを誓ってるってわけ？』

そう残る3人に聞こえるよう、溜め息混じりに問う。

返事は無い。

それぞれが何やら悲壮とも思える眼差しでこちらを見ていた。

こちらに弓は効かないともはや判っているのかそれぞれ剣を構えている。

そして・・・皆何故か身を隠そうとはせず、じりじりとこちらに近づいている。

それは戦おうとしているのではなく、まるで

「・・・してくれ」

そのうちの一人が小さな、呟くような声でそう聞こえた。

『ん・・・？ 何だった？』

「殺してくれ！」

聞き返した後、すぐに大きな声で返答が来た。

な・・・

突然の意外な言葉に、大きく目を剥く。

『は・・・？ お前ら全員・・・か？』

近くまで歩いて来た3人の顔を見回す。

三人全員、小さく頷いていた。

何れの眼も、死を覚悟した者の眼だ。

何が彼らをそこまでにさせるのかはわからない。

大方盗賊以外に自分の身を置く場所が無い、

とか今更ながら罪の意識に苛まれた、

とかそういった所なのだろうか。

『事情はよくわからんが 嫌だと言ったら？』

最初に殺してくれと言って来た者の目を見てそう言った。

如何な者であろうと無抵抗の人間を殺す事はしたくは無い。

三人ともそれを聞いて少し押し黙った後、

意を決したように持っていた剣を自らに向け始めた。

それを見て、言い知れない不快感が芽生える。

限りある生、それを吐き捨てたいというのならば

・・・好きにすればいい。

『 良いだろう』

静かにそう言いながら3人を睨み付ける。

3人は手を止め、再びこちらに目を向けた。

この3人が死ぬべき人間かどうかは・・・

ふと 奥の通路に目を移す。

そう、自分では本当に正しい判断が出来ない。

少なくとも自分は、自らの命を粗末にする者には
嫌悪感を覚える。

自ら命を断つ、というのであればせめてもの情け、
苦しまぬよう殺してやるだけだ。

『じゃあな・・・』

と、静かに言いながら

3人の前方の空間に魔力を送り始めた。

- - Side Zexel - -

気が付けば、薄暗い通路の天井を見上げていた。
右首から流れ出る生暖かい液体を枕にしながら。

何が・・・起きた・・・？

何故俺はこんなところで寝ているのか。

呆然と、薄れ行く意識の中で考える。

未だに現在の自分の状態を理解できないでいる。

数秒前、俺は確かにあの女の通過地点を予測し、
そこにシャドウニードルを放ち、奴の体を貫いた。
そう、確かに貫いた筈が・・・。

それが・・・何であんなとこにいやがるんだ・・・？

それも、ほとんど無傷で。

視線を上　つまりは背後に向ける。

見ると、あの女に然したる傷はない。
確かに体の中央を魔法で貫いた筈が、
何故か右脇腹と、右腕に僅かにかすり傷がある程度だ。

それに女の居る位置も不自然だ。

奴は確かに”縮地”をこちらの左側に向けていた。

それは絶対に見間違えようはない。

そして、”縮地”中に方向を転換するなど、絶対に不可能な筈。

『何を・・・げほつ・・・しゃがつた・・・』

喉から血と声をしぼり出す。

徐々に視界が狭くなっていく中、

後ろに居る女が立ち上がる気配がした。

「・・・【陽炎】という。”縮地”を二回連続で行う事で、

1回目の縮地到達地点に残像を作り出す。

お前が魔法で貫いたように見たのはそれだろう」

抑揚の無い声で女が答えた。

見ると、先ほど女を貫いた筈の場所に未だ薄い残像が揺らめいている。

『んな・・・馬鹿な・・・』

女はどうみても20歳かそこら。

その歳で、縮地を使いこなすだけではなく、

そんな、こちらの知識にすら無い技まで使えるというのか・・・。

「一度の勝利に慢心を招いたのがお前の敗因だな・・・。

盗賊などに加担する者には似合いの末路だ」

キン、と短剣を鞘にしまう音が響く。

『ハッ　ちげえねえ・・・。』

あの魔術師がヤバすぎて・・・お前さんの方を侮っていたな。
・・・結局、どっちも・・・化けもんだったって事・・・か』
とうとう徐々に視界が暗くなる。

似合いの末路、か。

その言葉が重く感じる。

自らのしてきた事を省みると、
確かに・・・その通りかもしれない。

だが、霊獣だの得体の知れねえ魔術師なんざに殺されるより・・・
綺麗な姉ちゃんに殺されただけマシ、だったな。
と、そんな事を思いながら自嘲を籠めた笑みをこぼす。

そして

ぷつん、と・・・無が訪れた。

- - Side Aura - -

既に事切れた男を一瞥する。

笑っている・・・？

足元で血の海に沈んでいるこの男は、
何故かこの結末に満足とでも言いたげな顔だ。

それを見て、軽く不愉快に思いながら鼻を鳴らし、踵を返した。
先に行きたいのは山々だが、ホルスの様子も気になる。

あの男に限って雑魚相手に万が一などという事も無いだろうが、

このまま単独でシヴィラの元へ行くのも義理に欠ける気がした。

『つつ！』

歩き出した瞬間、右足に鋭い痛みが走った。

やはり、まだ痛むか・・・

縮地を二連発する【陽炎】は言わば外法技である。

何故なら、通常の者が用いれば二度と歩けなくなるほどの足への負担をもたらすからだ。

しかし自分の場合はどんな傷もすぐに治るという体質を持っている。確かに二度目の縮地に用いた右足は一度著しく壊れたが、今はほぼ直っている。

とはいえ、未だに痛みだけは残っているようだ。僅かに顔をしかめ、右足を引きずり気味に歩きながら、元来た道へと足を進める。

が、途端

視界が突如急転する。

む・・・こんな時に・・・

自らの【助けるべき者を視る能力】が発動したようだ。ホルスを手伝うのは自らの意思。

そして、助けるべき者を助けるのは自らの生きる目的。

天秤に掛ければ後者に傾く。

経験上さほど遠い場所に居る者を視た事はない為、

助けに行った後すぐに戻れるかもしれないが・・・。

災いの根源たるシヴィラを残したまま行く事は正直心残りだ。

しかし、それは杞憂に終わる事となった。

眼に映った光景はまさしく今向かう先、

ホルスの居るロビーであった。

ん・・・まさかホルスに何か・・・？

だがその考えは一瞬にして消え、驚愕に姿を変える事となる。

『なっ・・・！』

今視界に映っているその姿に、思わず声を上げた。

助けるべき対象として映ったのは

そのホルスと対峙している3人の男達。

そしてその者達は勿論、自らが忌み嫌う盗賊だった。

- - Side S i v i l l a - -

身に刻まれるのは歓喜と恐怖。

目の前に現れたそれは余りに非現実的なモノだった。

”封龍の書”の【龍】という文字は単に、

封じられるものの力の象徴を示しているのだと思っていた。

だがそれは大きな間違いだったのだ。

この眼に映るモノ

それは間違いなく【龍】であった。

神話や伝承、おとぎ話でのみ姿が描かれる力の象徴。

まさか自らの眼でそれを見るとき、

そして、自らがそれを”従えられる”とも思っていなかった。

『ふ・・・ふふ・・・』

なんと愉快な事か。

目の前の龍に向かい、両手を広げる。

『我が声に答えし靈獣よ！ 汝の名を問おう！』

その声に反応したのか、

龍はこの集会場を埋め尽くさんばかりの巨体をこちらに向け、その真紅の眼を開いた

>> 永い・・・眠りだつた<<

その”声”は直接頭に響いてきた。

どこまでも低く、そしてどこまでも鮮明だった。

>> 予の眠りを呼び覚ましたのは、お前か？<<

龍はこちらの質問には答えず、逆にそう問いただしてきた。

『如何にも。今一度問う。汝の名は？』

靈獣との契約には先ずその名前を知る事が条件である。

そして靈獣が提示する条件を満たせば、

契約し、使役する事が出来るらしいが・・・。

条件というのであればなにかを靈獣に差し出すというのが一番予想できる答えだ。

あの龍を使役出来るのであれば、

例え寿命を差し出せと言われようが、
体の一部を差し出せと言われようが、

その条件を飲むつもりでいた。

いや、この龍があつた男を飲み込む姿を見る事が出来るのなら・・・。
命を差し出せと言われようとも従うかもしれない。

自分は既に眼前の龍に魅入られていた。

>> 名を問う・・・と言う事は予との契約を望むかく
龍はそうこちらに問いかけながら少しその大きな眼を細める

『その通りだ！ 汝が望む契約条件を提示するがいい！』
早く・・・

さあ早く・・・

と、心の中で繰り返しながら、龍に問う。

だが、龍の答えは予想外のものだった。

>> では・・・お前の”力”を示すが良いく
と、静かな声が頭に響く。

何・・・？

一瞬、奴が何を言っているのが理解できなくなり、体が硬直する。

次の瞬間、龍は大きく口を開け、
こちらに紅い炎を放ってきた。

体内から炎を発するというその行為、
まさしく神話や伝承の中の龍と同じであった。

だがそんな事に感心している場合ではない。

大きな炎の奔流がこちらに襲い掛かる。

咄嗟に両手に魔力を集め、前方に水の壁を張った。
幸いな事に自分は元来【水術】の使い手でもある。
攻撃が炎であれば突然の攻撃であらうと防げる。

しかし、襲い来る炎は余りに強い。

前方に張った水の壁は、少しずつその炎が蒸気を上げながら削って

いく。

それを精一杯の魔力放出し、食い止める。

『な、何を・・・！』

>> 予は弱き者には従わない。

予を従えたくば・・・最低限、予に満足をさせる戦いをさせる事だなく<

龍は炎を吐き続けながらもこちらの脳に直接声を掛ける。

『そんな・・・馬鹿な・・・』

苦しげに奥歯を噛みながらも龍の吐く炎に耐える。

だが、突如

自分の体が浮くを感じた。

そして、しばし視界が暗転した。

『ぐ・・・ア・・・』

息が出来ない。

一体何が起こったのか。

薄く眼を開けると、自分は天井に顔を向けていた。

だが自分と龍の位置関係、

そして、腹部の方から感じる熱を見たとき、事態を把握した。

奴はこちらが炎を防ぐのに必死になっている間、

あの大きな前足で、直接自分を吹き飛ばしたのだ

そう、まるで子供が石を蹴り飛ばすかの如く・・・。

『ふ・・・はは・・・は』

笑いがこみ上げる。

そうだった。そうだったな・・・

自分は何故この龍を使役できるなどと思ったのか。
考えてみれば当たり前前の事だ。

弱き者は強き者に従い、

そして強き者は弱き者を虐げる。

自ら実践してきた事ではないか。

『・・・フ・・・ハハ・・・』

何故気づかなかったのか。

自分がこの龍の力に魅入られた時点で、

こうなる事など判りきっていた筈なのに・・・。

『ハハ・・・はハ・・・あはハははハははは！！』

自らの余りの滑稽さに笑いが止まらなくなる。

>> 狂ったか・・・。では 安らぎを与えてやろうくく

脳に声が響くがもはやアイツが何を言っているのか良くわからない。

その事実すら滑稽に思え、余計に笑いを誘った。

そして 灼熱が覆いかぶさる。

『ハはヒヤハ・・・！ ア、熱い・・・熱いじゃないかハハはアハ
ハハ・・・は・・・』

死を感じながらも笑いは止まらず、

そのまま ゆっくりと意識が消えていった。

「待て！」

ロビー一帯に響く声。

その声を聞いた時、心底安堵した。

咄嗟に目の前にいる3人の眼前に仕掛けた印を解除する。

『よ。アウラ。お疲れさん』

声のした方に顔を向け、片手を上げた。

アウラは腰に手を当て、露骨に呆れた様なそぶりを見せた後、
タツと一飛びにこちらの前方、つまりはこちらを3人から遮るよう
な場所に立った。

「で・・・ホルス。この者達は何者だ？」

？ 質問の意図が良くわからない。

『ん？ 盗賊だろ？』

と、答える。

しばしの沈黙。

「・・・そうなのか。やはり」

と。アウラは目を瞑り、悩むような仕草を見せた。

アウラの背後に居る3人の盗賊達は、

先ほど印が間近に現れて以来、腰を抜かしているのか地面にへたっ
ているが、

今の状況が良く掴めない様で、ぼーっとこちらを見ている。

いや、正直俺も良くわからん

『えーと・・・アウラ。お前はこいつ等を【視た】んだろっ？』

先ほどアウラの声を聞いて安堵したのは
アウラが無事に戻ってきた以上に、
自分がこいつ等を殺すのを止めてくれた事にあつたのだが。

「む・・・まあ・・・確かにそうなのだが・・・」
と、アウラは3人の方へ振り返る。

「お前達、本当は盗賊ではないのだろう？
例えば・・・そうだな・・・秘密裏にアジトにもぐりこんだ
ダシユタの兵士とかではないのか？」
と、真剣な顔で聞いていた。

3人は言われた事が良くわからず、目をぱちぱちさせている。
「んー・・・多分・・・それは違うと思うぞ、アウラ」
そう言つと、アウラは睨むようにこちらに向き直り、
「・・・そうでも無ければ、私が【視る】筈が無いだろう。
盗賊共を救えなどと・・・何かの間違いにしか思えない」
と、吐き捨てるように言う。

前々から感じていた事だが、アウラはどうも盗賊を毛嫌いする傾向
にある。

盗賊を嫌うなどというのは至極当然のことだが、
それでもアウラの嫌い方は何か軽蔑と共に殺意すら付随している。

とりあえず・・・事情を説明するか
『こいつ等はな・・・【自分達を殺してくれ】とか言ってるんだよ』
その言葉に、ぴくりとアウラは反応する。

「なんだと？」
『大方盗賊としてしてきた事の罪悪感に今更かられたって所だろう
が・・・』
と、そこまで言つと3人は俯いた。

その仕草は、今言った事が凶星だった事を示しているのだろう。

『どうもこう・・・それにイラッと来てな。』

ついご期待に沿おうとしちまったんだが・・・』

と、溜め息を吐いた後、

『殺さなくてもいい奴を殺してしまう所だったな・・・。』

アウラ、お前が着てくれて助かった。　　礼を言う』

アウラに眼を向け微笑みかける。

アウラは一瞬目を見開いた後、

「あ、ああ。　私は、ただ自分の役目に従っただけなのだが・・・
役に立てたのなら・・・それは良かった」

戸惑ったようにそう答えた。

それに頷いた後、再び後ろの3人に目を向ける。

『さて、ちとお前らに質問なんだが・・・』

3人はその声に反応して俯いていた顔を上げた。

『何をそんなに悔いている？』

いや・・・それ以前にそんなに悔いるくらいの神経を持ち合わせているのなら

なんで盗賊団なんつーもんに入ったんだ』

そう問うと、再び3人は俯き、しばし無言になる。

「　　故郷の村が、標的にされたんだ」

3人のうち一人がそう呟いた。

喋った男に目を向けるが、黙って続きを促す。

「シヴィラが率いる盗賊達は、俺達の村で容赦なく略奪を繰り返していたんだ。

・・・略奪は約1ヶ月間毎日続き、村はもう差し出す物すら無くなっていた」

俯きながら淡々と男は話す。

『 お前ら3人共、その村出身なのか？』

そう聞くと、別の男が頷く。

『成る程な……。 で？』

「……何も無くなった村に、奴が次に要求してきたものは……人だった。

思えば奴は最初からそれが目的だったのかもしれない。

そうして結局、40人もの男達が村の平穏と引き換えに盗賊団に身を寄せた」

「40人……。か。それだけ居たのなら、何故戦おうとしなかったのだ？」

横からアウラが質問すると、男は首を縦に振った。

「一度だけ戦おうとはしたさ。だが……。あの男の術は強大すぎる。

先頭立って戦った者は皆、奴に殺されていったんだ。

結局そのまま、奴に逆らう事はできず、

あの村の出身の者は尽く危険な仕事をやらされ……

今では、俺達3人だけになってしまった」

男は淡々と喋った後、悔しげに涙を零した。

そこまで聞き、小さく舌を打つ。

アウラは、表情を変えてはいないが、
今ので3人への敵意を薄めた様子だ。

『……。まあ……。同情するしム力つきもする。

お前らが何をやらされてたかなんていうのも分からんが……
それなら、これから奴が死んで自由になれるかもしれないっつー
のに

死のうだなんて言う考えがおかしいな』

そう言うと、別の男が口を挟む。

「俺達も……。罪が無い人を殺してしまったんだ。

事情はどうあれ、今更もう村に戻る事など出来ない。

他に行く所など無いし・・・

だからせめて・・・死んで償おうと

『んなもんで』

「死は、贖罪になどならない」

>んなもんで罪なんか償えると思ってるのか？<

と言おうとした所をアウラの静かで、そして強い声に遮られる。

「罪を悔いて安易に死ぬというのは所詮逃げ道に過ぎない。

今までの行為を悔いるのであれば死のうとするのではなく、

これからは罪を償う為に生きれば良いだろう」

アウラのその言葉に3人は考えるように黙り込んでしまう。

どうもアウラにおいしい所を持つていかれたような心境であったが、自分と言いたい事が大体一致していたので何も言う事はない。

後は3人がどういう答えを出すかだが・・・。

盗賊として生きていた者が全うな暮らしを始めようとするのは容易い事ではない。

まして罪を償う為に生きる、要は人の為になる事を行いをしていくとなると、

生きる為に精一杯な者が多いこの砂海では尚更その道は困難なものとなる。

と、ふと【人の為になる生き方】という点で心当たりを思いついた。

『お前ら・・・衛兵として働いてみるってのはどうだ？』

と、俯いていた3人に提案をした。

3人はそれを聞き、顔を上げるが、すぐに表情を曇らせる。

「元盗賊なんていう素性の人間を、雇ってくれる所なんてあるわけ

が
」

『や、それについてはちとツテがある。後は、お前らのやる気次第だぞ?』

この言葉、実は半分嘘である。

ツテ、とはダシユタの防衛総長ヨキの事。

彼には貸しがあるが、かと言ってそれに見返りを求めた覚えも無い。この男達を向かわせた所で雇ってくれるとは限らないだろう。

だが、衛兵として働くという道を提案した時、

確かにあの3人から目の光を感じた。

彼ら自身が強い意志をもって願う事、それとちよつとした”後押し”があれば

ヨキも面倒を見てくれるのではないか。

自らの唯一の手荷物である腰掛袋から、

その”後押し”を3枚取り出す。

煌びやかな光を放つこの金貨は、

とある国の王族、貴族しか持つ事は出来ない。

ヨキがこれを見れば、こちらの差し金という事は分かる筈。

『いいか? これを持ってダシユタの防衛総長のヨキって奴に掛け合え。』

それだけでお前達の素性をどうこう言うてくることは無いだろう。3人は顔を見合わせた後、ゆっくりと差し出した金貨に手を伸ばした。

『ただし、雇ってくれるかどうかは・・・お前達のやる気次第』
と、人差し指を立てて説明をしていた所、

突如 ドクンと大きく自らの心臓が反応し、嫌な感覚に苛まれる。

この、感覚は・・・

奥に通じる通路、先ほどアウラが向かった通路とは
逆方向に伸びている通路を凝視する。
禍々しく巨大な力の渦。それがあの通路から漏れ出ている。

「? どうしたホルス」

アウラと前に居る3人がこちらを覗きこんでくる。

この感覚を過去、2回体験している。

間違いなく

『霊獣を呼びやがったな・・・』

背中を冷たい汗が伝う。

「れい・・・じゅう?」

アウラが首を傾げる。

知らないのも無理はない。

魔術を志し、極めし者、もしくは闇の世界に生きる者しか
奴らの存在自体を知らない。

シヴィラとかいう男・・・あの程度の男が、
霊獣を呼ぶなどという事は想像もしていなかった。

あの男を二度も見逃した自らの迂闊さに憤慨し、歯を強く噛んだ。

- - Side Aura - -

「レイジュウを呼びやがったな・・・」

突如様子が変わったホルスが、搾り出すように発した言葉。

『れい・・・じゅう?』

聞きなれない単語だ。

しかし、ホルスと出会ってから今までの間、ここまで動揺しているのを見たのは初めてである。それが並々ならぬモノではないという事は確かだろう。

ホルスは呆然としている3人に目を向け、

「お前らは早くダシユタへ行け。

ここにいれば・・・巻き込まれるぞ」

と、真剣な口調で言った。

巻き込まれる・・・？

そんなに大きな戦いにもなるというのだろうか。

「あんた達は・・・？」

戸惑いながらそう聞いてきた。

「シヴィラの事もあるし・・・ちと残らなければ行けない事情ができた。

お前らは正直ここに居ても足手まといだ。

ほら、さっさと行った行った」

と、ホルスは手を振り払った。

3人は一瞬躊躇するが、すぐに表情を引き締め、お互いに頷きあった。

「この恩は、忘れません」

と言いながら、3人揃ってホルスと自分に礼をしてきた。

『早く行け』

何となくむず痒くなり、そっけなく対応する。

走り去っていく3人の背中を見ながら正直複雑な気持ちになった。礼をされる事をした覚えも無いし、盗賊業をしてきたあの男達をまだ許しきったわけでもない。

だが、今まで忌み嫌っていた盗賊の中にも、あのよう
境遇がそうさせてしまった者達も居るという事は、
良く覚えておこう、と思った。

「アウラ」

後ろからの声に、振り返る。

「靈獣つーのは・・・まあ俺も詳しくは分からないだが、
とんでもない力を持った知性を持つ魔獣だ」

『ほう・・・』

そんなものの存在は信じがたい話ではあるが、
この男が言うのであればそれは本当なのだろう。

「大昔に封じられたらしいんだが・・・。

どっかの馬鹿がそのうちの一匹復活させたらしいな。

・・・恐らく今からそいつと戦闘になるだろう」

と、そこまで言った後、ホルスはこちらの眼を見据えた。

「それでも、力を貸してくれるか？」

その真剣な眼に、一瞬だけ目を見開く。

何を今更・・・

すぐに表情を戻し、

『私は、お前の力になる為にここに来た』

はつきりとそれだけ答えた。

例えどのような敵が居ようとこの意志に変化はない。

ホルスはため息混じりにふつと微笑んだ。

「そうかい」

と、言った後再び表情を引き締める。

「んじゃ 行くでしょうか！」

タツと先ほどゼクセルと対峙した通路とは逆方向の通路へ

ホルスが駆け出したのを確認すると、
こちらでも黙ってそれに追従する。

先に何が待っていようと、

この男とならば、打倒出来そうな気がしていた。

- - S i d e ? ? ? ? ? - -

くだらぬ・・・

炭くずとなったモノを見据える。

呼び出された時から、この男の望みなどわかっていた。

それは、自らの歪んだ自尊心を埋める為。

そんな望みになど答える筈もない。

全くもって下らぬ事で現世に呼び出されてしまった。

すぐに眠りにつく事も出来るが・・・。

それでは余りに無意味が過ぎるではないか。

ならば。

どれ・・・以前に呼び出されてより幾千年。

果たして現世がどのように変わったのか・・・

見て回るとしようか。

天井に首を向ける。

だが空は見えない。

これでは飛び立つ事ができない。

大儀な・・・

体内に魔力を集中させる。

天井が空への道を邪魔するのであれば、
その道を作ってしまうえば良い。

ん？

だが天井に貯めた力を放出する前に、
何か懐かしいものが近づいて来るのを感じ、その方向に顔を向ける。

この感じは 主殿・・・か？

それは自らの主の波動である。

主が自らを迎えに来たのであればそれは何よりも僥倖な事。
この度の目覚めは無駄ではなかったと言えよう。
存分に主の為に力を発揮するだけだ。

だがしかしそんな考えは次の瞬間打ち碎かれる事となる。
これ程の落胆が他にあるうか。

目の前に現れたのは主では無く・・・
二人のちっぽけな存在であった。

- - Side Horus - -

オイオイ・・・

それはまるで冗談のような光景だった。

人が1000人は軽く集まれそうな空間。

元々は洞窟最深部の大きな空洞だったのだろうか。

そんなスペースを、たった一体の生物が半分近くを占拠している。

だがその巨体以上に驚くべき事は、

目の前に居るモノは魔法書や神話等の書物において

頻繁に偶像が用いられているモノ、

総称して”龍”と呼ばれるモノだった。

以前見た霊獣は、ただ一つ目だけの巨人であつた。

その巨体と力、何より再生力には驚かされたが、

この度はまずその神がかつた姿、そして存在感、
何より

>>お前達は何者か<<

頭の中に直接低い声が響いてきた事に驚く。

隣に居るアウラにもその声が聞こえたのか、怪訝な顔で左右を見回している。

頭の中に直接語りかけるそれはまるで、

”あいつ”のような会話の仕方だった。

『驚いたな・・・喋れるのか』

と、黒い龍に問いかけた。

龍は一瞬目を細める。

>>言語を解すのが、ヒトだけだとも思っているのか。傲慢な事
だな。

して・・・再び問う。お前達は何者か<<
頭の中に少し不機嫌そうな声で再び声が響く。

『何者って言われてもな・・・しがない魔術師と短剣使いだが』

「しがなくて悪かったな」

横から余計な一言。

まあこの様子だと、どうやらあの姿を見てもさほど動揺はしていないらしい。

頼もしい事だ。

『・・・言葉のアヤだ。しがないのは俺の方だけって事で』
と言うと、溜め息で返事を返してきた。

>> まあ良い。・・・予の気のせいであろう。

して、お前達は何用でここへ参ったくく

意味深な言葉を残しつつ、龍は質問を変えてきた。

『んー・・・それはアンタ次第なんだが・・・。

先に2つ程質問しても良いか？』

>> 申してみよくく

『先ず一つ目。赤い服を着た魔術師が居ただろう。

恐らくアンタを呼び出した奴だが・・・そいつはどうした？』

この場に居ないという時点で大方の予想はつくが。

>> 葬ったくく

ただその一言だけが頭に響いた

「・・・呼び出した者に殺される、か。

奴には相応しいつまらん最後だな」

アウラがつぶやいた。

『・・・だな』

全くもって同意。

奴が殺された理由はわからない。

大方靈獣との契約条件に何か不具合が生じたか・・・。

もしくは奴がよっぽど下らない命令をして靈獣の気に障ったか。

いずれにしてももはやどうでも良い事。

これで当初の目的は図らずも達成したわけだが・・・。

『もう一つ。呼び出されたアンタはこれからどうするんだ？

大人しく魔陣器の中に戻るのか？』

何よりこれからのこいつの動向が気になった。

>> それもつまらぬ。以前現世に出た時と今の現世。

その変化をこの眼で見て回るつもりだが<<

頭に響くその声の内容に辟易した。

アウラも表情を強張らせている。

世界を見て回る・・・っておい・・・

『えーとそれは・・・そのお姿でバサバサ世界中飛び回るって事すか』

>> 何が言いたい<<

今の言い回しが少し気に触ったのか、苛立った声だった。

『そんな事になったらパニックになるっての・・・

それどころかアンタを攻撃する輩も出てくるかもしれないぞ』

>> ほう・・・今の現世のヒトは予の姿を見て刃を向けると申すか
<<

龍はピクリとその赤い瞳を反応させた

>>面白い・・・その様な輩は返り討ちにしてくれよう<<
そう言いながら龍は眼を細める。
それは何処か笑っているようにも見えた。

「ホルス・・・私にはお前が話をややこしくしたようにも聞こえたのだが・・・」
と、言いながらアウラが横で額を押さえている。

『んー・・・まあ、間違った事は言っていないつもりだが・・・
実際、あいつが世間に姿を晒す事は良い方向に行くとは思えない
だろ?』

そう言うアウラは「確かな」和頷く。

となると・・・一番良い解決方法は・・・
『では俺達目的の一つ。アンタと契約する事だ』
龍に向かってそう言い放った。

契約条件はわからないが・・・
力づくで大人しくさせるよりは楽 だと思ふ。

>>ほう・・・では お前達の”力”を示すが良い<<
途端に周囲の空気が変わる。
龍はその翼を開き、こちらに向けて口を開けた。

結局・・・そういうオチかい
うんざりしながら溜め息を吐いた後、
前方の”敵”に向けて身構えた。

「横に飛べ！ アウラ！」

自らの直感とその声が同時に自分の足を動かした。
一息にホルスとは逆方向へ跳躍する。

途端、前方の龍の口から炎の渦が吹き出され、
先ほどまで自分が居た場所に達する。

む・・・？

違和感を感じた。

炎が着弾した地面を見ると、何故か焦げ一つ無い。
あれだけの量の炎が着弾すれば普通、
落ちている石などは石炭化しているであろう。

かといってあれは幻の類と言うわけでは無い筈。
炎と自分の距離はゆうに十数メートルあったにも関わらず、
かなりの熱量を感じたのだ。

「“魂炎”か・・・。成る程。何もアンタは無差別破壊兵器ってわけでも無さそうだな」

横の方からホルスの声が響く。

”魂炎”・・・？

昔、何かの書物で見た事はある。

確か、発する者の意思で燃やす対象を選択する事が出来る炎。
炎術の中のごく僅かな術のみがその特性を持つそうだが・・・。
奴はどうやら体内でそれを生成できるらしい。

>> 無礼な <<

と、龍はホルスの居る方向へと向き直り、その巨大な腕を振りかざした。

しかしホルスは微動だにせず、龍の眼を見据えていた。次の瞬間、鼓膜に直接響くような甲高い音と共に、龍の周りを囲むように無数の印が浮かび上がる。

>> ほう・・・<<

その歓心したような声が頭に響いた直後、仕掛けられた印が次々と連鎖するように爆発を起こした。

『つく・・・』

爆発の激しさと飛んでくる土煙、石つぶてに片手で顔を覆う。

あれがホルスの全力か・・・

以前、オアシスで見たものより威力が数段上であつた。

しかも詠唱もせずに念じるだけであれだけの術を発動させるとは・・・。

175

この部屋が崩れ落ちるのではないかと危惧して上を見たが、特にヒビなどの危うい所は見あたらなない。

ホルスの術にも対象以外への影響を減らす何かしらの手段が施されているのであろうか。

爆発の連鎖が終わる。

対象となつた龍は今、土煙に飲まれて姿が見えない。

よもや無傷とも思えないが、あれで死ぬという事も無いだろう。注意深く目を細める。

と、巨大な腕が上がるのが煙の隙間から見えた。

腕の先には鋭利な爪が剣のように伸びている。

腕は煙の中に向かって凄まじい勢いで振りかぶった。

あの位置は・・・

間違いなく、先ほどホルスが居た位置に向かって龍は攻撃を繰り出した。

厭な予感に苛まれる。

いくらあの男でもあの巨大な爪で裂かれれば・・・

『ホルス！』

「なんだ？」

と、背後から即答。

『・・・・・・・・』

無言で後ろを振り返ると黒衣の男が平然と立っている。

『いや、いい。無事で何よりだ』

首を左右に振りながらそう言った。

ホルスは「おう」、と何やらニヤニヤしながら返事をした。

大方【転移】の印でも張ってあったのだろうか。

この男には心配するのも無駄な事なのかもしれない。

前方、煙の塊に目を移す。

『奴は・・・？』

そう聞くと、ホルスは表情を締め再び身構えた。

「・・・効いてねえな。並の魔法じゃ傷一つつかねえだろう。

あれでも念映でできる中では最大の魔力で発動させたんだけどな・・・。

どういふ魔術耐性してんだか・・・ったく」

と、うんざりしたように息を吐いていた。

>>ヒトの身でそこまでの魔術を駆使するとは恐れ入った。

だが所詮・・・ヒトの放つ魔術など、予には効かぬくく

土煙から姿を現した龍がこちらの脳に話しかけてきた。

「へえ。そうかい」

ホルスが龍の声を聞き流すように答える。

それと同時に、持っている短剣に少し違和感を感じて目を落とした。「武器に【強化】の印を施しておいた。隙を見てそれで攻撃してくれ」

と、違和感の原因が囁いてきた。

短剣は薄い光の膜のようなものを帯び、確かに何か言い知れぬ力を感じた。

こちらが無言で頷いたのを合図に、3者とも動き出す。

龍は再び体内より生成した炎を放ってきた。

即座に横に飛び、回避する。

だがホルスは後ろに飛び正面からその炎と対峙した。

何を・・・！

という言葉葉を飲み込む。

奴が無策に炎を受けるとは思えない。

自らは龍に攻撃を仕掛けるべく壁際から回り込む。

案の定、ホルスは光の膜を両手で張り、炎を防いでいた。

あの様子ならば炎がホルスに達する事はなさそうだが、

龍があの上に直接攻撃を仕掛ければ無防備に攻撃を受けてしまう可能性がある。

その前に私が

龍はホルスの方を向いている。

回り込んだ自分は視界には入っていない筈。

ホルスは隙を見て攻撃しろと言った。

奴は炎を避けない事でその隙を作り出したのだろう。

ならば自分はそれに答えなければ。

龍に体を向け、地面を強く蹴る。

縮地を用い、一飛びに奴の下へ行く事も出来るが……。

先ずは飛ばずに地面を滑走する。

何故なら恐らく……。

ブオンと低い音と共に重い衝撃が迫った。

龍の尾がこちらに向け、凄まじい勢いで迫ってきた。

口元を上げる。

予想通り、奴は既にこちらの存在に気づいていた。

だがそれも想定内。

ここぞとばかりに強く地面を蹴り、身を浮かせて迫り来る尾を回避し

狙うは奴の頭。

目標を定めて一直線に短剣を繰り出す。

だが短剣が奴の後頭部に到達しようとするその刹那、

『つく……!』

凄まじい熱の風圧がこの身を焼きつつ押し返した。

何が起こったかはわからない。

炎の壁のようなものが奴への攻撃を阻んだ。

その壁に衝突した右半身からブスブスと煙があがっている。

傷自体は大したものではない。

この程度の火傷であればなんとかすぐに直るだろう。

とにかく体勢を立て直さなければ……

「アウラ……!」

その声に反応し、前方を見てハッとす。

奴はホルスへの攻撃を止め、こちらに振り返ろうとしていた。

『しま』

そして地面に着地する寸前、

鋭い痛みと共に、はじけるように身が飛んだ。

- - Side Horus - -

突如自分を狙う炎の渦が止まった。

訝しげに見上げると、龍の後ろから攻撃を仕掛けようとしていたアウラが、

炎の壁に身を弾かれていた。

驚きに眼を見開く。

あれは紛れも無く炎術の”ブレイズウォール”だ。

攻撃を防ぐ炎の壁。魔術には効果は薄いが、

直接攻撃を防ぐには相当な効果がある術である。

歯噛みをする。

桁外れの魔術耐性に炎術による防御、ねえ・・・

さすが霊獣。一筋縄ではいかねえな。

などと考えていた一瞬の内に、龍が次の行動を起こしていた。

身を翻しながらその巨大な腕を背後に向けて振り払った。

その先にあるのは、身を焼かれながら落下していく姿。

『アウラ!!!』

咄嗟に彼女の前に【障壁】の印を念映する。

だがその巨大な腕は易々とそれを突き破り、

その爪でアウラの身を裂きながら吹き飛ばし、壁に叩き付けた。

一瞬、背筋に寒いものを感じたが、すぐに龍を睨み付ける。

『・・・つの・・・野郎!!』

怒りを覚えながら目を瞑り、片手を天井にかざした。

『> 無の狭間に燦る根源の光よ、此へ来たりて我が敵へと降り注げ
!<』

早口に詠唱を済ませ、即座に光の魔力を開放する。

かざした手からゆつくりと光の玉が現れ、

龍の頭上へと瞬時に移動する。

>>む <<

相手もすぐに気づき、浮かぶ光を見つめていた。

【セレスティアルレイ】

自らの操る中・・・というより世に現存する光術の中で最上位の攻
性光術だ。

『行け』

目を開き、声を発したと同時に頭上に放った光の玉が輝きを増した。
直後、そこから甲高い音と共に無数の光の線が発射され、

光の真下に居る龍の元へと降り注いだ

>>ぬ・・・ぬう <<

龍が怯むように首を下に向け、羽を自らに被せた。

発せられる光は大半が龍に直撃する寸前に何かしらの力で消失して
しまっていたが、

それでもいくつかの光は龍に到達し、

皮膚を貫きはしないものの、確実にダメージは与えていた。

その様子を見て、少々安心した。

あれが全く効かないのであれば、本当に自分ではどうしようもない。少なくとも、まあ足止めにはなるな……

あの光は約1分程度発射し続ける。

その間、奴は動く事が出来ないだろう。

その様子を見て、即座にアウラの元へと足を向けた。

近くまで来ると、その状態に目を見開く。

龍の爪に裂かれたのであろう腹部、

そして叩き付けられたと思われる壁におびただしい量の血痕。

恐らく通常であれば死に至る傷だったろう。

しかし、本人は気絶しているようだが既にあった筈の傷は無くなりかけている。

ふうつと安堵の息を吐く。

どうやら彼女も、やはり自分と大差無い回復力を持っているようだ。とにかく、奴が再び攻撃を仕掛けてくる前に起こさなければ。

『アウラ』

肩を起こし、首を揺らしながら呼びかける。

と、アウラは「うつ……」といううめき声を上げた後、薄く目を開いた。

『平気か?』

と言うと彼女は、

「ホル……ス?」

寝ぼけたような声でそう言った後、

急に目を見開き、即座に起き上がろうとする。

「痛つ……!」

だが、すぐに腹部を押さえながらしゃがみこんでしまう。

『おいおい……いきなり動くな……』

傷はほぼ完治していても、まだそれを精神部分が受け入れていないのだろう。

ま・・・”この体”になつてから20年程度じゃ仕方ない・・・か。

自らが不死という事を頭で認識するのは早いが、奥深くの精神部分がそれを受け入れるのには時間が掛かる。当分の間は、深い傷を負えば例えすぐに体は完治をしたとしても、その精神部分の枷が傷みだけを感じさせてしまつたろう。

『無理はするな。ゆっくりだ、立ち上がれるか？』
と、手を差し伸べる。

「何を悠長な・・・！ 奴が」
アウラはこちらに何やら文句を言った後、前方を見つめて呆然とする。

その方向には、龍が光の雨に身を固めている姿があつた。

「あの光は・・・？ お前がやったのか」
と、こちらに顔を向ける。

『ああ。見ての通り奴は今動けない。

つっても効果時間は限られているけどな・・・』

「・・・あれ程の術は初めて見た」

そう言いながらアウラは【セレスティアルレイ】の光に魅入られたように前方を見つめる。

『つと、そろそろアレの効果が切れる。立てるか？』

もう一度手を差し伸べる。

「あ、ああ」

アウラはこちらの手を取り、立ち上がると、しばし首を下に向けて腹部を手でさすっている。

「痛みが 消えた」

その呟きにそうか、と頷く。

どうやら彼女の精神部分がようやく傷の完治に追いついたらしい。

「すまない。迷惑をかけた」

アウラが申し訳なさに俯く。

『いや、俺の読みが甘かった。』

まさか魔術を使つてくとは思わなかったもんでな・・・」

奴が”魂炎”を用いている時点で気づくべきだった。

対象を選定する炎など、魔術でのみ成せる事。

つまり奴が吐く炎も結局は魔術なのだろう。

それが他の炎術を駆使した所でなんの不条理もない。

『つと・・・』

前に向き直る。

そうこうしているうちに、光の放つ甲高い音が止んだのだ。

>>驚いたな・・・<<

低い声が再び脳内に響く。

と、同時に二人とも身構える。

龍は体中からプスプスと煙を上げながらも、

さほど堪えている様子はない。

寧ろ、今の事が無かつた事のように、

>>・・・その女<<

と、その赤い視線をアウラに向けた。

- - S i d e A u r a - -

龍の赤い眼がこちらを見つめる。

『なんだ』

訝しげに聞き返す。

自分が注視された事がそもそも意外であつた。

どう考えても、あの規格外な術を放ったホルスに対して、興味を持つと思ったのだが・・・。

>> 何故生きている。ヒトの身としては、致命的な傷を負った筈だが <<

成る程。そういう事か。

それを聞いて納得する。

要は、いくら霊獣とやらにしてもやはりこの身は不可解らしい。

『答える義務はないな。ただそういう体質なだけだ』
そう投げやりに返す。

もつとも・・・【ただそういう体質】というのは
本当に自らの知識の中でほとんどを占めるのだが。

あとはあやふやな記憶と、ホルスから聞いた

ユグドラシル、とかなんとかの種を体内に持つという事程度。
知識として呼ぶ事も怪しい。

しかし龍にはその言葉だけで充分であつたらしい。
なにやら真紅の瞳を眼を細めこちらを睨み付けている。

>> 成程。そういう事か。 お前は現在の世における主殿の子なのだなく <

? 何を言っている。

龍の言葉の意味を図りかねたが、
その声に、ぴくつと横にいるホルスが反応する。

「主殿? まさか、ユグドラシルの事じゃねえだろうな・・・
?」

龍を睨みつけるようにホルスがそう言った。

>> ユグドラシル・・・? そうか。あの呪いは未だに・・・
<<

龍はこちらへの視線を外し、虚空を見つめた。

「んあ？ 何言ってんだ？ アンタ」

>> いや、如何にもお前の言うユグドラシルは我が主だ。

それを知るお前もこの女と同様の存在か<<

「そうだが・・・。って待て、つー事はあいつは前、アンタの主人だったのか？」

ホルスが少し動揺を見せながらそう尋ねる。

>> 主人か。そうだな。あの方は我等靈獣全ての創造主だ<<
龍のその言葉にホルスはしばし開口し、言葉を失った後、

「あの野郎・・・何考えてやがる」

>> いやなに、もう数千年も過去の事だ。

我等が生み出された理由などお前達を知る必要も無い事<<
その言葉にホルスは舌打ちをしながら「そうかい」と呟いた。

>> しかしヒトのような矮小な存在に種を託すとは・・・。

主殿の力は余程衰えていると見える<<

正直ホルスと龍が言っている事ははっきりとはわからない。

『で・・・それが何だと言うのだ』

だがいい加減もどかしくなり、そう言った。

不死という奇跡にしろ、こんな化け物を生み出す奇跡にしろ、

似たようなものだ。それがどんな経緯の差があるうとどうでもいい。

何より

『その矮小な存在の力がどのようなものか・・・』

思い知らせてやろう』

勘に障った。

いくら巨大な力を持っていようが思い上がりも甚だしい。

短剣を抜き、戦闘態勢へ戻る。

「　　だな」

ホルスも何やら嬉しそうな顔で姿勢を正す。

>> 威勢の良い事だ・・・。
では、行くぞく

龍の紅い眼の色が光を増し、

再びびりびりとするような殺気が広間中を包む。

さて　　どうするか。

先程のような失態は繰り返せない。

縮地では恐らく見破られてしまうだろう。

となると・・・【陽炎】を用いるか。

だが問題は尾でなぎ払われてはたとえ軌道を変えたところで
その攻撃範囲に入ってしまう。

「アウラ！　上に飛べ！」

と、考えているうちに横からホルスの声。

咄嗟に地面を蹴り、空中へと身を移す。

と、上昇終着点で足元に光が現れ、その高さのまま浮かんだ。
ホルスが咄嗟に【浮遊】の印を念映したのだろう。

何が起きたかわからなかったが、
地面を見て目を見開く。

広間の床を埋め尽くすような赤い方陣。
それが怪しく光り輝いていた。

あれは確か　　前に見たことがある。

炎術【フレイムグラウンド】

だが・・・

「なんつーでたらめなかさだ・・・」

横でホルスがぼやく。

そう、ホルスの言う通りあれば桁違いの大きさである。

前に見たものはせいぜい、半径2、3メートルがいい所であったが、下に展開されているのは裕にその10倍以上はある。

とにかくあの方陣に触れれば身を焼かれる事になるだろう。

一度触れてしまえば、あの方陣の効果が続く限り

身を焼かれ、自らの不死の特性で再生し、身を焼かれ、

の無限地獄を味わう事となる。

そのような事になっては精神の方が耐えられるかどうかはわからない。

奴はこちらの不死の特性を知り、

敢えてあの魔術を使ったのだろう。

そして何より、方陣は広間を埋め尽くしている。

これでは地面に降り立つ事ができない。

ふと、厭な予感が走り、はつとする。

このままでは・・・

その一瞬の危惧の通り、空中に浮いている無防備な自分達を長く太い尾が唸りをあげながら横なぎに襲い掛かる。

「ち・・・!」

その先には何やら次の魔術を駆使するためか、魔力を練る事に集中していたホルスがいた。

刹那、反射的に体が動く。

現状の唯一の足場である【浮遊】の印を蹴り、

なぎ払おうとする龍の尾に向かい、渾身の力をこめて両短剣を振るった。

迫り来る尾の存在に気づいた時には既に避け切れない距離だった。

『ち……!』

全力で【障壁】を念映する。

最も……大した効果は期待できないが。

逃れられない衝撃を覚悟する。

- だが予想された痛みも衝撃も襲っては来ない。

自らに衝突する予定だった尾の先は、

何故か自らを避けるように吹っ飛び壁に激突していた。

『んあ?』

思わず間の抜けた声を漏らしてしまう。

が、前方を見直すと、すぐに状況を把握できた。

やってくれる

笑みが漏れた。

アウラが自分が出した【浮遊】の印を足場とし、

龍の尾に向かい突進し、こちらに当たる前に尾を切断していたのだ。

当然足場から離れたアウラは床へ落ちていったので、

急いで再度【浮遊】を念映する。

咄嗟の事とは言え無茶をする女だ……。

だがおかげで先ほどから練った魔力が無駄にはなっていないようだ。

右手に練った魔力を光の槍へと具現化させた。

それを大きく振りかぶり、真下へと投げた。

光術”デイスペルフィールド”の一種ではあるが、普通に使用したのでは既に展開されてしまっている”フレイムグラウンド”のような方陣魔術には効果がない。だがその特性を収束したものを槍に見立て、地面に突き立てれば、その周辺に張られた一切の方陣魔術を無効化できる。

突き立てられた光の槍は、地面に輝く赤い光に次々と浸透していき、その効果を打ち消していった。

『うし、もう下に降りても問題ないぞ』
やや下方にいるアウラに声をかける。
「あ、ああ」

『わり。借りが出来たな』
地面に降り立った後、アウラに向かい、片手を立てる。
「何を言っている……。やっと一つ、こちらの借りを返せたただけだ」
と、そっぽを向かれた。

その姿を見て苦笑しつつ、前方に目を向ける。

龍もこちらの姿を視認する。

>>なかなか面白い・・・<<
頭に声が響いた。

>>不死という恩恵があるにしろ、良く人の身でそれだけの力を得たものだ<<
今までの無感情な声とは違い、ほんの少しだけ愉悅に浸るような感情が見え隠れする声。

>>ふむ・・・猶予をやるう。こちらからは手を出さぬ。

今度はお前達の方から攻めてみてはどうだ？<<

それが何となく癪に障った。

余裕こきやがって・・・

と心の中で毒づいてるとある事に気付く。

「ホルス・・・」

アウラも気付いたのか、視線を尾に向けたままこちらに声を掛けてきた。

『ああ・・・。まったくトカゲかよこいつは』

そう、アウラが切った龍の尾が少しずつ再生しているのだ。

トカゲ・・・と比喩したものの、恐らくは

この龍はどの部分を傷つけても再生するだろう。

それは前に戦った霊獣がそうであったからだ。

霊獣全てがそうとは限らないだろうが、

先ほどの話　　霊獣が自分達と同じ”奴”から生まれてきたのであれば、

そういう特性を持っていたてもおかしくは無い。

下手をすると奴らもひょっとしたら不死なのかもしれない。

それではこの龍を倒すことなど不可能なのではないか。

だがこの龍に関しては何も倒さなければいけない理由などない。

この龍は【力を示せ】と言った。

例え不死であろうと、恐らくは一度でも奴に【死】に相当する攻撃を与えれば、

【力を示す】といった条件には充分であろう。
ならば

『アウラ、下がっていてくれ』

「何をするつもりだ？」

と、怪訝な顔の返事。

『せつかく時間をくれるって言ってるんだ。

それ相応の術をぶつ放す』

龍を睨み付けつつアウラに説明をする。

前にアウラが居れば巻き添えをくってしまうだろう。

「・・・わかった。何か私にできる事は？」

アウラはこちらの言葉通り、後ろにさがりつつそう言って来た。

『そうだな・・・。仮に、今から打つ術が奴に通じなかったとしても、

必ず隙は作れる。その隙に攻撃へ移ってくれ』

「わかった」

そうは言ったものの、今から打つ魔術は

自らが扱う術の中で対単体ならば紛れも無く最強の術。

どんな存在であろうが、通じないという事は恐らく有り得ない。

しかしその分発動に著しい時間がかかるが、

ご丁寧にこの龍は時間をくれるとの事。

ならば使わない手はない。

『あ、それと』

前方に佇む龍にも聞こえるように大きな声を出す。

『もし、このお方がいきなり攻撃してきたら食い止めてくれないか？

まさか・・・気高き靈獣様が自分の発言を破るとは思えないがな』

アウラが苦笑をしながら「ああ」と返事をする。

まあ・・・プライドが高そうないつの事だ。

恐らくはこれで平気かとは思うが。

>> 何をするかは知らんが、予の言葉に偽りは無い<<
ほれきた。

『せいぜい・・・後悔しろ』

大きく息を吸いながら、両手を前にかざした。

- - Side ??? - -

なんとなく、だ。

奴らの全力を見てみたくなったのだ。

何故、そのような考えに至ったのか。

例え不死を得ようと所詮は矮小なヒト、
たかが知れていようと思っていた。

だがあの女は力をこめて振った我が尾を切断し、
あの男は決して手加減などはしていない我が術を
いとも簡単に無効化した。

あの戦いより幾千年。

数十回と人が我が力を得ようと眠りを起こした。
だが何れもつまらぬ者達であり、

数秒と持たずに命を散らせた。
中には姿を見た瞬間逃げていった者もいた。

矮小な人に辟易していた所を
久しぶりに戦いを”楽しい”と思った。

それは奴らが不死という特性を主殿からもらっている事実とは別に、
あの者達自体、充分に戦いを楽しめる力を備えていた。
だから恐らく、あのような戯れを思いついたのだろうか。

そして今、

こんな感情はいつ以来であろうか。
少し”後悔”をしている。

目の前で造りだされていく魔力は
紛れも無くこの身を滅し得るもの。
今この手で奴をなぎ払えば、容易く術の発動を防ぐ事が出来よう。
だがそれは出来ない。

自らの言葉を偽る事など、死にも勝る屈辱だ。

ならば。

奴の術の発動を待ち、それに合わせて、
我が最大の術をそれにあてがうのみ。

かつてこの身が”神炎龍”とよばれた所以、
至高の魔力より生み出されし白き炎、

【天界の神炎】を放つべく、

>ヘブンズブレス<

体内に全力を以て魔力を蓄積しはじめる。

血が騒ぐ。

まさかヒトなどと術の攻めぎ合いをする事になるとは、な。

- - Side Horus - -

『>悠久の時を巡る導きの光よ。大いなる加護の力を此処に<』
かざした両手から幾つもの光が飛び、
前方に直径が自らの背丈の2倍程度の光の方陣が浮かび上がる。

まずこれが下準備。

光の方陣を作り、その近くで放たれる

魔術の威力を増幅する光術【アーケイン】

光術の基本ではあり、自分であれば詠唱なしに即座に発動させる事もできるが、

この術は今からする事の要でもある。

最大の効果を発揮できるよう、詠唱を省略せずに呼び出した。

次に指二本に魔力を籠め、印を描き出す。

【アーケイン】の方陣の一番上方に、

【閃光】の印。対する下方に【暗流】の印。

【煉獄】を左上に、【凍風】を右下に、

右上には【迅雷】、左下には【重力】

一つ一つの印に最大限の魔力を注ぐ。

本来同時に放つ事は愚である反属性同士の術。

だが術をなす6種の属性を同時に放つ事で、

その効果は大きく変化する。

同時に放たれた6種の魔力は、打ち消しあう事はなく、

一つの純粋な力へと変化する。

それは消滅の光。

その光が通過する所には何一つ残る事はない。

そして【アーケイン】により、消滅の光は増大される。

あの龍を包み込むくらいの光にはなるだろう。

100年ほど前に編み出したこの術。

未だ実戦で使った事はない。

使用する必要もなかったとも言えるが・・・。

口元を歪める。

自らの限界を試す機会などそうそう無い。
喜びすら覚えながら息を静かに吸った。

『行くぜ・・・？』

【アーケイン】の中央に魔力を収束させる。

この6属性を併せて放つ自らのオリジナルの術、

【エレメンタルバースト】の発動は最後に【アーケイン】の中央に、
純粋な魔力のみを放つ事で対象へと放たれる。

だが術を放つ前、龍の様子を見て肝を冷やした。
奴は確かに言葉の通り、手は出してこなかった。

しかし、その姿からは今までよりも遥かに大きい脅威が感じられた。
恐らくあれは・・・体内に桁外れの魔力を蓄積している。

こちらの術に発動に合わせ、あの魔力を何かしらの形で開放するつもりだろう。

今までの傾向から、それは恐らくは炎。

あれだけの魔力、どのような炎になるのか想像もつかない。

あらゆるものを消滅させる筈のこちらの攻撃すらもはじき返しかねない。

こめかみに汗が伝う。

『黙ってやられる気は　さすがに無いわけか』

龍はそれに答えず、ひたすらこちらを見据えている。

『いいぜ・・・』

こうなれば力比べだ。

後は・・・。

『アウラ』

背後に居る相棒に声をかける。

「わかつている」

と、アウラはたつと龍の横へと駆け出した。

さっすが

どうやらこちらの意は汲んでくれたらしい。

だが、なるべく彼女の世話になるような事態は避けたいものだ。

さて行こうか

眼を閉じて精神を集中させる。

『エレメンタル 』

そしてありつたけの魔力を収束し

『バースト!!』

前方の敵へと解き放った。

- - S i d e A u r a - -

凄まじい魔力の渦。

未だ発動すらしていないその術は、

既に充分脅威を感じるに値するものだった。

光り輝く大きな方陣を囲むように点在する6つの印は

全てが違う色を放ち、淡く点滅を繰り返している。

ホルスのする事にはもはや驚きは無いが、

それでもあれだけの魔術を駆使するに至った

その才能と努力を考えると賞賛に値する。

「行くぜ・・・？」

ホルスは龍に向け、不適な笑みを浮かべつつ声をかける。

それはどこか>本当にこれを撃つていいのか？<と龍に確認をしているようにも見えた。

先ほどホルスは「術が通じなかったらその隙に攻撃してくれ」などと言っていたが、あの表情を見ると

実の所こちらにそれをさせる気は毛頭無い様に思える。

それほど、あの術の威力に絶対の自信を持っているのだろう。

方陣はさらに光を増し、6つの印はその点滅を速くする。

だがそれとは別に、ぞくつと

何か言い知れない不安を感じた。

ホルスも同様のものを感じたのか、目を見開いている。

いや寧ろ、こちらより明確にそれを感じ取っているのか、明らかに先ほどの表情とは一変している。

しかしこの状況を考えればこの不安が何なのかは大方の予想がつく。

あれだけの術、いくら霊獣と言えども耐えられるとは思えない。

阻止は容易にできようが、奴は先ほど”こちらからは手をださない”と言った。

あのプライドの高そうな龍の事、それを違えることは無いだろう。

となれば行き着く答えは一つ。

ホルスが術を放った瞬間に、

奴も何かしらの攻撃で対抗してくるつもりだろう。

「いいぜ・・・」

ホルスは何かを振り切ったように再び笑みを浮かべた。

「アウラ」

振り向かずにこちらの名前を呼ぶホルスの意思を汲み取る。

『わかつている』

ホルスの術がもし龍の反撃に押されるような事があれば、自分がなんとかしなければならぬ。

向き合う龍とホルスを余所に、両者の真横へ身を移した。

ホルスはこちらに一瞬眼をやり、一瞬唇を吊り上げると、すぐさま前方に鋭い視線を戻した後、目を瞑った。

その一瞬の静けさに、息を呑む。

そして次の瞬間、一際大きな甲高い音が耳を貫くと同時に点滅していた6つの印がそれぞれの色を主張するように大きく輝いた。

「エレメンタル」

方陣の中央に目に見えて光が収束する。

そして薄暗い筈の洞窟はこの瞬間、あの大きな力に照らされ、真昼の太陽の下の如き明るさとなった。

「バースト！」

その掛け声と共に巨大な6色の光の奔流が龍へと襲い掛かった。

あれはもうすでに魔術と呼ぶ事を憚られる。

あれの前に立てば・・・

不死な筈の自分とてこの世に存在を残していられるか定かではない。

だがしかし、

その光を前にした龍はそれを迎え入れるようにゆらりと口を開き

光がもう一つ発生した。

純粹な白い光。

その光はホルスが放つ6色の光と激突し、
6色の光の進行を阻んだ。

雷が足元に落ちたような凄まじい轟音が鼓膜に響く。

眩しさに眼がくらみ、眼前に腕を添える。

あれは一体・・・

激突した二つの光は凄まじい余波を周囲に放ちつつ
互いに拮抗し合っていた。

ホルスの術は恐らくあの大きな方陣で威力を高めつつ、
さらに6属性の相乗効果であの絶大な威力を出している。

それに対し、龍の口から出る光は純粹な力で対抗していた。
見ると、龍の全身を視認できるほどの魔力が覆っている。
巨体を巡るその魔力をあの光に変えて口から放っているのだろう。
その魔力量は底が知れない。

ホルスはやや苦悶の表情を浮かべていた。
対抗する龍が吐き出す光を押し切るべく、印に更なる魔力を注ぎ込
んでいるようだ、
先程から拮抗状態は変わらない。

いやむしろ 僅かだが押されてきている。

このままでは、いずれあの白い光にホルスの術は敗れる。

だが龍は全身全霊をホルスに向けていた。

そう、隙だらけなのだ。

これは間違いなく自分の出番なのだろうが……。

おそらく攻撃のチャンスは一度。

一度でもこちらが攻撃をかければ、奴も警戒を向け、何かしらの対策を講じてくる可能性が高い。

ならば一度きりの攻撃をどこに向けるか、だ。

確実に奴にダメージを与えられる場所でなければ意味がない。考えられるのはやはり頭だが……奴の放つ光に近すぎる。

あの光には絶対に近づいてはいけない。

本能がそう告げているのだ。

だが相手は人間ではなく御伽噺や神話にのみ出てくる魔物だ。

他に効果がありそうな場所などわかるはずもない……が、

ん……？

ふと不思議な事に気が付く。

龍の全身を巡る視認できるほどの大きな魔力の流れは、発生させている口に巡っているわけではなかった。

全身から漏れ出る魔力は一つの場所に吸い込まれるように流れている。

それは首の付け根。

という事は、奴は体内であの光を作り出し、口から吐いていても言うのだろうか。

ならば……

龍の魔力が終結するその場所を見据える。

あの場所を突けば、龍の放つ光の威力を弱められる可能性は高い。

対象は決まった。

後は手段だが……。

確実にダメージを与える為、”縮地”を用い、その勢いを殺さずに攻撃するのが妥当だとは思えるが……ん……？

一つの事を思いつき、天井を見上げる。
よし

自らの中で、あの魔力の集結点への攻撃方法が定まった。

光のせめぎ合いはさらにバランスが傾き、龍の放つ光が伸びつつある。
急がねばならない。

用いる短剣は一つ。もう片方は鞘に戻す。
下手に両方の短剣を使おうとすれば威力の減退に繋がる。
ただ一点のみへ全ての力を注ぎ込む事にした。

すうつと息を吸う。

縮地の到達地点 天井 を睨み付け
地面を、強く蹴った。

- - 風を切る。

瞬時にこの広間全体を見渡せる場所に到達。

そのまま”陽炎”の要領で即座にもう一度縮地に入るべく天井を蹴った。

みしつと足に激痛が走る。

やはり相当に無理はあったか。

だが今は、そのような事を気にしている時ではない。

ただ一点、あの魔力の終結点に全身全霊の攻撃を打ち込むのみ！

『 っはあああああああ！！』

全ての力を搾り出すように声を上げ、
自らを彗星と化し、その地点に武器を突き立てた。

- - Side Horus - -

額から汗が滲み出る。

体内の魔力はもはや限界に達しようとしていた。

ったく・・・なんつー無茶苦茶な魔力なんだか。

こちらのように小細工もせず、

ただ純粹な魔力のみであの域の威力の攻撃を放つ者と出会うなど、
自らの人生の中で初めての事であった。

『く・・・』

これ以上の術の維持は難しい。

だが術を止め、あの光を受ければ恐らく自分は【消滅】する。
死ではなく【消滅】。

それは自らの不死という特性をも上回るもの。

まさかこんな形で生を終えるとも思っていなかったが・・・

ま・・・修行不足って奴かね・・・

と、自嘲の笑みを浮かべる。

魔力が尽きかかり、【消滅】を覚悟した瞬間、

急激に圧迫する力がなくなり、耳をつんざく声が広間に響き渡った。

一つの可能性にはっと気がつき、

何とか維持していた印と方陣を消去する。
はぁあと大きいため息を吐きながら地面にへたり込んだ

そのまま龍を見上げながら、

『ナイス・・・アウラ』

龍の上に乗っている相棒に声を掛けた。

龍は首を上へ上げ、先程大きな声をあげた体勢のまま動かない。

アウラの攻撃した場所　恐らくこの霊獣の急所だったのだろうか。

当のアウラは何故か呆然としている。

自らの攻撃にここまでの効果があった事に驚いているように思える。

龍の姿が少しずつ薄くなっていた。

彼ら霊獣は基本的に死ぬ事はない。

死に相当する傷を受けた時、しばらくの間この世に留まれなくなる
だけだ。

203

>> 実に・・・面白い者達だなく
と、頭にまた再び低い声が響いた。

>> 我が名はゼノス　神炎龍ゼノス。

契約は成った。現在よりお前達に　予の力を託すく

その声と共に薄くなった龍の体ははじけるように光の粒となり、
自らに突き立つ短剣へと収束した。

お前達・・・？

少しだけその言葉に違和感を感じた。

だが今はその違和感の正体を考える気力も沸かない。

再び薄暗くなったただ広いホールの中に、
ぽつんと自分とアウラが残される。

まるで先程までの事が夢であつたがの如く。

『今回ばかりはもう駄目かと思つたがな・・・
ありがとなアウラ、本当に助かった』
びしつと手を合わせ、命の恩人に向ける。

アウラは一瞬目を広げると、目を瞑り、

「莫迦か」

と一言言いながらふつと微笑む。

「それはお互い様だ」

『はは、そーかい』

だんつと、仰向けに寝そべる。

『づがれたー・・・』

自分でもだらしの無いと思える声が出てしまう。
だがそれも仕方が無い事。

これだけ魔力を空っぽになるまで酷使したのはいつ以来だろうか。
正直今は、立つ気力すら沸かない。

「お休みの所悪い知らせですまないが・・・」

足元から溜め息交じりの声が聞こえる。

『なんだあ？ つつか寝るぞ俺・・・』

気だるく返事。魔力の回復には睡眠が一番である。

「ここ、もうすぐ崩れるぞ」

- -

地下であれだけの魔術合戦をすれば当然と言えば当然だが・・・その戦場となった広間だけではなくそこから伝わった崩壊の波は、この地下洞を利用したアジト全体に広がっているようだ。

しかし・・・きつい。

魔力は体力と直結するものだ。

それが空っぽの状態でこの疾走はきつい。

『アウラ・・・うおつと』

真横にかなり大きめの岩が落ちる。

「なんだ。喋る暇があるのならもつと足を動かせ」

遅いこちらの走りに焦れているのか、厳しい返事が返ってくる。

『おぶつてくんね？』

「却下」

即答された。

今のはちよつと早かったぞ。

「私とて少々まだ足を痛めている。

魔力が尽きたくらいで音をあげるな」

『・・・はいはい。善処しますよ・・・』

とは言うものの魔力を使い果たしたとなれば並の魔術師であれば立つ事すら適わない。

何とか精神力のみで精一杯歩を進めているが・・・

それでも今の速度は一般人が走るより遅いかもしれない。

が、突如前にいたアウラが消える。

『お？』

急に左肩が持ち上がる。

「仕方ない・・・肩くらいは貸してやる」

と、すぐ横でむすつとしながらこちらの左手を肩に掛けるアウラの声。

『わりーな』

「なに、礼には及ばない」

そう言ったアウラは、何か意味深な笑みを浮かべていた。

『つておおおおおい！』

そしてそのまま、全力疾走。

こちらの足は当然追いつかないので、
引きずられたワラの様になっていたのは言いが及ばず。

『足！ ちょ・・・少しスピードを いててっ！』

こちらの抗議も無視をされ、
そのままアジトの入り口に向かって疾走 否、輸送されていった。

- - Side Aura - -

アジトの崩壊は割りと緩慢で、
出口に辿り着いた瞬間に崩壊、などと言う
危機一髪な脱出でもなかった。
ここまで急ぐ必要も無かっただろうか。

外に出た瞬間、ひやりとした空気に身を縮めます。
すっかり夜が更けていた。
とりあえず肩に掛かった”荷物”を降ろした。

「この鬼め・・・」

と、こちらに恨み言を呟きつつ座り込むホルス。

何やらその様子に笑いが漏れてきてしまう。

「おいそこ、何が可笑しい」

それが癪に障ったのかこちらを見上げ、じと眼で睨み付けて来た。

『いや・・・安心した』

「・・・安心？」

ホルスが怪訝な顔で首を傾げる。

『お前にも、そういう一面があつたのだな』

今までこの男は何をするにもどこか達観していて、

その行動には何かしら計算をしながら動いている節がある。

どうしても衝動的に感情で動いてしまう自分と比較し、

劣等感を感じてしまう部分もあった。

ホルスが自分と同じ、不死の体を持つと知った後は余計である。

自分もこうあらねばならないのか、と。

こちらの発言に、ホルスは眼を丸くした後、

その意図を理解したのか、ため息を吐き、首を小さく横に振った。

「どういう勘違いをしていたかあらかた想像はつくが・・・

例え不死だろうがなんだろうが俺は人間だ。

人間である限り感情によってどんな一面でもみせるっての。

ただ、そうだな・・・長く生きていると多少の事には動じなくな

っちまうがな」

そう言つてホルスは少しだけ表情を曇らせた。

歳を重ねる毎に色々な経験をしていき、

感情を大きく動かさなくなっていくという事だろうか。

あの様子では、そうなっていく自分を余り良くは思っていないように思える。

「ん・・・そういえば・・・」

今のホルスの言葉で、一つ疑問が沸いた。
寧ろ今まで何故それを聞かなかったのか。

「なんだ？」

「ホルス、お前は今何歳なのだ？」

自分と同じ不死であるならば、見た目での年齢判別など不能だ。
長く生きていると多少の事には動じなくなるなどという言葉は
当然、長くの年月を生きてきた者が言う事だ。
それに何より、ホルスの魔術の腕は常軌を逸している。
恐らくは、自分よりかなり年上なのではないか。

「ああ、えーと・・・540、くらいか？」

ホルスが顎に手を当てながら平然とそんな途方も無い事を言い放つ。

・・・眩暈がした。

「・・・・・・ホルス」

この男は自分の10倍以上生きているというのか。

「ん」

それならばむしろ・・・

「もう少し、老成したらどうだ？」

「・・・余計なお世話だ」

- - Side Yokii - -

「ふう・・・」

机の上に山のように積まれた書類に目を向け、

思わず大きく息を吐く。

ダシユタ住民の要望書、

周辺町村からの移民希望文書、

盗賊襲撃の報告書、

隣国マラノからのネチネチとした抗議文、

市場においての取引詐欺被害届

e t c e t c . . .

中には明らかに自分の担当ではない物も

混ざっているような気がするが・・・。

とにかくとりわけ最近は忙しい。

充実してはいるが、さすがにこの量は気が滅入るものがある。

それと何より・・・

自分を操り、隣国に戦争を起こさせようとした者の元へ向かった者達

自分を助けてくれたあの男と、鋭い気配は持つがどこか幼さすら残す女性。

二人とも恐らく相当な手練である事は間違いないのだが、
たった二人で敵の本拠地へ向かったというのは、やはり心配ではある。

それが気になり、抱えている仕事の処理も散漫になってしまっていた。

「ヨキ様」

部屋の入り口からノックと共に声が響く。

『入りなさい』

がちゃりと開くドアから、

何やら少し困った様子の衛兵

よく自分の周りの世話をしてくれているロニスが入ってきた。

『どうした？』

用件を促す。

「それが・・・衛兵として志願したいという者達が今、門の前にいるのですが・・・」

衛兵ロニスのその言葉に苦笑が漏れる。

『こんな時間にか？』

「はい、こんな時間にです」

兵士は困ったように溜め息をする。

今はもう既に夜更けである。外も冷え初めているというのに・・・。志願であれば通常、朝か昼間に訪ねてくるのが通例だが、一体何故またこんな時間に志願をしてくるのだろうか。

『ふむ・・・。また明日来て貰う様に言ってくれんか』

「そう仰ると思ひまして、私もそのように申したのですが・・・」
と、ロニスは言葉を濁す。

『帰らないのか』

ふむ、とロニに手を当てる。

「なんでも「とりあえずヨキという人にこれを見せてくれ」との事なのですが」

と、ロニスは何やら胸元から取り出す。

それは3枚の金貨であった。

『む』

手に取り、金貨を良く眺めると、その正体に気づき、驚く。

「何かわかりますか？」

『これは　ティルフェルム聖教国の正金貨だ・・・』

「・・・は、はあ。何故そのようなものを・・・？」

何故も何も無い。

『いや、誰の差し金かはわかった。その者達をここへ。

それと、これは返しておいてくれ』

と、金貨をロニスへ返す。

確か、あれ一枚で一ヶ月は寝て暮らせるくらいの価値はある。そんな物はおいそれと他人から受け取る事はできない。

「はっ。了解致しました」

兵士が一礼をし、ぱたんと扉が閉めた後、苦笑いがこみ上げる。

このタイミング・・・。

大方敵のアジトに居た者を改心させ、あまつさえその者達の今後の面倒をこちらに押し付けてきた、といった所だろうか。

まあ、確かに人手は足りない。

とはいえ元盗賊と思われる者を雇うほど切迫しても居ないが・・・。

『まったく・・・これで貸し借りはなしですよ』

と外の空を見上げ、呟いた。

まずは本格的に更正させる為、せいぜいたっぷりとしこいてやるとしよう。

- - Epilogue - -

朝陽が目蓋を照らし、眩しさに女が目を覚ました。木にもたれ掛かって眠っていた筈が、

何故か地面にうずくまる様に眠っていたようだ。

さすがに疲労がまだ残っているのか、

寝覚めが悪く、酷く眠い。

ゆっくりと立ち上がり、服に付く砂を払いつつ、

隣の木の下に目を向けると、黒衣を着た男がだらしなく大の字で眠っていた。

その姿にため息混じりの苦笑をした後、

やや揺れる足取りでこの砂海では貴重な泉へ足を運ぶ。

その途中、視界の端に大きな岩が映った。

昨日、大きな戦いがあったその場所の入り口は、

今はもう瓦礫に埋もれて無くなっている。

激しい戦いを終えた後、

特に男の方は疲れきっていて、

本来その男の術で一瞬で街に戻るあても外れ、

まして徒歩で戻る体力もない。

もうここで寝るぞと言い張り、砂海のと真ん中で寝そべる男を余所に、

女は案外近くにあったこの場所を探し宛てた。

砂海に点在するものの中でもごく小さいオアシス。

恐らくはあの洞穴の下に住んでいた者達が主に利用していた場所なのだろう。

一夜の寝床とするには何もない砂の真ん中よりも遥かに良い。

そのまま二人はこの場所で一夜を明かし、今に至る。

女は暫し戦の跡を眺めた後、またすぐに視線を前方に戻し、泉のほとりでしゃがみこんだ。

「　　む？」

水で顔を洗おうとする前、ちよつとした違和感に女が疑問の声を上げつつ首を傾げる。

だがその正体が認識できず、顔を水に近づけてばしゃばしゃと顔に水を掛けた。

ぶるるつと水を払うと、ようやく頭の中が明瞭になってきた。

ここまで寢覚めが悪かったのは生まれて初めてかもしれない。

そして思考がしっかりと働き出した後、

泉に映る自分の姿を見つめ、女は”自分自身”の違和感を認識した。

- -

「ホルスー！」

なんともいえない迫力を持ったその声で男は大儀そうに目を薄く開く。

「んー・・・あー・・・お前、最後くらい格好良く締めろよ・・・」

男は目を擦り、口を大きく開けた。

まだ目が覚めきっていないのか、意味が不明瞭な言葉を発している。

「何をわけの分からない事を言っている！　それよりだ」

女が腰は手を当て、無言で男を睨み付けた。

ただならぬその気配に気だるげながらも男は体を起き上げる。

と、女の変化に気がつく。

昨日、女は戦いの途中に腹部に大きな傷を負った。

傷自体はすぐに修復されたが、

服を修繕するなどという能力は無い。

その結果、女がかなり際どい格好となっていた事を男は気づいてい

たのだが、

戦いと脱出の際のドタバタでそれどころではなかったという事もあり、

結局指摘する事を忘れていた。

が、それを自分で気づいた女は泉で自分の姿を確認しつつ、

破れた部分の所々を結んで何とか取り繕える程度に戻したようだ。

だがその後、この事を教えてくれなかった男への不審が募ったのだ。女が今、妙に高圧的に迫っているのもその為だろう。

そして

「あー・・・残念。直しつつか」

その余計な一言で、女の怒りが爆発し、鞘つきの短剣が男の顔に食い込むこととなった。

- -

「そういえば」

先ほど男を殴った短剣の鞘を抜く。

抜き身の短剣は陽の光に晒され、いつにない光を放っていた。

三分ほど気絶していた男は鼻の頭をさすりながらそれを見て目を見開く。

「待て。早まるな。人殺しは良くないぞほんと」
片手を前にだしてずるずると後退する。

「何を勘違いをしている。

と言っよりお前は死なないだろうが・・・」

女は薄い視線を男に投げかけつつ、溜め息をこぼす。

「そうではなくてだな、この短剣なのだが
一発殴って気が済んだのか、
もはや女は何事もなかった様な表情である。
寧ろ何かを男に相談したいような面持ちだ。」

男はその様子を見て、女の意図を悟る。

「あー……。多分、だが、そんなにあいつが入っていると思うぞ」
「やはりか。 奴の死に際に放った光がこれに収束しているように見えたのでな……」

で、結局の所どうなったのだ？ 奴を封印できたと言う事か？」

「いや 封印というより、つてあれ？」

お前、あいつが消えた時の台詞、聞いてなかったか？」

男が首を傾げる。

「ああ、何やら聞こえてきたな。」

大様な名前を言った後” 契約は成った” がどうか……。それがどうした？ と言う表情で男を見返す。

「そのまんまだ。 霊獣が自分の名を名乗り、

契約を交わすつてのは即ち相手を自分の主と認めたつて事だ。

お前の剣に宿ってるわけだし……。つまりあの龍はお前の命令にいつでも従うつてこつたな」

男の説明に、女はしばし呆然とする。

「つまりそれは、私が敵と戦えと命じれば

この短剣から奴が出てきて戦うと言う事か……。？」

「そういう事だな。 正確に言えば霊獣は契約者が” 名前” を呼ぶ事で姿を現し、

その後命令をする事でそれを遂行するって事らしいがな」

女は信じられない、といった顔で手に持つ短剣を見つめる。

「契約・・・とやらの移行はできないのか？」

短剣を見つめたまま、やや弱い声で問う。

「移行・・・？ そりゃ無理だろ。」

契約条件を満たした奴だけが”契約者”なわけだし　　って待てよ？」

男は思い出したように顎に手を添える。

「確かあいつ、”お前達”に自分の力を託すとかなんとか言ってたな・・・」

つつー事は俺にも命令の権利くらいはあるのかもな」

それを聞き、女は目を開く。

「なら、この短剣をお前に　　」

女は不安なのだ。

あの霊獣の力は一步間違えば軽く一つの街を吹き飛ばしてしまえるもの。

そんなものを自分が制御しきれる自信などなかった。

「だーめだ」

が、男は女の考えをすぐに読み取り、首を横に振る。

「む　何故だ」

そう不機嫌そうに問う女の眼前に男は人差し指を突き出した。

「まず一つ、呼び出された後に”命令”はできるかも知れんが、霊獣を”呼ぶ”事が出来るのは一人。これは絶対だ。」

つまりはアウラ、例えば俺にその短剣を渡そうとあいつを呼ぶ事はお前にしかできない」

未だ納得が行かないといった面持ちの女の様子を見つつ、

男は立てた人差し指に中指を加える。

「二つ目、その短剣はもはや霊獣を封じた”魔陣器”になっている。契約者以外が”魔陣器”に触れ、迂闊な魔力を送り込めば、

【再契約の儀】に入る。

その霊獣の場合、契約条件が【力を示す事】だったな。

契約を辞退すれば何も無いだろうが・・・

お前が居なかった場合、魔陣器に戻す事も出来ず、

>>今の世を見てみたいくとかなんとか言っただけの龍が世界を飛び回る。

っていう事で昨日の二の舞だ。わかるか？」

その言葉にはさすがに女も俯いた。

昨日のような危険な事をまた招くわけには行かない。

男はさらに指を一本加える。

「ラスト三つ目、自分を信じる。

力なんつーのは間違った使い方をしなければいくらあっても問題無い。

その力は少なくとも、俺なんかよりアウラが使ってくれた方が余程良いと思うぞ？」

と微笑する男の言葉に、女は眼を丸くし、しばしの間停止する。

が、すぐに男から目を反らし、

「さ、最後のは・・・納得が行かないが・・・」

やがて諦めたように溜め息を吐いた。

「私が持つしかない事はわかった・・・」

そう言った後、じつと手に持った短剣を見据えた後、それを掲げた。

それを見た男は女の意図を理解し、一瞬躊躇したが、

その後口元を緩め、腕を組んでその様子を傍観した。

女は昨日の龍の言葉　自ら名乗ったその名前を思い出し、言葉にした。

「ゼノス！　姿を現せ」

途端、掲げられた短剣が煌々と輝く。

その光はやがて視界全体を埋め、辺り一体を白に染めた。
女が眩しさに目を細めつつ、息を呑む。

ポトツ

妙な音がした後、短剣の光が消えた。
予想されたあの巨大な龍の姿はどこにもない。

男は何故か肩を震わせ、女はきよろきよろと周りを見回している。
そして

>みゅうく

「え？」

と、地面にはつぶらな瞳をした、
手のひらサイズ程度の黒い”羽の生えたトカゲ”が女を見上げていた。

それを見た女は額に手を当て、しばし考え込む。

ぶ

後ろから唇という栓が取れた音がする。

「わははははははは！！」

男が溜め込んでいた笑いを一気に吐き出した。

「ホルス」

凍えるような空気が女より発せられる。

「お前、知っていたのか？」

そのただならぬ空気に男はびくりとし、笑いを止める。

「い、いや、そいつが今は力を失っているってのは予想できたけど
な・・・。」

そんな姿になっていたのは予想外だった」

本当だぞ？と付け加えながら男は警戒する。
また顔に凶器食い込まれてはかなわない。
だが、女は軽く溜め息を吐いた後、
意外とあっさり「そうか」と納得した。

「で、いつか、元の姿に戻るのか？」

しゃがみこみ、黒いトカゲの顎を撫でつつ男に問う。

トカゲは心地よさそうに目を閉じつつ、みゅ、と声を出している。

「恐らくな。霊獣は「死」に相当するダメージを受ける事で
力を一時的に失う。

予想・・・だが元の力を取り戻すのは20年程度は掛かると思う
ぞ」

「そうか・・・。元に戻るか」

女のその返事に何やら少し残念そうな響きが混じっている事に、
男はすぐに気づいた。

「アウラ・・・お前、そのトカゲ状態気に入ってるだろ？」

「ああ。これはこれで愛らしくていいではないか」

臆面も無く女はそう言った。

いつの間にか黒羽トカゲ、もとい神炎龍ゼノスは女の肩に乗り、
頭を摺り寄せている。

契約者だから懐いているのか、それとも女の物腰によるものなのか。

何れにしても・・・

仮にもそいつは世界を滅ぼし兼ねない霊獣だぞ、
と男はその様子を見て呆れ顔で息を吐いた。

「さて、これからどうするのだ？」

と、女は肩のトカゲから目を離し、男に向き直る。

男は、んー……と悩むように上を向く。

「そうだな……。この近辺にはもうとりあえず用はないしな……
一度”家”に帰る事にする」

それを聞いた女は大きく二度、まばたきをする。

「意外だな……。家などというものがあるのかお前に」

そう本当に意外そうに言う女に

「失礼な奴め……。俺を一体何だと思っているんだか」

不愉快そうに男は女に細めた眼で睨む。

「世捨て人とか……。仙人とか……。そういった類だろうか」

そう顎に手を当てながら言う女に、がくつと頭と垂れる。

「……。んで？ お前の方はどうするんだ？」

溜め息をまじえつつ男は問う。

その問いに、女はしばし目を開き言葉を失う。

「ん？ どうした？」

「い、いや そうだな……。」

俯きながら言葉を濁す。

実は女自身、もはや男に付いて行くのが当たり前だと思ってしまっていた。

ようやく見つけた同じ時間を過ごす者だ。

この男と共に戦う時は、今まで独りで戦ってきた自分としては、余りにも居心地が良すぎた。

女は首を振る。

だがしかしこの男と自分ではそもそも役目が違う。

自分は【人を助ける者】

男は【争いを止める者】

そう、各々の使命を全うしなければならぬ。
それを違える事は生きる意味を失う事。

男とてそれは同じであろう。

何やら複雑な顔をして考えにふける女を見て、

男はぷつと笑いを溢した。

それに気づいた女は「何が可笑しい」と、男を睨み付ける。

「いや」

男はそう呟き、笑いを噛み締めるのを見て女は「む・・・？」と首を傾げる。

女がどんな事を考えていたか、

男は女の表情の移り変わりを見てなんとなくわかってしまっていたからだ。

「さて、と」

男は思い立ったように【転移】の印を描く。

自らの家　根城に居る筈の者の顔を思い浮かべながら。

女はそれを見て

「もう行くのか？」

と、やや蔭りを見せる表情で言う。

「ああ」

どこか淡々とした返事。

「　　そうか。では　　達者でな」

女はそう言って手をあげた。

だが、男は紡いだ【転送】の印に手を当てる事なく、

「　なんてな」

口元を上げ、違う方向に手を差し伸べた。

先ほど、女が何を考えていたか、

男がすぐに理解した理由。

それは、自分も同じ心境だからである。

ただ少しだけ、からかってみただけだ。

最初から別行動などするつもりはない。

さらに言えば、今の自分達を生み出した【親】が、

”共に使命を果たせ”と言っているのだから・・・。

とはいえ、違う役割の者が一緒に行動するのだ。

何かしら言い訳となる決まりごとを作る必要があるだろうか

「アウラ、一つ俺と【契約】をしないか」

手を差し出したまま、男は女に問いかける。

「　契約？」

女は男の意図が分からず、首を傾げた。

「そう、俺はお前の【人を助ける】役目を手伝い、

お前は俺の【争いを止める】役目を手伝う契約、だ」

「　」

その”答え”に女はしばし言葉を失う。

単純な事だったのだ。

それぞれの役割を、それぞれが助け合えばよいだけ。

役割の違いなどという隔たりは、その程度のものだった。

「契約条件は、この手を取る事。

さあ、どうする？」

と、男は悪戯を持ちかけるような顔でそう言った。

女は眼の前に差し出された手をしばし呆然と見つめた後、
やがて眼を閉じて静かに微笑む。
悩む事など何も無い。
答えなど、とうに出ている。

女は眼を開け、男の眼を見据えながらゆっくりと、

差し出された手を取った。

月虹 運命交叉 E n d

<・契約> ; (後書き)

この続きとかのプロットは出来てはいるのですが、
いつ書けるやら・・・

最後まで読んで頂きましてありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2430d/>

月虹-運命交叉-

2010年12月5日11時34分発行